The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	追悼本録
Author(s)	
Citation	懐徳. 1925, 2, p. 1-186
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88704
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

原稿の朗讀

北里龍堂

今は二人とも故人となられたが、天囚居士に介せられて、朝日新聞社の上野理一翁が親しく來訪せられ、母堂の歌集編纂を托せられた。母堂を想ふこと深き翁の孝心に動かされたのと、外ならぬ天囚居士の依頼であつたから、不肖をも顧みずして御引き受けして出來上つたのが『仙柔遺草』である。勿論一旦御引受したからには其校正にも自分が印刷所へ出かけて行つた位であつたが、さて其はしに天囚博士の序文と共に自分にも一言書けと言はれた時、博士の序文があれば、それで十分では無いかと一應御斷りしたが、否さうで無い、自分は漢文で書くから、君は國文ではし書をせよと言はれるので、もだし難くて書くは書いたが、一應相談に天囚居士を松ヶ枝町の寓居に訪問した。

書齋に對座するや、すぐ原稿を開いて居士に渡さうとしたらば、それに手も觸れず、君一寸讀んで聽かして呉れ給へと居士は言ふ。下手な文字で書きなぐつてある他人の原稿を見るのが面倒と思はれたのかと思つて、言はるまに〳〵朗讀した。自分の書いた原稿を自分が朗讀するのであるから、これほど樂な事は無い、が、それでも一所讀み澁つた所があつた。終りまで目をねぶつて聞いて居られた居士は、全体に於て結構だ、たゞ君が讀まれた時一寸引かゝつた所、あすこを少々變へて貰つたら如何だろう、聲を出して讀んで人に聞かせるにも、聽くのにも澁滯の無い所に文章の妙味はあるよと笑ひ〳〵言はれて、自分も成程と其點を即座に書き改めた。

これは一寸した事であるが、自分に取つては今にも忘れ難い敎訓であつた。幾多の方面から居士を追想せらるゝであらうが

かりそめの一言ながら今も猶

（大正十三年十月五日）

故西村先生を憶ふ

小西宗次

私は名もなき大阪の一介の商人であるので、我邦學界の先達とも云ふべき西村先生の追憶の記に筆を染めるなどゝは、夢寐だも思はなかつた所である。それで懷德堂講生の一人にして堂友會の幹事たる方より、先頃懇篤なる御依賴のあつた際も、不肖その任にあらずとして固辭して受けなかつた、けれども退いて考へて見ると、私も亦先生の高德を欽仰する點では敢て人後に落ちない一人である。加之先生の公開的撰文中の絕筆である大阪木綿業記念碑の碑文を御願ひした前後の事情、及びそれに關聯して親しく先生に御目に掛つた當時の印象等は、事が總て最近に屬し、それに學界の方面に何の緣故も有せない私のやうな者が、一體先生をどう思ひどう感じたかを見る上に、何かの資料を提供しはせぬかといふ事に心附いて、漸やくの事に私の見たまゝ接したまゝの先生について、その追憶の一、二を書いて見やうと決心した次第である。

先生を煩はして撰文の事を御願ひした動機は、大正十二年三月大阪木綿業組合の關係のあつた功勞者を表彰するの議が起り、同時に記念碑建設の議が起つた事にはじまり、次で私共數名の者が端なくも委員に選ばれた事に萠してゐる。

委員の者は、最初碑文の文體を漢文にする事を決議した後、これが起草者を誰れに御願ひするかについて

可なり頭を惱ましたのであるが、磯野秋渚氏の有力な提案の下に、大阪に深い緣故を有せられ、而も當代に於て我邦文章道の第一人者である西村先生に御願ひするが、最も意味深しと云ふ事に相談が纏まり、不取敢磯野氏を介して先生の內意を訊ねて戴いたのである。その中には、十月十二日に記念碑の除幕式を行ふ豫定であるので、遲くとも八月の中旬までには執筆を完了して戴きたいとの厚釜敷い御願ひも記されてあつた。ところが先生には平常でも非常に多忙な上に、その秋宮中に於て取行はせらるべかりし東宮殿下の御慶典に關し、宮內省御用掛としての本職上、殊に多忙を極めてゐらるゝ際とて、遺憾ながら謝絕したいとの返事であつた。七月十日附磯野氏宛に認められた御手紙には、その間の消息を次のやうに記してゐられる。

『……木綿業記念碑は十月建碑式とのこと、切迫には閉口仕候。今少々餘裕有之候はゞ起草相試可申、如何に御座候哉。もし期限延し難しとの事に御座候得ば、御斷り申外無候まゝ不惡御傳被下度希上候……』

併し私としては、このまゝに他の方へ御願ひする氣にはどうしてもなれない。そこで磯野氏の紹介狀と助言とを得て、是非共先生にとの堅い決心を懷いて時を移さず七月十四日東上の旅に上り、翌十五日の午前八時旅裝を解く暇もない程にして、急遽大崎の自邸に先生を御訪ねしたのである。然るに、先生には既に御出かけの後であつたので、私も亦跡を追つて島津家々史編纂所に到り、そこではじめて先生に御目にかゝる機會を與へられたのである。

私は先生のやうな御方に初對面の挨拶をどう申上げてよいか、內心少からず迷ひつゝ、先づ磯野氏を通じて御意響の程はよく〳〵承知しながらも、組合前後の事情は私を驅つて押して推參せしむるに至りし非禮の罪を御わびした後、先生にして何とか繰合せ下さつて拒げて撰文の事を御承諾下さるゝならば、大阪に深き緣故を有せらるゝ先生の事ではあり、旁々我々の記念碑が一層の光輝を放ち、從つて組合全員の滿足と光榮とこれに若くものはないとの意を述べて、只管先生の明斷と熟慮とを請うた。

先生は此時ぢつと私の話に耳を傾け、暫らく默考を續けてゐられたが、徐ろに口を開いて『何分書面にて

申上げたやうな事情故、不惡御諒承を得度い、せめて年内中にとの事ならば、復た考へて見る餘地もないではないが」との言葉を漏らされた。私は先生の此の御言葉をそのまゝ受け容れて歸るべきであつたかどうかそんな事まで考へ及ぶ暇もなしに『その御言葉で大阪に待つてゐる組合の人達が承知するやうなら、私は押して斯かる非禮を申出るのではない。どうか微意のある所を幾重にも酌んで下さつて、扞げて何とか御考を得度い』と、不束な言葉ながらに只管衷情の程を披瀝して先生に愬へた。先生はぢつと私の云ふ所に耳を傾け默つたまゝ天井の方を瞻詰めてゐられたが、暫らくして口を突いて出た御言葉は『諾』と云ふ力强い一語であつた。

私はその間いら〳〵した心を抑へつゝ、固唾を飲んで先生の御返事を御待ちしてゐたのであるが、突如として腹の底から爆發したやうな此頼母しい『諾』の一語を聽いた時は、思はず頭を下げて、何んだか身ぐるみ救はれたやうな感じと同時に、男性的で而も任俠的な先生の深い御志のあらはれに、無限の謝意を表した事である。

先生と私との間に取交された用談は、その後は一瀉千里で快く進行した。私も急に肩の荷が下りたやうな安易な心になつて、以下のやうな御願ひを次々と申進めたのである。

一撰文は可成平易な漢文體で起草して戴きたき事

一石材の關係もあるので、字數は五百字までを限りとして短文にて御願ひしたき事

一急くの御願ひではあるが、八月中旬までに起草、送附のやう御取計ひを御願ひしたき事

先生は此等の申出に對し、何等こだわつた態度をとられずに、總て快くこれを容れて下さつた。そして私の携へて來た草稿を即座に手にとり、それを點檢しつゝ朱書加筆の勞に服して下さつた。稿の憑る所が主として『大阪府全誌』にありとの說明に對しても『それならば可ならん』とて滿足の意を表せられ『自分が今撰文の件を引受けたのは、興味の點から云へば木綿と云ふ事が自分の心を惹いたからである。舉世滔々華美

を追ふ現今の時風に對し、我邦上下の人を通じて木綿の盡すべき任務は極めて多い』この述懷もその時漏らされた。此述懷は私が二度目に御目にかゝつた時も漏らされた言葉で、先生の志の一端を窺ふに足ると思ふ。現に先生御自身は薩摩の紺飛白に小倉の袴といふ扮裝で、悠然と卓に倚りつゝ私と對談してゐられたのである。その後先生は、堅く約を履んで八月十一日には撰文の玉稿を私の手許に屆けて下され、その際の手紙には

「……御依賴の碑文別紙の通起草致候。事實に相違無之候はゞ此儘に建碑相成度もし又書加ふべき點も候はゞ御申遣被下度候……」

とあつた。ところがその中、綿の我邦に入りし年代につき、さる同業者より異議の申出があつたので、私も他の委員と共に心を惱し、然るべき人々の意見をも聞いた後率直に意を致して一應先生の存じよりの程を御訊ねしたのである。然るに先生は、此異議に對し何等の含まるゝ所なく、諄々として指示さるゝ事竭きず、殊に十月十六日磯野氏宛の手紙の中には、委曲を盡して先生の解釋の正當であるべき所以を說いてゐられる。私はその手紙を讀んで、先生が學者として何人も侵す事の出來ない深い造詣と堅い信念との下に、周到なる用意を以て撰文の事に當つて下さつた所以を目のあたり知つて、今更の如く先生に對する欽仰の念と先生の撰文になる記念碑の光榮を懷はざるを得ない。手紙には左の如くある。

「……元來木綿の起原は支那も日本も其年代確定せず、通鑑の史炤釋文を引きて梁時已に有之と云ふ者あり。梁代の綿は今の木綿に非ずと云ふ、恐らくは然らん。本草綱目は宋末始入江南と爲す。其外にも宋末元初說あり。小生も之を信じ居候。我邦にては古のゆうは今の木綿に非ざること、梁代の綿のその木綿に非ざると相似たり。諸書引、類聚國史の延歷年中綿種傳來其後中絕すと。安齋隨筆は之を駁し、此は別種なりと爲す。支那にて宋末元初渡來せしもの我邦の延曆の昔（唐代）支那を經ずして渡來せしと云ふは信じ難し、別種と云ふもの蓋し當れり。小生は倭訓栞を初め諸書に天正永祿比渡來と云ふもの眞に近きか

と思ふ。慶長見聞集には大永元年說あり、何れも年代確乎たらず。大永にても天正にても足利氏末造と云ふに妨げなし、因て小生は足利氏末造と推定して、

蓋在干足利氏末造

と記し申候。蓋の字は推斷に有之候。貴書到來後獨斷にては如何と思ひ、昨日萩野博士を訪問し、碑文を示して相談致候處、同博士も足利氏末造にて差支無之との見解に有之候。若し悉く傳來の事實を叙するとすれば、延曆說又は其の異說等を擧げざる可らず、斯くしては文の長きを致すべく、此碑の主眼は慶長以後の沿革にあり。但し太物といふ日本の特稱を說明せんために木綿の性質及び傳來を冒頭に揭げしものに有之、大畧を叙するに過ぎず、小生は原文の儘にて差支無之と信じ居申候……」

その後私は撰文の御禮や震災の御見舞を兼ねて、十月下旬に再び先生を大崎の自邸に御訪ねした。三四十分で私の用談を了へて辭去せやうとすると「雨も激しければ暫らく話して行けよ」との溫情の籠つた御言葉が先生の口から出た。それでその御言葉に甘へて、その日午前中約三時間近く、極めて打融けた心持で先生の謦咳に親しく接した事である。御慶典の事、現今國民思想とその惡化の事、次では先生の大阪生活とその心血を濺がれた懷德堂の事等について、縷々として話頭はつきない。私も亦時の過ぐるのを忘れて靜かにそれ等の話に耳を傾けていつたのである。以上が先生と私との交涉の重なる場面である。私としては先生の親切な御言葉もあり、又私自身としても、先生のやうな御方を機會ある毎に御訪ねして啓發する所ありたいと思つてゐる中に、先生は思ひもかけず流焉として長逝せられて今は居られない。私の遺憾と追憶は一層の深さを加ふる次第である。

私は今先生との交涉の大體を記した筆の次手に前後兩度の往彷を通じて先生から受けた私の印象の重なる點を、述べて見たい。接した最初の印象から云へば、先生の容貌は魁偉である、堂々たる偉丈夫としての體の持主である、人によつて或は威壓に似たやうな感じを受けるかも知れぬ。けれども恐らくは禮に嫻れない

私の無理な願意をも心靜かに聽いて、終にそれを無條件に受容れて下さつた心持の推移を考へて見ると、先生が單なる智の人ではなしに、一介の野人の語をその心の底までをも嚙み分けて下さる情の人である事を思はざるを得ない、同時に又人のため世のためには、自分の眼前の忙はしさや差迫つた困難な事情等をも枉げて盡して下さる意氣の人である事をも思はざるを得ない。上に述べた『諾』と云ふ御言葉の中には、實に斯かる意味が籠つてゐたのである。

私の先生に御目にかゝつた時間は、兩度の往訪を籠めて五時間の餘には出ない。けれどもその時間の中に私は自然にあらはるゝ先生の偉大なる人格とその高風の中に引入れられ、しまいにはその魁偉な容貌と、堂々たる態度から生ずる威壓の領分をも飛び越ねて、一見舊知の人と云つたやうな親しい感じと、酌めどもつきない先生のその溫情に包まれていつたのである。初對面の時は先生は殊に御忙しい際であつたが、少しも悠々とした態度を崩されずにそれからそれへと話を續けて行かれた。『諾』と云ふあの一語のあつた後には、碑石の事、建碑の事、地域の事、彫刻の事、實に痒いところに手のとどくやうな注意と指導とを與へて下さつた。私の感激は先生の此態度の中にどうしても融け込まずにゐられなかつたのである。

先生に對する私の敬仰の念を、何等包む事なしに赤裸々に述べる事を許さるゝなら、私が竊に想像して未だ得なかつた現今に於ける大人物、大政治家の襟度は恁うもなければならぬのではないか、赤心を人の腹中に置くと云つた風のあの純眞な態度、磊落家放膽の底から出るやうな朗々たる音吐と呵々大笑さるゝあの開放的な態度——私は一世の師表として、先生のやうな風格の人に撰文の御願ひをした事を、我々同業者はもとより私自身としても永久に銘記して忘れてはならぬと思つてゐる。

因に云ふ、先生を煩はして御忙しい中を取急いで起草して戴いた撰文は、その地域の事に關し府の當局との間に意見の相違あり、ために大正十三年二月二十六日に建碑式を擧行するに至つた。茲に謹んで地下の先生に遷延の罪を御詫びする次第である。尙左に先生の生前心血を濺がれた大阪木綿業記念碑撰文の全文を掲

ぐる事によつて、私の先生に對する追憶の記に一先づ筆を擱く事にしたい。

大阪木綿業紀念碑

木綿莖高二三尺開レ花結レ子熟則裂而綿出彈以爲レ絮紡織以爲レ布絲粗質厚俗稱二太物一本產二于天竺一其傳入二我國一蓋在二于足利氏末造一厥後播殖遍二于諸州一至二慶長年一大阪有二販鬻爲レ業者一元和二年始設二仲間一安永天明間有二株仲間之設一株謂二特許專業一仲間即今同業組合也當時同業分爲二七斑一皆得二官准一繳二納稅銀一天保十二年暫停二株仲間一亡レ何其制復興維新之際百度更革商業舊慣亦皆廢明治元年官令三大阪木綿商設二仲間一因定二章程一以復二舊慣一六年聯合二同業八斑一稱二大阪木綿太物仲間一十年改二訂章程一網二羅問屋仲買小賣三業一越三十四年政府頒二布重要物產同業組合法一乃設二大阪木綿太物商同業組合一三十八年與二吳服商組合舶來織物商組合綿禰留同業組合一合同聯盟設二大阪織物同業組合一分置二四部一以レ類相聚其第二部爲二木綿太物商一大正十二年又改二訂定欵一遂廢二部分一於レ是木綿商胥議別設二二部同志會一以圖二斯業益隆一立二石於四天王寺域內一以紀二沿革一勒二有功者氏名於碑陰一以傳二不朽一以下予嘗住二大阪日一久上故來請レ文夫布帛菽粟民生不レ可二一日闕一焉而木綿太物之用蓁多且廣大阪商人聚レ之散レ之利レ用厚レ生資二于殖產一所レ關不レ小公益存焉乃不レ辭而畧叙二沿革一俾下後之留二心商事一者有上レ所レ考焉

大正十二年十月

文學博士　西村時彥撰

讀延德本大學章句

安井小太郎

延德本大學章句一卷。重刻文明本者。其文字係桂菴手筆云。桂菴山口人。學洛東南禪寺。應仁元年入明。留七年。歸仕薩摩島津忠昌。國老伊知地重貞。容桂菴之言。刻大學章句。後十三年。桂菴復刻于桂樹院。則是本也。寶治中陋巷子者刻論語集注十卷。先於此二百四十餘年。此爲我邦刻新注書嚆矢。寶治本予未之見。文明本亦無傳本。新注古刻書。海內獨有此本而已。友人西村碩園。獲於重貞之族孫種子島氏。奉之如拱璧。捐貲影印一百部。以頒同好。癸亥大震。書皆燬于火。乃再影印一百部。裝釘未成。甲子三月獲疾。至七月遂不起。九月嗣子敎寄一本。且附書曰。先人在時。欲致左右。書未成。忽焉長逝。今承遺志而獻之。嗚呼予不得受之於碩園。曾幾日爾。乃爲身後之贈。可勝哀哉。因憶。明治十三年。予在雙桂精舍。碩園寓重野成齋宅。來於精舍聽講。白皙長身。溫乎其容。眉目秀明。音吐如鐘。語帶南音。問其鄉貫種子島人也。種子島去予鄉稍近。由是情好日密。嘗戲校薩人所愛誦賤緒多卷。予作序碩園跋之。以賣於書估。挾所得與飲於酒樓。一夕而盡。當時予與碩園俱少年。眼空一世。以爲天下之事可指呼而定。見諸老先生抱朽簡蝕冊。玩宋槧元刻者。竊嘲爲冢中之人。已而碩園適大阪。姓名顯聞。不相見四十餘年。大正壬戌春。移居于東京。始相會小牧櫻泉宅。則老氣稍生。面微黑。頭髮亦種種。而溫乎其容。則與齒相長。益渾然矣。又甚嗜古書。聞有珍籍。則傾橐而購之。日埋沒其間。欣然不知老之將至。曩之嘲爲冢中之人者。今也駸駸乎就其群。又將加厲。蓋碩園之志至此一變矣。今思文運昌明。絃誦千里。戶無不學之丁。而後生小子。唯新是競。先哲遺籍。束高閣蠹魚而不顧。後之徵文獻者。將何從而求之乎。碩園所集書。率前人著述未刊刻者。及室町以來古刻書。皆可以發幽光資參訂者。豈徒古玩之云乎。使碩園猶在。則予必知其志再變。蒐羅衆書。別啓津途。作一大巨冊。以嘉惠藝林。潤色昭代也。此蓋碩園之志也。而不及見其再變而逝。可惜哉。

碩園君の逸事

磯野秋渚

西村君碩園のいまそかりし時を思ひて、逸事の二三をかきつく、

君の名時彦を大抵は、トキヒコと呼べど、實はトキツネと訓ずるよし、自ら語られき、別號の天囚は、書生時代のものにして、公羊傳序の疏にある意義とは全然別なり、四方の債主より包圍攻擊を受けしとき、嗚呼僕は天の囚なりとの嘆聲より、ふと思付きたる雅號とぞ、後の道德家たる西村君としては、ふさはしからぬ號なりと自らも思ひ、人よりも進言したるが爲に、色々と考案の結果、碩園と改められたり、その生地、種子島のオホゾノに因みてなりといふ。

君平生友に厚かりき、籾山衣洲の臺灣より歸來せしや行李蕭條、哀むべきさまなりき、君十年の舊雨を以て、色々その間に斡旋し、人を介して須磨の藤田氏に賓師として聘せしめ、月次三四回の開講に、若干の報酬を得て、衣洲は一生を優游自適することを得たり、君常に衣洲を引廻し、文雅の筵にして君の在る限り、衣洲の顏を見ざるはなかりき、君が浪華の文學を叙する文字には、必ず衣洲の易學及び詩文に言及せざるはなし、衣洲は君があまりの引廻しに贔負の引倒しは少々閉口と頭を掻きをれど、君は少しも顧みざりき、衣洲の歿するや、自ら碑文を撰みて、その德をたゝへ、碑刻成りて資足らず、君自ら衣洲の舊知に檄して補助を仰ぎ、こゝに始めて建碑成せり、君が衣洲に於ける高誼は、終始此の如し、

君初め桃谷に寓し、次に弓町に移り、東京より歸來後は天滿の松ヶ枝町に居を占め、終焉の地となしをりしが、官命により東京に移住して、遂に身まかりしかは、その事叶はずなりしぞいとも遺憾なる、松ヶ枝町に在りし頃は、松町の號を用ひられたり、その對門に古松一樹あり、枝幹枯れたれば町内有志その原形のまゝを保存し、石を樹て、君の文を請ひて、之れを刻したり、君は深くこの松を愛し、日夕之れに對して、文

を思ひつゝありしが、今は松と共に年を長うせざれば、必ず魂や飄々として此の松梢を離れずやあらん、君が碑版の妙は、天下に定評あり、浪華及び附近の刻石は、君が手になりしもの多かり、余の知れる所にては、天王寺境内なる木綿商組合の記念碑こそその絶筆なりしかと思ふ大文章は安井道頓の碑などといふべきか、

西村時彦君の事ども

陸軍中將　河内禮藏

予は西村君と同郷にして齢も君より長ずること三歳に過ぎず、故に幼少より相交はり郷儒前田豐山の下に同學の友となり交情益々深きを加ふるに至つた。幼より穎敏學業群を拔きしが、上京して重野嶋田兩先生に就くの後、業益々進むだ君の上京は明治十三年にして、君十六歳の時なりしと覺ゆ。君の家は學者の家にして、母方の血統も亦累世の學者であつた。君の大成せし所以のもの、一は此血統の然らしむる所にあらざるなき歟と思はる。

予は明治十五年陸軍士官學校に入り、君と向ふ所を異にし爾後居所を異にすれども、其交情に至ては毫も變ずることはなかつた。君の居を大阪に定めてより後は、大阪を過ぐる毎に訪問し、又家族引連れ數日間宿泊せしこともあつた。若し訪問の閑を得ざることあれば、必ず停車場に出迎はれた。予が戰地より歸還の時などは、夜半の通過なるにも拘はらず、母堂夫人迄も出迎はれたことさへあつた。

日清戰爭の際、予は歩兵第十八聯隊に在て、元山より平壤の背後に行動し、平壤を占領するや突然陣中に

君の訪問を受け、意外の對面を喜び歡談久之せしことがあつた。其時君は京城より第五師團司令部に屬し、野津將軍の下に從軍記者として平壤に入つたのであつた。此時予は中隊長であつたが、平壤滯陣中は君は屢々予を訪問せられた、予の宿舍に來り饗應を受けたることは當時の記念にして又一の慰安なりしとは其後君の常に語るところであつた。（予は食事を命ずるに給養軍曹を呼びたりしが、其給養軍曹なる語は君が永く記憶して忘れざるところであつた。）其内君は赤痢に罹り内地に歸還さるることゝなり、此戰役の從軍は此處に終りを告げたと覺ゆ。

君今回の發病は本年五月十一日であつた、予は其以前より鄕里に歸省中であつた、が五月九日東京に歸着したので、翌十日夕君を訪問した。待つこと少時の後君は歸宅したが、『今日は寒さを覺へ、役所にては奉書紙を下着の間に挿し入れて僅かに寒を凌いだ。』と云ひ、夫より故鄕の談話に時を移し、夕食の饗應を受けて余は辭去したりしが、後に考れば酒の量平日程にはあらざりしかの感があつた。其翌日より床に就き、母堂夫人等の苦心介抱も其効なく、肺炎神經衰弱尿毒症と、經過重體の一方に傾き、七月二十九日病院に於て遂に逝去せられた。誠に痛恨に堪へない。初め病漸く重きを加へ、特に神經衰弱の募るや、醫師は勸むるに入院を以てした。君及夫人は之を喜ばれざりしも、傍より之を勸誘し、予も亦入院の可なるべきを勸說し遂に入院を決心さるるに至つた。然るに入院後病勢轉たちまち重體となり、折角醫療看護も何等其詮なかりしことは、誠に遺憾の極にして、寧ろ自宅に於て加養し永眠に就かれしこそ、君は勿論家族の方々も本懷なりしなるべく、予は入院勸誘を悔い、後日此事を夫人に挨拶したやうな次第である。

君は報恩の心厚き人であつた。母堂に對する孝心の深きは勿論、舊領主種子島男爵家に對しても盡す所最厚く、又舊師前田豐山の後家政悲境に陷るや其整理を援助し、又重野前田兩師の建碑を企畫する等、總へて報恩の誠意に出でざるはなかつた。君は漢籍に依て學び得たる聖賢の道を實行したものであつて、實に知行合一の人と云ふべきである。

君晩年宮内省に入り、其蘊蓄する所を行詞の上に發揮し、内外の信用益々高かつた。其卒するや齢六十に過ぎず、學者としてはむしろ早世と云ふべきである。予は自分の死後君の筆を煩はさむことを期待しておつたが、今は其れも空しくなつたことは實に遺憾至極である。

已れより三歳も若き君が身に
手向けするとは思はざりしに
夢とのみ此世のさまの見ゆる哉
君の逝きにしことを思へば

君逝去の前後位勳陞叙竝に賜賻賑恤などの御事ありて聖恩の優渥なることは實に感泣の外ない次第である予は西村家に代り御禮の爲め宮内省に出頭せし時、大臣も君の爲め痛惜嗟嘆久之うせられた。君亦以て瞑すべきである。君は第二の故郷たる大阪の地に於て永き眠に就かれ、母堂も未亡人も大阪に移住して墓を守らるることゝなつた。君の最も力を盡されたる懐德堂は之より益々隆盛に向はんとしておる。是れ君の最も滿足する所であらふ。而して懐德堂の人々が君に對するの厚意親切、骨肉も及ばざるものあるは、同郷人として又友人として、予の最も感謝する所である。

西村天囚君を追懐す

堀田蘇山

西村天囚君の訃音は僕辱中にあつて接した。回顧すれば僕が始めて君を知つたのは、明治二十二年君が大

阪公論社に招聘せられて入社した時であつた。公論社の主筆織田純一君の下に、君は竹越與三郎君と卓を並べて毎日議論を戰はして居た。竹越君は兎角主筆と意見が合致せず、動もすれば口角泡を飛ばし、停止する處がなかつた。天四君は何時も中に立つて預り役であつた。公論は餘り高尚過ぎた新聞で、當時の時勢に適しなかつた。隨て發行高が僅少で持續する事が出來なくなつて廢刊した。天四君と、上野岩太郎君と、僕は、廢刊と同時に大阪朝日に採用せられた。天四君は殊に上野理一翁の信任淺からず、何事にまれ相談相手であつた。或日のこと上野翁から僕の宅に急使が來た。急ぎ今橋の自宅に來て貰ひたいとあつた。取り敢ず到り會見すると、他の用務でもないが、天四上京中の不在に、洋服屋が家財の差押へをしたそうだ。不在だから、洋服屋に會ふて解除の取計らひを遣つて貰ひたしとあつた。僕は早速洋服屋と會見し解除さした。間もなく、天四君は歸阪し、僕の宅に來り手數を掛けたと挨拶し、洋服屋に對しては烈火の樣に怒り、不都合千萬の奴だ、言語同斷の汚名を與へた、併し洋服屋の方から謂はせると、君が數月間洋服代金の支拂ひせぬ不都合で押へたと、云ふから、双方に欠點がある。兎も角、代金支拂へば天下泰平だ。天四君はから〳〵と高笑し、何さ洋服代位ひは踏み倒しもせぬよと、現金の支拂を濟まし、語て曰く、千里の馬の能率は伯樂不在で洋服屋さんでは分らぬも無理もない哩。

天四君が母公に仕へて孝心の厚かりしことは、世人の認めし處なるが、殊に君は非常の弟思ひであつた。寵弟時輔君が日清の役明治二十七年十二月朝鮮京城に於て永眠するや、豪邁の君も愁傷一方ならず、肥大の身體、痩せ細り、一室に閉ぢ籠り、他人に接することを謝絶して居た。流石の文章家もその時丈は操觚の勇氣もなく、當分呆然自失の体であつた。僕は時輔君の遺骨を京城より携へ歸り、同年十二月のぎり〳〵、神戸西村の旅舘に入り、遺骨は床の机上に安置し、直に本社の西村君に電話で歸着の旨を報ずると、天四君は間もなく遣つて來た。見れば禮裝の衣紋で、謹嚴の態度で、遺骨に禮拜し、生きたる人に云ふが樣に、時輔よ、嘸や兄に會ひたかつたらふ、嘸や苦しかつたらふ、おまへは本社の職務に倒れたのだ。心殘りもあつた

らふ。兩眼は瀧なす涙潸然として止まらず、悲哀の聲を揚げた。座にありたる面々、皆同情の涙に暮れ居た。僕は天囚君を慰め、共に歸阪の途に就き、君の曾根崎の寓所に入つた。その翌日、神葬祭で野邊送りした。爾來天囚君は時輔君の年回が來る毎に、僕が何回となく轉居したるに拘らず、移轉先き〳〵を搜し廻り、記念の贈り物を怠ることなかつた。情誼の厚きこと以て知るに足る。

天囚君は常に高橋健三先生を尊敬し、學說を上下し居た。日清の役、馬關條約講和談判の際、僕は社命に從ひ、廣嶋大本營附として特派し居た講和使として、李鴻章が來朝することになるや、本社は高橋先生と、天囚君と、僕とが特派員に擇ばれ、兩君は大阪より、僕は廣島より馬關に出發した。旅館は阿彌陀寺町笠福に定めた。愈々講和使一行が馬關に到着するの日、我々三人海岸に出で、樣子如何と視察し居た。青龍の國旗は瀛船三隻に飜り入つて來た。直ちに門司の海峽に投錨した。一行は即日ランチに搭乘し、馬關に上陸し、豫て準備しあつた旅館因乘寺に入つた。我々三人は朝より夜に掛け發電に忙殺せられ、是れ日も足らずであつた。その翌日より講和會議は春帆樓の談判所に於て開かれた。第三四回目であつたか、我が陸軍は御用船數十隻に分乘し、滿船飾を施し軍艦數十隻前後を護り、進軍の樂を奏しつゝ海峽を通過した。此時兩岸の砲臺は天地も崩れんばかりに祝砲を發射した。家々は國旗を揭げ、住民は馬關も門司も兩岸に立塞がり、陸海軍の萬歲を三唱した。高橋先生も、天囚君も、これに連り、ハンカチを打振り、或は帽子を投げ、船も軍艦もともに萬歲の聲止まざりし。講和使の旅館よりは此盛況を見て如何の感を興したであらふ。講和會議の最中に我軍の示威的壓迫と見たであらふ。

第四五回目の講和談判の歸途、阿彌陀寺町の憲兵屯所前に於て李鴻章の變あり、馬關は鼎の沸くが如き大混雜を呈し、電報も容易に受け附けず、一時通信杜絕の有樣であつた。我伊藤全權大使は即時李鴻章を因乘寺に慰問に差立てた。此大時變諸方に傳はるや、各府縣の官府、商業會議所、新聞社等より續々慰問狀を贈らんとするも、清國人に徹底する文章を書く人がない。天囚君に縋るより外に人なしとし、官廳は勿論、公

共團体等より押掛けて依頼す。君はこれを引受け悉く人を待たせ置いて書いた。高橋先生ですら、手腕卓絶の文章家と稱へて居た。斯くて翌日より李經芳代て談判の衝に當り、先づ休戰條約を認容した。時に電報の通信は半ば電信局に沒收せられ、如何に天囚君や僕が當局に嚴談するも更に動かなかつた。我々は研究の結果色々の手段を取り漸く通信の途を開いた。談判は毎日繼續せられた。彼我全權何時も談判が了ると、右と左に別れて、談判所を退去した。或日の事、談判の最中に、大阪ホテル馬關出張所よりシャンパン三四壜、談判所に取寄せた。而して彼我全權はこれを飲んで別れた。僕は此事を察知し、天囚君に謀ると浮か〳〵發電は出來ない。注意が肝要だ。天囚君は左の如く電文を認め、發信したが、本社ではこの電報が號外となつて居た。

今日の講和談判は、何時より何時まで開いた。彼我全權は互ひにシャンパンの盃を擧げ、これを飲んで別れた。目出度。

右は全く以て談判は最終の日で條約締結した時であつた。

西村博士追悼の辭

愛甲兼達

明治初年以來約六十年間に於ける我國長足の進歩は中外の均しく驚異する所にして、殊に最近十年間急激に發達せる國家の實力は所謂世界最大富强國の一を以て自他共に相許すに至れり。是れ偏に泰西百科學術輸入の恩惠にして、國家の爲に大に慶賀する所なれども、物の兩全を得難きは古今の通患にして、之と同時に一面には國民の道德的信念に一大變調を來し、識者をして所謂國民思想の不統一、危險思想の勃興に對して

浩歎止む能はざらしむるものあり此の不祥なる形勢を馴致するには必ず種々の動機原因の存するあるべきも予は國民が我建國の精神たる忠孝の信念薄弱となりたることが、其の最大原因には非ざるかと思ふなり。抑も忠孝の信念は其の根柢固より我神代以來の神道に本づくものなること勿論なれども、之を扶翼涵養したるものは偖に支那の古典即ち聖賢の敎是れならん。然るに明治以來敎育の方針は此の根本重大の要項を忘れ一に主力を智育に傾注し、泰西百科學術の修得に維れ努め、此の聖賢の學即ち所謂漢學の敎育を蔑視廢絕せしは、即ち今日の輕薄不祥なる國民思想を誘起したる一大原因なるなからんや。漢學の素養深きものは其の人品何となく奥床しく、情誼に厚き所あり、人をして覺へず敬親の念を起さしむるもの多し、故天囚西村博士の如き偖に其の第一人者なりき。君が皇室を尊崇するの念偏に厚く、又其の親に對して孝養思慕の情甚だ深かりしことは、苟も君を知るものゝ均しく敬服し賞揚せし所なるが其の溫情の掬すべきは獨り忠孝の至誠のみに止まらず、又舊藩主島津公家の爲にも常に忠實に盡くす所ありき。是れ等は畢竟其の天性の然らしめしこと勿論なれども、亦其の造詣深き漢學の醞釀醇化に負ふ所多かるべきは想像に難からざるべし。

西村博士は鹿兒島縣種子島の人、其の父祖皆儒を以て聞ゆ。君幼にして鄕里の儒者前田豐山先生に學びて神童の稱あり。弱冠東京に出て、古典講究所に入り、主として重野成齋先生に師事して其の學業を大成し後大阪朝日新聞社に入りて椽大の筆を揮ひしは天下の周知する所なり。其間著述亦多し。就中日本宋學史の一編は其の最も力を盡くせし所ならん。君固より經史に造詣深かりしと雖も、特に其の文章に至りては蓋し天禀の資當代の尤にして、多く其の匹儔を見ざる所なるべし。最近召されて宮內省御用掛となられたるも或は主として當路者に此の非凡の技能を認められたるに依らんか。

然れども予を以て之を觀るに君の文章は所謂不朽の盛事なるには相違なきも、是れ畢竟半世食祿の爲にして、其の畢生の志に至りては自ら他に存せしものあらん。古語に老て敎へずんば何を以てか傳へんとあり、君が漢學の蘊蓄と道義の修養とに至りては、蓋し今後之を育英の業に用ゐて始めて其の眞意義を發露し得へ

かりしなり。先年其の大阪にあるや懷德堂の廢絕を慨し、同志を說いて之を再興し、常に之が維持振興を以て自ら任じ、生涯之と終始するを以て其の志とせり。又曩に朝野有識の士相謀り、剛健なる國民精神作興に資せんが爲に大東文化學院を創立し大に斯道の啓發復興を企圖せらるゝに當りてや、起されて其の敎授と爲り、昨臘以來孳々として其業に奮勵しつゝありき。斯の如きは畢竟君が最終の理想にして予輩窃に用材時到るを思ひ、我國民思想振作の前途に對して大に囑望する所ありしが、何等の不幸ぞ、急遽病魔の侵す所となり、竟に復た起たず、一代の大儒をして空しく風前の一泡と化せしむ。是れ實に吾等知己友人の最も遺憾とする所なるのみならず、又以て邦家の一大損失と謂はざる可らざるなり。

予君と鄕土を同くし、年齒相近く、加ふるに共に長く職を大阪の地に奉したるを以て、特に親善莫逆、時に相會して舊を談じ、相與に此地に老を送らんと誓ひしが、俄に毀絃の歎に遭ひ、悼惜の念禁ずる能はざるものあり。君昨秋予の祖先の爲に『愛甲氏先德碑』を草し、今春又『愛甲喜春先生碑銘』を作り、而して兩碑未だ建立するに及ばずして、此の不慮の哀に遭ふ、追懷萬感何ぞ勝へん。懷德堂同人諸君博士の爲に追悼錄の編纂あらんとし、予の所感を徵せらる、予亡友の爲に衷心深く之を感謝す、仍て蕪辭を草して以て追悼の一端を述ぶと云爾。

大正十三年十月廿三日誌

天囚君の追憶

土屋大夢

希臘の古諺に「人は天の囚徒なり自から牢獄の戸を開きて逸脱を謀る可らず」と云ふことあり、プラトーは之を「ソクラテスの語論」中に引きて、哲學者敢て死を恐れざるも自ら殺すを不可とする議論の前提となせり。西村君の壯歳天囚と號せし由來は、唯錢無くして行樂の自由を得ずとの意に出でたれども、中年以後の西村君は此希臘の古諺の如く、人は天の囚徒なれば、謹で社會の約束を守り、道德と智識とを長じ、以て自から其精神を解放し、且つ同囚を德に導くべきものと覺悟せられたるが如く見受けたり。

余は十七八才の頃より大夢の號を用ひ來れるほど、元來莊周の方外を好み、總じて物に囚はるゝことを嫌ふ。故に天囚君とは正反對の思想を有する者なるが、如何なる所に相通ずる性質のありけむ、明治三十四年伊東祐侃君の家にて初對面の時より、莫逆の思を爲し、其頃は余は大阪毎日新聞に在りしも、尙屢々會して閑談し、明治三十七年余大阪朝日新聞に入りし後は、殊に親しく交れり、然も嗜好趣味は頗る相異なれり。

天囚君は美食を好む、余は食味に於て極めて無頓着なり、天囚君は交際の禮に厚し、余は無禮に至らざるを度とすれども、時に怠慢に流るゝ事あり、天囚君は狩獵を好む、余は生物を殺すを嫌ふ、天囚君は子弟に向つて諄々敎訓するを以て先輩の義務とし、勉めて之を行ふ、余は悱せざれば發せず、啐せざれば啄せずの流義なり、天囚君は筆を執る時、山水の間に在るを好む、余は執筆を煩勞とするが故に、居を移して名文を書かうなどゝ思はず、行なりばつたりなり、兩人共少々碁を打てども、碁敵とするほどの執着なく、兩人共少々謠を謠へども、天囚君は賓生余は觀世なれば、謠ふても合はず、天囚君は孔子を神視す、余は孔子も漢の高祖も人物の上には餘り差別はなきやうに思ふ、天囚君は離騷を好み、元曲に深き造詣あり、是等は余に取りて馬の耳に念佛なり、天囚君は難かしき文章を書く、余は成るべく安い文章を書きたいと思ふ、天囚君は深思熟慮を好む、余は兎角即智即案を出す、天囚君は家族親戚等に關する心配厚し、余は動もすれば自家と他人とを混同す、斯く數へ來れば、天囚君と余と仲好しでありしは、頗る解し難き樣に思はるるなり。

余の天囚君を愛せしは、其常に衆人のために好かれかしと勉めたる處に在り、殊に同社の友舊友に對して

情誼太だ厚し、是一つ。天囚君は母堂に對して至孝、又よく令政を敬し、春花秋月共に母堂を奉じ出遊して娯樂す、余は親不孝ならざれども孝行は得せず、妻に對しても唯相忘の思あるのみ、天囚君の此溫情仰いで以て我師とすべし、是二つ。天囚君は嘘をつかず、人をそねまず、人に一善一長あれば、勉めてこれを發揚せんとせり、是三つなり。然れども天囚君は何が故に余を友とせしか、これを問ふに由無し、唯先年一所に世界を一周せし時、余に向つて貴樣の善人なる事此行にて慥に見屆けたりと言ひし故、其わけを尋ねしに、ベッドに這入つて枕をすけたかと思ふともう高鼾きをかく、同室に寢るので甚困るが、胸中何等の蟠り無くよく寢る男だと思へば我慢は出來ると言へり、多分此邊が天囚君の余に交りし理由ならん、其他には覺ゑ無し。

天囚君が人のために蔭で好意を盡せし事も少々は見聞き居れども、關係者現存する故、それは省きて記さず、唯終りに一言す、君は慥に善良坦懷の君子人なりき。

『友』

木崎愛吉

九月十六日、碩園博士の五十日祭は下大崎邸に於て執行せられ、余は折からの大風雨を衝いて參列し、「祭之日、入室、僾然必有見乎其位、』といへる實感そのまゝに打たれつゝ、夕刻歸宅せしが、風雨いよ〳〵烈しく、獨り几案に對して更けゆくままに、さらでだにあたり寂しき芝山内の夜色沈沈として萬籟四方に絶ゑ燈下懷舊の情いと濃かなるものありき。その翌日ゆくりなくも懷德堂より松山教授の信書に添へて、『懷德』

誌創刊號の郵寄を受け、堂友會諸彥の計畫を以て、次號の誌面を擧げ、博士追悼號として發行せらるべき旨を承けたり。

忙手披讀、博士がその發會式席上講演せられたる一篇の筆記こそ、その精神、その語調さながらに博士の心境と音容とは、在りし日その儘に再現せられ、疇昔の祭典に打たれたる實感の更に切切として迫り來れるものあるを覺ゆ。會友諸彥に對する敎訓の汲めども竭きざる博士の情意を慕ふにつけて、余は博士の「友」といふ觀念の惻惻、人を動かさずんば已まざるよりも、數ならねども多年の厚誼を荷へる余が一身上、特に一言一句、その說るべからざるものあるに思ひ到らずんばあらず。

憶ひ起すらく、余が博士に對する初見は、實に明治廿三四年の交にてありき。當時博士は既に大阪公論に執りし椽大の筆を、其の合刊されたる今の朝日新聞の上に轉じ、緒餘大阪の新文壇に氣を吐くべく、社同人等と俱に「浪華潟」誌を創刊すべくありし際にてぞありし。是より先、余等三數子の間に結ばれたる鶴鳴社の目的とするところは、その創刊によりて如實に達成せらるべきを思ひ、一日社友と同じく博士をその北桃谷の邸に訪問せり。博士は余等無名の徒に對して、一見舊の如く、欵晤暑の移るを知らざらしめ、これを機緣として、余は博士の知を辱うすること、玆に三十有餘年の久しきに亘れりしなり。

廿六年の夏、余の朝日新聞社に入るや、日夕卓を同うして編輯の事に從ひ、公に私に受益することの多かりしは言ふを俟たず、爾後余が議政壇上の人たるべく選擧界に馳驅するに當り、更に朝日新聞社を退かんとせし時に際して、博士が余に對する忠言戒告の深く且切なるものありしは更なり、近く一昨年の冬、余が小研究の志を齎らして東京に移りし後、客秋震災の後、別後始めて博士を訪うて久濶を叙して以來、余に對する情誼の昔時に比して、更に濃かなりしは、實に余をして再生の鴻恩に浴せしめたりしものあるを思ひ、今世復斯の心友ある乎を嘆じ、無限の感慨を喚び起しつつ、自から其の友情の厚きに答ふべく、渾身の勇を奮つて業績を擧ぐるを期せんことを誓へり。而も何事ぞ、天、早く斯の人を奪へる。噫。

初め、余は博士の驥尾に附して社務の傍『浪華潟』に據り、時文の末に從事せしかど、やがて一轉境を劃して、漢學と古文との上に其の精力を用ゐるべくなりぬ。博士はかの幕末三博の一たる岩陰鹽谷先生の學統を纘ぎて、明治の漢學界に其の重きを爲せし成齋重野先生の高足たりしは贅せず、而して余が先師は同く岩陰先生の門に在りし訒堂五十川先生なりき。すでに此の契因の淺からざるものあるを以てして、博士が古文今日の衰退を歎惜するの深かりし念は、おなじく余小弟の自ら揣らずして、事に此に從はんことを望むの志を奮起せしめしこと其れ幾許ぞや。當時、偶新たに支那より歸りて大阪に寓せし衣洲籾山君の在るあり、文會の盟はこゝに訂せられつつ、博士の提言によりて『景社』を標榜し、月次一回、自宅持廻りの文會を設け且作り且批し、講習切劘の餘、文稿を淨寫して、而して正に櫻泉小牧先生に就けり。時に博士の邸は今の天滿松枝町に在り、余亦天滿宮畔なる此花町に家し、而して衣洲君は河内町に寓しつ、一牛鳴地の相近き、徵逐耆簪の樂をほしいまゝにせり。すでにして社僚放浪牧君、大夢士屋君、前後相來りてその盟を同うせしが衣洲、放浪の二君は幾くならずして道山に歸し、余亦政塵の裡に投じ、而して一朝蹉躓、徒らに嗤を鄉曲の間に買ひ、幡然として自ら改むるに急なりき。尋で故ありて朝日社を退かんとするに方り、博士は懇懇涙を垂れて余の其の職に留まるべきを苦言せられたりしに、余の顓愚、博士の忠告に從ふことを爲さず、江湖に落拓し、衣食に奔走するの醜狀を敢てして、遂に鄉土に容れられざるに至れり、境遇の非なる、自ら咎めずして、而して將た誰をか咎めん。

博士の德を德とせず、この得易からざりし心友その人に孤負したる余は、獨り門を鎖し世に遠かりつつ、かねて其の小研究に志しし我邦古金石の上に一身を托すべく、『攝河泉金石文』に次ぐに、『大日本金石史』の自刊に從事し、小編纔に成りて而して家に儋石の儲を絕てるを奈何せん。而して博士は旣に東京に移り、その學德文章を以て　内府に召され、聲譽嘖嘖、儒林の榮を極めたり。當年辱交の深きを以てして、而して余が窮狀實に此に至る、何の顏ありてか復た博士に對せん。然も一たび往いて昔日の溫容に接し、その友誼

の篤きに頼らんか、否否、假令其の恩意の渝らざるものあらしむるも、未だ其の時會には非じ。小業績の少しく世に知らるるを竢つの決して遲きにあらざるべきを思ひ、趦趄逡巡、余は遽に足跡を下大崎の地に着くるを致さざりき。されど余が一身は今や困頓窮苦その極に陷れり。『思ひ餘つた時の相談は、友人でなければならぬ』――堂友會博士講演の一片――余は乃ち某日を以てその重き脚を曳き、その臆病心に鞭ちつつ、自から『大日本金石史』一部を携へて、博士の邸をおとづれたりき。

爾時博士は　宮中に出仕し、内君すなはち代りて余に面接されしが、嫣然たる溫容當年の如く、そゝろに懷舊の感に堪へず、余はあからさまにその來意を叙べばやと思ひしかど、しばらく筆を藉りて意中を托し、再訪を約して辭去しつ。折返して博士の來書を受け、倉皇その邸に走れり。無恙乎の一語、情致千萬、余は首を俛して十年久濶の罪を謝せり。博士は破顏一笑おもむろに余に語りぬ、『金石史たしかにこれを領す、失禮とは思ふものから、こは書物の代償なり』とて手交せられたり。盎然たる恩意、余は泣いてこれを收めぬ。蓋し余の置手紙は、包まず隱さず轍鮒の急を訴へければなり。又の日、更に來書あり、『舊友萩野由之博士、金石史を見て一部申し受けたしとなり、序でに持參あるべし』との意味なり。萩野博士の盛名は夙に耳にしつつあり、何等の好機會ぞ、余は乃ち博士を本鄕の邸に訪ひ、同じくその厚意に浴したりき。萩野博士は即ち博士四十年來の舊交にして、而して今や共に宮内省御用掛たり。

他日又復訪問せしに、博士は容を改めつつ、『萩野博士は君の書物を熟讀して、君の名譽の上に何事をか考慮を運らされつつあるものの如し、知らるる通り博士は帝國學士院會員の要職に在り、事は未だ秘密に附せらるるの域を脫せざれど、今は唯博士意圖の在るところを傳へ置かんのみ』となり。余亦悚然としてこれを拜謝せり。剩へ余が糊入の途を慮かり、爲に宇佐美東京府知事に紹介して、府事囑託の員に備はらしめられしは、かけても思ひ寄らざりし博士の心入れなりしよ。

やがて談は舊事に及びつつ今日に返りつ、參商十年の情は、それからそれへと緒口をひき、而も其の間『

設言辭以規其友」の情意は、滾滾として盡くるを知らず、内君の心こめられたる晩餐の温きに、寒き日影を藹然たる春風に包まれつつ、博士の出し示されたる荒井鳴門の手稿本「遷都（平安京）前後金石遺文」外くさ〳〵の希覯圖書をさへ閲覽のよろこびに浸りて、夜分はじめて辭去したりき。

博士が金石文に趣味を有するの深かりしは、かゝる珍籍蒐集の一事に就ても窺はるべく、拙著「攝河泉金石文」及び「大阪金石史」（大日本金石史第四卷）など、松雲堂圖書目錄の出づる毎に、遙遙注文されしが如き、獨り私情の爲に余の感謝を拂ふに留まらず、實に斯學發達の上に少なからざる刺戟を與へられしを喜ばずんばあらず。わけても自身手拓のため余の同伴を求め、市内近郊に亘りて探討これ力め、中にも本年四月廿日、その從事されつつありし嶋津公爵家の家史編纂所員諸彦を俱して、嚮に自から發見されたる入間元加治なる圓照寺に存する一種異彩の板碑群を手拓すべく、先導の勞を取られしは、思へば余が博士と共にその樂を同うせし最後の旅行にてぞありける。博士は又最近舊幕府の醫官多紀家の經學に關する手稿の遺書を獲たればとて、藍溪、桂山、紹翁三世の墓碑を瀧野川の城官寺に展し、親しくその拓本を得べく、余に同行を約ししに、程なく病牀に就きて、遂にその望を果されざりき。余は日ならずして訪到手拓の上、謹んでこれを靈位の前に奠せんことを期せり。

拙著金石史は果して萩野博士の推薦を辱うし、學士院賞を拜受すべき候補の列に加へられぬとぞ聞いたりしに、何ぞ圖らん、萩野博士は急病の爲本年二月二日を以て長逝せられぬ。而も何の幸ぞ、遺志空しからず拙著受賞の事は六月八日に至りて事實の上に現はれたるは更なり、越ゑて十日には、おほけなくも　參内賜餐の御沙汰をさへ拜し、布衣の微を以てして、無前の光榮を忝くせしは洵に感激の至りに勝へず、これ實に余が爲に萩野博士へ紹介の勞を吝まざりし博士恩情の渥きに由らずんばあらず。博士は當時すでに病牀に在り、親しく授賞式にも列せられず、余が謝意を表すべく、改めて訪問せし際にも、醫禁のため一般に面會謝絶の折柄とて空しく面晤の機を失し、爾來幾たびかその病を問ひしかど、一昂一退、症候いと安からずと

聞ねしに、七月十四日、ふと往訪のをり、博士はその數日來病勢見かはすばかり穩かにて、朝夕の小散歩にさへ不自由なき迄の快氣を示しつゝ、幾旬面會謝絶の禁も始めて解かれつゝて、喜んで余を迎へ、沐浴更衣内君とも〳〵氣先好く晤談に時を移し、余が爲にこたびの光榮を喜ばれ、更に〳〵激勵のことばを與へ、余の將來に對して、尙も多大の配慮を垂れ、『道を以て集まる友は終身一生は偕當き、幽明を隔てても變らぬもの』といへる、かの講演中の意味そのままなる談片の今に耳底に存するは、思へばこれぞかの讖を爲すてふ天來の聲にてはなかりしか

博士の病は急轉せり、余が面晤を得て後數日、俄に入院の已むなきに及び、終に明治天皇祭前一日を以て長逝の悲報に接し、翌日發喪、『幽明境を隔』つるに至らんとは、神ならぬ身の誰かは思ひまうけぬべき。その夜、余は、亡き博士の枕頭に侍して、長からざりし夏の一夜を、只いつまでも〳〵生前の恩誼に報ゆべく、いとど名殘の惜まれしが、當夜余と俱に通夜の席に列せしは、親戚後醍院正六君をはじめ、同じく大阪より參着ありし松山教授、及び光吉元二郎君等、いづれも在阪人士なりしも不思議なりき。

懷德堂の事業を大成せんことは、實に博士最後の念願たりき。初め人文會に於ける發議の實行に當りては余亦その議に與かりし宿因さへあり、而して余の鄕土こそ博士が第二の故鄕として、　御用さへ滯りなく奉仕し了らば家を挈げて大阪に歸住せんとは、博士の居常口を絶たざりし計圖空しく、敢なくもその墓所をのみ亡き令弟時輔君と同じく阿部野の塋域に占むるに至らんとは、言ふもつきせぬ終天の恨ならずや。八月十日、余は博士の遺骨を中央停車場に見送り、緜緜たる悲みを涙ながらに長〳〵そのプラットホームに印しつけしこそ、三十有餘年の久しきに亘れる、世にも得がたき心友のみたまに、永訣を告げたる最後の、最後の忘られざる思出なりしか。

博士の五十日祭は早や過ぎつ、松山教授の信書に接して、この一篇を艸しつつある折しも、しのぶに餘る偲ぶ草の心入厚き記念品の、令嗣時教君より郵寄せらるるに會せり。あはれ、『士無諤々之友、其亡可立而

待」とも『燮友柔克』とも見ねし故賢の成句さへ身に引きしめられて、余の今日あるを得しめられたる再生の恩誼をここに寓せんとするなり。

（九月十九日夜半）

趣味の西村博士

後醍院廬山

明治二十九年六月、私は内藤湖南博士の推擧によりて初めて東京朝日新聞社に西村天囚博士に見ねて東朝社員となり、翌年内藤博士の臺灣日報社に移り、三十八年西村内藤兩博士の推擧によりて大阪朝日新聞社に入つた。緣といふは不思議なもので、私が臺北で娶つた妻孝子が、偶然にも西村幸子夫人と復從姉妹の血緣であるといふことが知れたので、いつしか職務以外に親族交渉が開かるゝやうになつた、長男良正が生れ落つると、生後幾ばくもない赤ん坊を、あの大きな圖態の西村博士は、左も壞れものでも抱くやうにソット懷に忍ばせて、自宅に持ち歸られ、その一顰一笑に餘念なく興がつて居られたもので、それが長じて小學生となり中學生となり、高等學校に移るまで、博士の手しほにかけて掬育されるといふ深い關係になつてしまつた。

西村博士の學問とか、性行とか、進退とかの叙述については自から其人あるべきを信ずる。私は只西村博士の趣味性について少しばかり思ひ出して見たい。

世間の誰もが知る通り西村博士は熱情の人であつた、總てに對して燃ね立つやうな熱烈な感情を注いだ人であつた、只然しその熱情は適宜に冷かな理性に包まれてはあつた、と私は信じてゐる。だから師父に對する尊敬、知友に對する情誼、後進に對する信愛は、全く腹のドン底から滾々と湧いて流れて、そこに一點の

飾りなく、純眞純美なるものであつた。これがやがてその趣味性にも及ぼして何をやるにも全く眞劍であつた。

趣味の中で圍碁のことは私には分らない、謠曲には可なりに凝り堅まつたものである、大朝社に入る前私は二年間東京入谷の陋巷に浪人生活をやつてゐた、その頃支那から戻られた西村博士と絶ねて音信をしなかつたのであるに、どこをどう探し當てられたものか、或る日突然上京してわざ〳〵入谷にやつて來られて、三疊の宅に座るが早いか朗々として鉢の木の一節を謠ひ出されたものである。尾羽打枯らした佗住居の吾等夫婦の耳には『淺ましやわれら箇樣に衰ふる』とか『自然鎌倉に御上りあらばおたつねあれ』とかの文句は如何にも感傷的なものであつた、その頃既に寶生流の一と角の天狗を以て任ぜられて居たらしく熱心に同流の特長を講義されたかに記憶する。同流の友としては、故本多雪堂博士、山内愚僊畫伯あり、毛利義誠翁を社宅に聘して茲を先途と練つたもので、師の歿後再び謠本を繙かぬやうになられたが、其でも食過ぎて息苦しくなると好んでお得意の鉢の木が呻り出された。謠の熱狂時代では何でも陸上でやると人に笑はれるといふので漁舟を築港の沖に浮べて呶鳴つたものであるといふ。

然し博士の會心の興趣は何といつても豪壯な狩獵に若くものはなかつた、これは隨分早くから嗜まれたらしく明治三十一二年頃種子島へ歸省の折にも銃を携帶されたことが手記に見受けられる、私は博士に引ずられて謠曲道を窺いて見たが獵にも引ずられて道を同じうしたものである、その熱情はトテもお話にならぬほどで、何時も夜中から出獵されて、獵場たる山麓で焚火をしながらほの〳〵と夜の明け白むのを待つのが無上の樂みであるといつて、足蹈みをして寒さを凌がれながら、飽かず其の清興を貪るが如くであつた。やがて山嶺の立こむる間に獵犬ベスが勇み立つて、先つ進む、人並優ぐれた長驅に二聯銃を肩げた博士は、その後から長いコンパスで溝をも土堤をも只一跨げと飛んで、さながら戰陣に臨む無雙の勇士の如く突進された私は繪卷物に見るやうな此等の光景を、今でも眼のあたりに歷々と映し出すことが可能である。

斯うした趣味も吾々に在ては單純な道樂に過ぎぬが、博士にはさすがに學者としての立場を忘れることなしに隨分深い研究を積まれて居つた。博士の手稿の中に狩獵史料四冊、奈加弭の音と題するもの一冊を遺されてある、前者は我が國の史籍中狩獵に關する有らゆる資料を摘錄されたもので極めて該博である、後者は萬葉以後の游獵に關する歌數百首を收む。鷹狩については特に深い興味を有たれたらしく、その藏書中六十七部は鷹に關するもので、鷹匠の流儀の上からいへば、荒井、宇都宮、西園寺、齋藤、朝倉、諏訪、伊勢、小笠原の各流に通じ、尙ほ歐洲各國の中世紀に於ける鷹狩の摘錄をも藏せられて居る。此等の資料が博士獨特の靈筆に依て一大雄篇化するの機會なくして終つたことは返す〳〵殘念である。

酒は非常に好きだつたが然し量は四十歲以後極めて少かつた、一合足らずの酒にホロリとなると誰に遠慮もなくサツサと飯に取りかゝられたので、「西村君のあれがうるさいよ」と能く呑み仲間から指彈された。東京に移られてから歸阪の折には私の陋居を宿坊とされるのを常としたが、食膳に向はれる度毎に、先つ手料理を仔細に見廻はしてその色彩を激賞された、徐に奢を手にして今度はその調味を激賞された、無論大した料理でも何でもないのだけれど、只家人の心盡しに對して心から腹から極めて熱い謝意を表示されるの一事は西村博士に在て始めて信じ得らるべきものであつたのだ。

色々な親類緣者、舊恩人、知人などの娘さん達は入り代り立代りて西村家に集つた、そしてそれ等の娘さん達が女として十分の訓練を受けると、自ら親元となつて、それ〳〵の人達に緣付けてやられた、斯うした溫いそして貴い恩義に面して幾たびか吾々側近者を泣かしめたことであらう。

博士の老儒人淺子刀自、今年正に八十五齡、過般東京を去りて大阪への路すがら『千代までと賴みし兒等は先だちていつくの里に我を待つらん』と咏み出された心事を思ふと私は涙なしには居られない、漸やく膝を容るゝばかりの假寓を森の宮にしつらはれて、月の十七日、そこに移り住まはれた、私は朝夕その溫容慈顏に接する每に、逝ける西村博士を明かに老刀自に見出すことが屢々ある。凛として强き魂はそれだ、明快

に事をさばかるゝの腦はそれだ、兒等を愛し猫を愛し花を愛さるゝの慈悲心がそれだ、歌を好み書を嗜まるゝのがそれだ。只然し、あゝ只然し如何ともしがたきは博士の生の力の存外に弱いことで、あの體質でナゼ今一とふん張り押し切つてくれなかつたかと今でも愚痴をこぼしたくなる。

碩園先生を哭す

岡山源六

私は明治三十三年の八月上海に渡り同地で始めて先生の知遇を受け、それからは先生の亡くなられるまで二十四年の間先生に師事して居ました。私と先生とは師弟といふよりも年齢に於て十歳の違ひなので先生は許すに兄弟の情契を以てせられ多年公に私に精神上に物質上に至大の恩顧を受けて居ました。私が奉天に來てからは丁度十年別れて居ましたけれど大抵月に一回は書面を往復し將來相共に爲すべき事も大方決めて居ました。病中は電報乃至手紙で容態を候ふたびに、いつも宜しいといふことで心配の中にも幾分安神して居りましたが七月二十九日瞑目されたその晩訃電を受けて大に驚きその晩は悲歎の餘り一睡も出來ずに明かしました。三十一日匆々立つて東京に赴きましたが葬禮の間に合はず十日祭と大阪の埋骨式だけに參列することが出來ました。今は何事も昔の夢で書齋に掲げてある肖像を拜するたびに人の知り得ない哀悼の情に心を曇らせるのです。先生の人物學問事歴は私の左載の詩文數篇に依つて大體明瞭であると思ひます。

對或問

吾師碩園先生。曩者擢進文學博士。余在盛京。獲報喜甚。或問先生學何如。後適吉林。適安東。亦或問焉。余

恐其以道吾師之事爲矯獎。未輒爲對。旋盛京。語之士友。士友曰。方今學者。所傳泰西新說。由我宣聖之道觀之。橫議反於常理。而欲立異售名者。雖泰西難行之事。取而流傳。不敢或慮誤人危國。方此時。微堅持正見如先生者。國家之阽危。將由誰拯之。則吾儕以牖世覺民而同任者。以吾師不對。可哉。余從之。吾師諱時彥。字子俊。號天囚。晚號碩園。世爲大隅西村氏。少孤。父執前田豊山愛其異禀。敎若己子。十二歲。以能詩古文。縣令褒奬之。十九歲。入都。受業重野成齋。是時海內通儒。惟中村敬宇島田篁村。與成齋聲華相埒。吾師才藻重於三人。簡進大學。雖大學諸生以美才藝得稱者。莫能出吾師右也。年二十三。被朝日新聞社聘。以文章氣節。三十餘年居顯要。明治辛丑。渡海。游吳越三楚間。三年而反。丙午。從遼瀋入燕都。更渡黃河。復泛長江。戊申。歷訪歐美諸國。蓋其所志於游。粗達矣。吾師爲學。以六經爲之主。九流百家。掇其精腴。而衷之性情。所爲古文。得法桐城。世以其品采之高。爲成齋以後天下文章之宗。弱冠以來。著作綦多。而其尤用力者。有日本宋學史、楚辭王注疏證、屈原賦說、騷類書目。今方爲尙書論文。成則貴紙價矣。方今士習日下。學者樂受博士號。務爲徼幸捷得之術。以求合乎有司刺取。則世譏其智詐騖於功利。不以爲恥焉。吾師苟欲合世而立名。即物而伐功。早二十年。登博士第矣。然不欲以此自徇流弊。取舍顯晦。一聽時命而自安。夫人之於物。欲求而致之。雖淺丈夫。不必不致。至未自求而致。非異倫之士弗能也。今者舉其人。殆吾師矣。吾聞之。器莫大於不矜。學慕善於自下。福莫盛於與天下爲親。吾師欲學而不自輕。非以人之尊己而學也。欲言而不自棄。非以人之信己而言也。欲行而不自乖。非以人之慕己而行也。是故。今日爲博士。豈自求而致之。良以有司識其學行辭說、夐然軼世所謂博士。推而薦之耳。雖然。博士得之。不足爲吾師榮。不得之。不足爲吾師病。徼名釣利。非其志矣。吾師往歲。慨懷德堂百餘年之廢。再興而繼竹山、履軒之遺徽。由是古道不絕如綫者。復稱盛浪華。今補京都大學講師。雖非榮職。意欲使諸生、心得聖賢義蘊之恉歸也。妍妍然樂之。平生敦於親戚故舊。見其居窮。加意存恤。其兒女致之身側而敎養。既長佽助婚嫁。雖則以此往往財竭。而弗憂焉。非亦人所難乎。傳曰。莫知其苗之碩。何也。狎攜之深也。吾安能盡知吾師。綴其崖畧爲對。

碩園先生承　恩召入宮府賦此道賀

鄭圃卅年營一楹。素風却識玉峥嶸。楚辭衆注推王逸。東國諸生重桓榮。漢殿崇儒領優秩。周官分職準名卿。從今制誥有人在。願賦靈光照二京。

寄碩園先生書

碩園先生函丈。六月十五日。承令正賜手書。先生大疾月餘。源六所未聞悉。讀訖殊爲駭遽。當日所電候。昨辱覆示。審已從輕。以謂其極險久、而猝即夷。此非天俾緊佑善賢。雖國手不能爲也。甚爲喜慰。先生素以體强愈人。源六事先生。二十餘年。見病沉重如此。未嘗也。則海外今已十年。未意料其筋力何似。凡人之有故。乍見諸已不意料。祇思慕其人尤深。率見其先兆。亦非意料所致焉。先生之病。寔在源六意料外。而先兆亦無。何也。源六正月疾作。今月財瘳。豈不復能自存氣之清明邪。抑精爽之心至此而殫竭邪。意者。先生之學問文章。並其德業。世以爲國寶。則知病不能興者。孰不歎曰斯人也而有斯病。計欲其加愛。曷止源六。令正日夜侍側。凡周旋可爲者。毫髮以上皆爲。則憂勞之餘。顧頷易容矣。亦欲其加愛也。奉天鄙僻。憾土物無可餽者。即致十金滙票。以煩所好自需。此區區之抱耳。頓首啓。

祭碩園先生文

嗚呼吾師。碩園先生。以董舒禮。有桓榮名。命世之才。學綜今古。文章之宗。並世獨步。置身報籍。三十餘年。六合觀采。所蘊龐然。正見有發。筆挾雷電。邦國之光。因美於絢。皇上崇賢。召仕宮闈。制誥膺任。乾德以輝。甲子五月。羅厲虐疾。七月念九。六十而畢。海內士林。知與不知。以爲國痗。莫不歎悲。余事先生。自壯至老。而相與勗。以古之道。訃聞殊方。噩噩哀哀。東渡滄海。奔喪而來。清酌設儀。用告其靈。惟志可纘。恐不可倒。嗚呼哀哉。

天囚先生の原稿を集めて

大江素天

私が大阪朝日新聞社に入つて間もなく、印刷場の一隅で、先生の筆になる「懷德堂記念祭趣旨草案」を發見して、寶玉の地に委せられてゐるかのやうな感に打たれ、大切に保存してゐたのが、今頃、こんなに早く懷德堂にとつて悲しい、又大切なかたみにならうとは、全く思ひもよらぬことであつた。

先生の葬儀が懷德堂に於て嚴肅に行はれた日、私はこれを先生の靈前にさゝげた。松山先生から鄭重な手紙をいたゞいて、私はよくこそのこしてゐたと思つた。

私はかなり忠實に先生の原稿を集めた。それも日常の論文までには手が屆かず、又私が先生の原稿を集めてゐることが、いつか同人の耳に入つて、同じやうに古い原稿棚の中をかき廻すことがはやつたゝめ、思ふやうには集まらなかつたが、手許に取揃へてゐるのだけでも。

明治天皇一年祭文
哀辭
大喪儀
御陵前祭
兩陛下御參陵
御百日祭
今上天皇陛下の宸筆を敬領する社告
奉賀天長節文
嗚呼豐山先生

今でこそ社務の匆忙昔日の比にあらず、萬年筆を使つてゐるほどの餘裕もなく、丈夫で軟かな四Bの鉛筆を何ダースも削つておいて原稿紙の上へ、握りこぶしほどの字を書きなぐつて行つても、締切時間に追はれて、何うにもならないほど切及詰つた編輯をやつてゐるが、私が社に入つた十七八年前はまだゆつくり墨を磨つて毛筆の先を咬み〳〵桝形の原稿紙の中へ克明に字を入れて行く餘裕があつた。

宇和島屋敷そのまゝのとても面白い建物の中に編輯局があつて、庇の低い薄暗い片隅に先生の机が置かれてあつた。椅子代りの一米突角位の番臺のやうなものゝ上へあの大きなからだをのつけて、微妙な旋律で、書いて行くだけの字を微吟しながらドシ〳〵行を進められた、先生の凡てのものを抱擁するやうな大きいどつしりとした面影が今も目の前に髣髴する。

その頃は渡邊霞亭先生や、故人になつた牧放浪先生の机が同じ並びにあつた。府市政の記事を書く筈で社に入れられた私が、畑違ひの軟かなことばかり書くので、二月目だつたかに、脇の机から「爰へ据れ」といはれたのが、天囚先生と牧先生との中間、丁度霞亭先生の眞向ひに當る机だつた。私は恐ろしい窮屈を感じて、だいぶマゴ〳〵したのを覺えてゐるが「爰へ据れ」が府市部から社會部へ轉任の辭令だつたのである。まことに簡單。それまで官廳にゐて、長官の前へ呼び出され、四角な鳥の子の辭令を鞠躬如として貰ひつけてゐた私には呆氣ないよりも物足りなかつた。

若い時分のことである。好んで人性と社會の暗黑面を描寫し、反省の資料に供しやうとする『それが社會に現存してゐる事業なのだから』といふが私たちの主張でもあり、頑丈張る意氣地でもあつたが、明るい方面の事以外、あまり先生は筆にすることを喜ばれなかつた。今の私の年になつて始めて成程と合點が行く。

ゝやうな志節の固い先生を、これから先幾人得ることができるか。

人のために謀つて忠なり、これが先生の常に懷かれたモットーではなかつたか。長上に敦く嚴に、同輩下僚に厚く懇ろに、禮讓も苦諫も悉く水のやうに清い、火のやうに溫かな、及のやうに鋭い、至誠と懇切との迸りでないものはなかつた。そしてそれには私人と公人との差別がなかつた。新聞記者として忠孝そのもの

追懷遺事三篇

中井木菟麻呂

一、懷德堂再興の動機

今の重建懷德堂が西村時彦君の先賢追慕の一念を以て倡道せられ、同志諸彦が多大の盡力に因つて完成せられたのは一般周知の事であつて、今更事新しくいふまでもないが、如何なる事が動機となつて、茲に西村君が舊學再興の爲に心力を竭さるゝに至つたかといふ事は、予と幸田成友君との外には、誰も知つてゐる人はあるまいから、其始に溯つて一通り陳べておく事も重建懷德堂史の一要件ではあるまいかと思はれる。

予が壞滅の舊懷德堂に對して憾念を抱いてゐたことは、其廢校當時から四十年間で、中間再興を思ひ立つて失敗に終つたので、一時は斷念して見ても、どうも思ひ諦めることができないでゐた處が、明治四十一年は甃菴の滿百五十年、竹山の一百五年、蕉園の滿一百五年に相當したので、よし再興は成らずとも、せめては先賢の祭典でも行ふことができなからうかと思ひ立つたので、其年の六月廿三日、大雨を冒して重野安繹博士を東京市ヶ谷仲ノ町に訪問し、三祖の祭典を大阪に擧行したき望を告げて、博士の助力を仰いだ處が、博士は直に贊意を表して、「大阪朝日新聞社に西村天囚が居るから、彼に力を盡させよう、其外高崎大阪府知事や股野藍田河田羆などにも謀つて見よう」といはれたので、予は八月には大阪に行く筈であつたから、

「西村氏を訪問して、思召のほどを傳へませうか」といつた處が、『いや別に呼びよせてよく話すからよろしい』、といはれたのであつたが、予はそれを待たないで、早くも西村君に逢つて見たく思つたので、下阪の後、八月十三日の午後、大阪市史編纂局に幸田成友君を訪ひ、其紹介に因つて、朝日新聞社で初めて西村君に逢つたのだ。其時予は、『子孫の口よりいふべき事ならねど、舊門下も絶ゑ、大阪に有志の人々もなければ』とて、三祖追悼の事を語り、重野博士の意思をも告げて、（同博士の傳言としてにはあらず）贊助を求めたるに、天四君は言下に贊成して、「懷德書院は大阪に於ける文敎の中樞なる上、ことに年回にも當つて居られるとの事を聞いては、大阪市としては是非追悼の事がなくてはならぬ」といひ、又幸田君に向つて、「幸田君、やらうではないか」などいはれて、必盡力すべしとうけがはれたのであつた。それから一年有半を經て四十三年一月十九日の府立圖書館樓上における大阪人文會例會席上の西村君の五井蘭洲傳の講演、懷德堂師儒諸先生公祭の評議となつたのである。二月四日付にて遣された西村君の書狀に左の如くかゝれてある。

拜啓御書面拜承昨年御話有之候懷德堂祭之儀高崎府知事などにも相談いたし候へ共機運未熟因て昨年創立之大阪人文會を發起といたし度と存じ前月大阪圖書館に於ける同會席上に於て小生五井蘭洲之事績講話來四十四年の春は懷德堂記念祭執行之議を發し衆員贊成罷在候就ては萬事は小生一兩日中東上御面話申上度云々

是の後祭典擧行の事業着々進行して、明治四十四年十月五日の祭典となり、遂に大正五年十月十五日の新講堂の開堂式を見ることゝなつたのである。其夜の落讌席上にて、天四君は九年前を追想して、「彼の時の事が實現して、遂に今日の盛擧を見るに至らうとは思はなかつた」、と感慨深きおもゝちにて予にいはれたのであつた。其天四君も今は故人となられて、索漠の思に勝へない。

二、懷德堂舊趾碑に於ける西村君の謙德

大阪今橋四丁目の日本生命保險株式會社の所在地は舊懷德堂の遺阯だので、大正六年に同會社で碑を建てることゝなり、西村君に撰文を依賴し、同君の撰定で予に書丹を囑せられたが、同君は其文の批評を予に求められたので、予は懷德堂舊阯の碑文だから十分に意見をいはせて頂きたいといつて、無遠慮に筆を加へたが、同君はそを不快に思はれぬばかりでなく、起手の一語を除く外、悉く採用せられ、其書丹を託することにつきても、非常に謙遜な態度で依賴狀をおこせられた。即六年六月五日の書中に、

過般來懷德堂舊址に記念碑建立之義保險會社側より發起小生等も贊成仕候處記文百字以內にて相認呉候樣小生に依賴相成乍當惑引受申候尙書者も選擇致候樣申事に有之小生は之を他人に囑するを好ます誠に乍恐縮書は老臺奉煩度後輩の撰文を長者に御依賴之條不倫に候へ共關係上御快諾被成下間布候哉云々とあり、又七年一月十四日の書には、

篆額は東坊城家に緣故深く候間老兄より御願被下候はゞ建立者の滿足可知と存申候書者の名無論御書加被下度奉願候文章をも御願申上げ撰幷書とあるべきを小生懷德堂に關係有之候爲に建立者の希望に從ひ候次第乍併御親切に御添削被下殆んど合作同樣に御座候段大悅奉存候但前述之如く建立者の希望に從ひ文章に賤名を存し乍失禮書丹の方は貴名を不朽にし度不堪悃望候云々

と認められてある。同君の如き地位にあり、且高遠なる學識を以て、予等に對して謙讓なること此くの如きは、容易にできる事ではない。世の學士文人間には絕にて見られない所である。同君が文章に就いて喜んで他の批評を問はれるのは、其先師重野成齋博士の遺風を遵奉せられてゐるのだと、其話に聞いてゐたが、實に尊敬すべき美德だと思つて敬服してゐる。

先年安徽省の程家檉が予の文に改竄を加へ、之に大著攷其三四、自愧佛頭著糞、對公之兄妹、恒覺忸怩也無己則請比諸王獻之醉書白練裙之例而恕檉之愚狂、との言を添へて返還せられた事があつたが、予は少し不快に感じて、之に返書を送らなかつた。又西村君が予の景社文稿に筆を加へられたのに對しても謝狀を送ら

なかつつた事があるが、同君の謙讓に對しては慚愧の至に堪へぬ。

此の點より見れば懷德堂舊趾碑は啻に文辭の精健なる已ならず、併せて德輝の昭灼たる者として仰がれるのである。

三、碩園博士稽神の楚辭

大正九年予が東京から攝北川西村に移つて後、一日西村博士を訪れた事があつたが、其室內に韓本の楚辭などが置かれてあつた處から、談楚騷に及びたるに、同君は楚辭を愛讀して、異本六十種ばかりを蒐輯し楚辭に就いて何か著述に着手して居られる由など話して居られたが、楚辭に對する好愛は予も人後に落ちないつもりだから、圖らずも同好者を得たことを喜び、先年東京にて獲たる淸正分捕本の記入ある韓本楚辭を語り出でた處、同君は朱文公の季子監簿君が後語の後序及び孫監の附記ある韓本は希覯の珍本にて、內閣文庫に唯一本ある已なる由を語られたが、予の所藏本にも其後序があつて、同種の書なるが故に、羨望の禁じ難き者があつたと見ゐ、其後懷德堂舊門人生谷卯兵衞氏を介して、讓り受け度旨を交涉せられ、『學者として他人の藏書に望を屬するは恥つべき事乍ら、已に六十餘種を集めて、唯此の一書なきを遺憾とする故、たつて割愛せられ度思ふ、代償はいかやうにも希望通に致すから』との事であつたが、予は平生擬騷の作を生命となし、此を以て家を成さうとまで思つてゐるのだから、折角の望であるが、是ばかりは手放し兼ねる旨を斷つておいたが、其後再懷德堂の吉田鋭雄君を以て申込まれて、前同樣に辭退した處、ほどへて三たび同君を以て請求せられたれど、遂に諦められた者と見ゐて、四度目には同君を以て借覽を請はれた故、同君の手より東京に送つてもらつたが、ほどなく又同君に因つて返璧せられた。して見ると、此楚辭には餘程西村君の精神が稽留せられてゐた者と見ゐる。併し今にして思へば、たとひ同君の所有に歸して見た所が、その愛玩の期間はいかほどもなかつたのだ。そこに愁痛極りない情緒が含まれてゐる。かくして此の楚辭に深刻な

る意義を付する事となつたのだから、予は之を碩園博士稽神の書として、一層重寶することとしてゐる。

噫天囚西村先生

門人　福知山中學校長　田中常憲

噫、天囚西村先生。料らざりき、實に料らざりき、先生一朝病を獲、溘焉として長逝し給はんとは。誠に痛惜愛惜に堪へませぬ。私は訃音を聞いて、聲を放つて慟哭致しました。

世に先生の死ほど惜しいものはありませぬ。先には原敬氏が死なれ、伊集院彥吉男が死なれ、衆議院議長奥繁三郎氏が死なれ、國家の元勳として山縣公松方公が前後相次いで薨去され、いづれも國家のため惜むべきでありますが、併し、その死は只一時其の雰圍氣内に於ける一波動に過ぎませず、之に代はるべき人、之を塡充すべき人は決して乏しくないのであります。夏目漱石氏の死、厨川白村氏の死の如き、日本近代の文學者として思想家として痛悼すべき人でありましたが、併し、是とて幾多の後繼者があり、塡補者があつて日本の文化の上にさしたる支障はありませぬ。然るに先生の死に至つては、先生の死と共に日本の漢文章が滅びたのであります。たとひ漢文章は滅ばないまでも、先生の如き一大雄文は、未來永劫或は再び見ることが出來ないかも知れませぬ。先生は懸換の無い人でありました。此の點に於て私は最も先生の死を惜むものであります。

先生は、實に一代の文豪でありました。社會の風敎を維持し、世道人心を裨補する大學者でありました。社會の風敎を維持し、世道人心を裨補する大學者は、先生以外に他にあるかも知れませぬ。されど文は八代

の衰を興す一大雄筆に至つては、天下唯先生一人あるのみ。儒林寂寞、文豪凋落の時、先生獨り歸然として高く標出してゐられたのは、實に大正學界の一大偉觀でありましたが、今は則ち亡し。

私が先生に初めて御目に懸つたのは、私の十九の年で、當時私は先生の文名を慕つてゐましたので、先生が鹿兒島に歸省されたのを機會に、先生を鹿兒島市の旅館に訪ね、いろ〳〵教訓を受け、文章の話を承り、そして大に漢學を研究すべく激勵されました。私が漢學を學び、文章に趣味を有つに至つたのは、一は先生提撕の賜でありました。その後明治三十六年九月、私が天王寺中學に教鞭を執るに及びまして、度々先生の門を叩き、先生の高風に接し、先生の教を受け、爾來二十有餘年の今日に至るまで、或は直接に、或は間接に、先生の指導薫陶を受けたのであります。

先生は、風骨偉岸、應對堂々として、實に立派な方でありました。而も鷹揚で、快活で、話上手で、先生と共に居れば、春風の座に在るが如く、心廣く體胖に、自然と之と化せられるものがありました。ことに先生は、後進を愛せられ、御馳走などにも招かれたことが度々ありました。一年新年に、今井圖書館長外三四人と一同に私も招かれ、朝鮮から貰つたとて虎の吸物を戴きました。

先生曰く、『大久保彦左衞門の鶴の吸物の樣で、身は無いが、鶴の吸物よりも虎の吸物は一寸珍らしいから、德川將軍の膳よりも奢つとる』と、呵々大笑されました。その先生の陽暢な笑聲が、今も猶ほ耳底に殘つて、お懷かしう存じます。

大正三年三月、私が大阪を去つて豐後の竹田に赴任する時も、多忙な御身でありながら、特に私の爲に講筵を開かれ、漢學研究の方法やら文章論など、數回に亘つて深切に教へて下さいました。そして曰く、豐後は幾多儒者の輩出した處であるから、今も猶ほ流風餘韻の掬すべきものがあり、又よい書物も澤山あるに違ひない。ことに竹田は田能村竹田や、雲華上人や、角田九華などの詩人學者が出た處であるから、留學した考で勉強し給へ。將來は懷德堂に來てもよいから。と自分の子よりも深切に。そしていよ〳〵出發に際して

は、わざ〳〵私の爲に送別の宴を御開き下され、今井圖書館長、鈴木天中校長連を陪賓として欵待されました。一介の中學敎師である門弟に、かくまでの深切。以て先生の風丰を想見するに足るべく、先生は實に德の人、人格の人、情味津々溢るるが如き人でありました。

竹田に赴任してからは、惡詩、惡文の爲に先生を勞することが殊に多くありました。而も先生の懇篤なる御多用の中にも丁寧に見給ひ、いつも原稿紙は眞赤になつて歸つて來ました。この頃のことであります。佩文韻府と淵鑑類函は、是非座右に備へて置かねばならぬ。今廉い掘出物があるから買つて送る。代金は何時でも出來た時に送ればよいとて、わざ〳〵此の二書を買つて送つて戴きました。大正四年生徒を率ゐて上阪した時は、先生大に喜ばれ、新築書齋が出來たとて、先生自ら案内され、此の新書齋で始めて桐城派の學を紹介され、惜抱軒詩文集貳帙拾六冊を賜ひ、御馳走になつて歸りました。此の夏、先生の御紹介で、日田の廣瀨氏の宅に數日滯在して、淡窓先生旭莊先生等の遺著を自由に縱覽することが出來ました。

先生は、宮内省御用掛となられてから、天囚の號をやめて碩園と號されました。以て先生の皇室に對する謹嚴忠誠の態度が伺はれます。されど先生は、天囚の號には多大の執着心を以て居られ、私の精神作興詔書謹解の廣告などには、私の請を容れて天囚を用ゐよと申されました。なほ私の此の謹解の成つたのも一に先生の賜でありました。本年四月私に賜ひし先生の書に、

拜啓花の都も昨今櫻花滿開に因つて彩られ申候。昨日雨を冒して家慈同伴上野看花申候

母堂に對する先生の孝順は實に感ずべきものがあります。往年母堂を奉じ令夫人を伴ひ、高野山開基千百年大法會に登山されたことがありますが、その時私に寄せられた詩五首の中に

天倫至樂在游觀。杖屐三人食一簞。不是焚香去求福。祇林花木足承歡。

拂面薰風漸送香。籃輿已過女人堂。飛花亂點雙皤髻。彷彿華鬘瓔珞粧。

春風鎭在梵王家。五月殘櫻映夕霞。記取侍輿三日樂。名山禮佛且看花。

山陽が母を奉じて芳山に游びしにも似て、床しき限であります。

貴地春色何如。北地尙寒きや、御壯榮御勉學と恐察不堪大賀候。陳者今度詔書謹解は追々新聞廣告の効も顯はれ普及と存候。評判も宜敷大慶の至りに候。引續き大著述思立たれ度候。其は列聖詔勅謹解に御座候。世に歷代詔勅錄と申す書有之、大抵は漏なく編纂有之、しかし明治天皇の勅語中には洩れたるも有之樣に御座候。其の註釋を施すは必要に候。列聖の詔勅は、支那に於ける六經と同じ。即ち我邦不刊の經典也。老生平日敎育の資料いな國民必讀の讀本として註釋したき考有之候へども忙しくて到底不能也。因て賢兄を煩度候。尤校閱は所不辭也。詔勅の出典は經史なるを以て、參考書としては、四書五經の外に、史記漢書必要なり。日本人の著書中飯田氏の日本書記通釋も必要也。其の他六國史大日本史は勿論、辭書類にては康熙字典は有り觸れたるもの、經籍箋詁又は近刊の辭源など必要なるべし。佩文韻府淵鑑類函の類も座右に不可缺也。先は出典を示し、訓詁を施し、大意を平易に說くこと詔書謹解と同樣可然候。五年の力を費さば不朽の書大成を得ん。他手着手し居るや否やを知らざるも、今日までは所不聞也。此書は必要と存候着手の勇氣なきや。此著御企あらば學問の上達にも益すべし。共著とするも可なれど、老生到底暇日少し。隨分助力は可致候。五年を要せずして三年位にて成就する樣勉强有之候はば尙妙也。此擧世道人心に益するや大なり。御奮發如何一度御上京相成候はゞ御相談も致度と存居候。御返事待入候。尙々脫稿近く相成候迄は口外無用たるべし。訥於言而敏於行を可とす。或は中道而廢を恐るれば也。匆々不盡。

以て先生が御抱懷の一班をも知ることが出來ます。私は左の意味の御返事を爲し、

不肖の私にかゝる大事業を囑せられたるは感激の外ありません。校務多端の上淺學菲才の身には、中々に危まれて御速答も出來ませんが、いづれ近日中上京御面接の上萬事御指揮を仰ぐ考であります。

越えて五月十九日勇んで先生の門を叩けば、豈料らんや、先生は重患にて打臥し給はんとは。滿腔の望も一時に切れて傷心痛心遣る方もありませんでした。その後漸次快方に向ひ給ふとの令夫人よりの御知らせに安心し切つてゐました所に、あゝ何事ぞ突如として先生の訃音を聞かんとは。

恐多いことながら明治大帝の御登遐以來、かくてまで驚き、かくまで惜み悲んだ人は私には無かつたのであります。實に一國寶を失つて了ひました。

それにつけても、此の御書面は、私に對して先生の絶筆でありました。而して此の絶筆が實に私に囑せる先生の御遺言となりました。私は此の御遺言を果さなければなりませぬ。此の御遺言を果さなければ、地下に先生に見ゆることは出來ませぬ。といつて、先生亡きの今日、到底私の多端と微力では大成すべくもありませぬ。此事を思うて私は懊惱煩悶を致してゐます。それゆゑ、私は先生の此の御書面を公開して、私に代つて御遺志を紹ぎ、先生の御委囑を果し下さる賢者の出で來るを待たうと思ふのであります。私も亦他日閑地に就くの時は是非此事に身を致さんと思つてゐますが、こゝ二三年には出來相もありませぬ。冀くは誠ある學者の起つて是非此の事業を大成し以て先生の御遺志に酬い下さることを切に懇望致して止まない次第であります。左の一文は、拙著『九州の一角より』にものしたもので、屯に掲げて追慕の意を表します。

西村天囚は、關西操觚界の元老也。彼、容貌塊傑風骨偉岸、應對堂々として、眞に國士の風あり、曾つて『屑屋の籠』を公にし、一擧文名を博す。

程なく招かれて大阪朝日に入る。爾來三十年、高橋健三去り、内藤湖南去りし後は、大阪朝日は、天囚に賴つて、隱然天下の重を爲せり。社長村山、常に吾社の偉を誇る。蓋し本社に湖南、天囚あり、東京に池邊吉太郎あり。巋然として群巒の上に標出せるあるを以て也。

天囚の文、辭藻宏麗、才調極めて高し。最も漢文に長ず、彼の明治天皇御登遐の哀辭の如き、大葬の時の誄辭の如き、行文古高、法格森嚴、明治天皇の偉大と相俟つて、實に千古の大手筆たるを失はず。

當時、大聖帝を哀むの詩文、大小千を以て數ふ。而も多くは卑俗語るに足らず。西園寺首相の誄辭の如き、亦誦するに足らず。此の間に立ちて、多少見るべきものは、帝國大學總長の誄辭なりき。そは、日本最高學府の文學者、大博士中の選良五名が、此に額を鳩め、之を草創し、之を討論し、之を修飾し、之を潤色して成りし者也。

されど、之を一記者天囚のそれに比ぶれば、猶ほ富嶽の前の乘鞍白根の如し。彼の文、豐麗莊重は、則ち之れあり。されど、天囚の文の典雅蒼古、謹嚴雄渾を缺く。彼の文や、事を陳ぶる最も巨細を極め循々として盡さず。而も其の弊や冗漫に流る。天囚の文に至りては、長短錯出、前應後呼、恰も九層の樓閣を築くに、大小長短の材、悉く其の處を得たるが如く、寸隙を餘さず。且つ之を貫くに、哀と誠とを以てし、紅涙千行斐然として章を成す。內藤湖南は、現代漢文の士也。彼、天囚の誄辭を評して曰く『是れ千古の大文字也』と。蓋し天下の公評なるべし。

今上天皇登極賀表、亦法あり、則あり、莊重の筆、雄渾の辭、堂々として王者の文也。殊に吾輩の最も快感を禁ぜざるものは、彼の徒に漢儒の糟粕を嘗むるを肯せず、典故事例を悉く本朝の神話歷史に取つて、而も和臭を帶びざる一事にあり。天囚の識見、時輩に卓越せるを見るべし。吳處厚靑箱雜記に曰く、文章に二あり。一は山林原野の文、一は朝廷臺閣の文と。天囚の文は、實に朝廷臺閣の文也。

天囚、亦大阪懷德堂に盡瘁す。懷德堂は、中井竹山、履軒兄弟の經營せる大阪唯一の學校にして、當時江戶の昌平黌と相對立して、天下を兩分せり。維新後廢滅に歸せしが、今復た之を再興し、堂を建て老儒を祭り、紳士を敎育す。天囚の力也。

天囚は、薩南種子島の人。家世々儒者なり。父は勤王家也。彼、近者、路を後進に讓り、文を京大に講じ、學者生活に入る。知者と謂ふべし。吾輩、亦天囚の提撕を受くること玆に年あり。性魯鈍、爲す無きを恨む。

夫人亦溫良貞淑。先生の好逑たる賢夫人であります。今度母堂を奉じ、家を挈つて大阪に移轉されたとの報に接し、嬉しく存じます。汽車僅かに四時間程ゆゑ、先生の展墓がてら、時々御訪ねする機會の多かるべきを思ひまして。天よ、願くは先生御家族の上に幸あらせ給へ。

大正十三年十月三十日秋雨そぼふる福知山の寓居に於て、之をしるす。

拜復御來諭に依れば今回懷德堂々友會員諸君に於而故西村碩園博士御追悼の爲め會誌御發刋に付拙生にも感想若くは懷舊の情を陳へ候樣拜承仕候然るに拙生の同博士との御交際は極めて近來の事に有之深く其平生を承知不致候處先考に於ては多年の辱知に有之文章に關する事柄は概ね博士の勞を煩し居候次第にて拙生は先考より時あつて博士の德業高風を傳聞罷在候處によれば資性嚴直寡言器宇宏大情誼に厚くして又理智に長ぜられ候由若し夫れ一代の文豪たるに於ては世既に定評有之敢て拙生等の品隲すべき所に無之候只惜むらくは尙春秋に富まれ多々益々將來を期待致され候ひしに天遂に壽を藉さず學界の爲め痛恨の至りに不堪候仍而一言追悼の意を陳へ度如斯に御座候不悉

大正十三年十月三十一日

公爵　松方巖

懷德堂堂友會長　松山直藏殿

拜啓益々御清祥奉賀候陳者過日ハ懐徳堂一覧及懐徳各壹部御恵送ニ預リ難有拜受仕候其節御申越相成候故天囚先生ニ就スル感想何カ取纒メ御送付可申上筈ニ候處疎懶如例遂ニ延引今日ニ至リ御高囑ニ背キ候段平ニ御容赦被下度候先生ノ欽スベキ高風ト一世ヲ壓スル文藻トハ小生等ノ尊敬措ク能ハサリシ處今ヤ幽明界ヲ異ニシ感慨殊ニ深キ次第ニ御座候先生ニ關スル逸話トシテハ辱知僅ニ數年特ニ錄スヘキモノハ無之候得共先生ノ偉大ナル人格ニ依ル感化ハ殊ニ尠少ナラサルヲ感銘仕候所謂思想界動搖之折柄先生ヲ失ヒタルハ啻ニ學界ノ損失ノミニ止マラス眞ニ浩歎ノ至ニ不堪候意餘アリテ筆伴ハズ寄稿之義ハ何卒御宥免被下度候先ハ右御斷迄得貴意度如斯御座候　敬具

十一月一日

大谷正男

松山直藏殿

西村碩園君逝去に就て

羽生俊助

君と予とは同郷、幼時より無二の親友で、共に前田豐山先生の門に學び、先生の往く處二童の隨はざるな

く、二童の在る處先生を見ざるなしと云ふ位親善で、是程師の愛顧を受けしもの、同門中他に比類なかつたであらふと信ずる、稍長じて共に東京に遊學し、君は天稟の才を以て漢學を專攻し、予は武人となつた、業成て君は大阪に、予は熊本に赴た、爾來春風秋雨四十餘年、相離れ相合し、最後は共に東京に居住し、君は晩年の光榮益々加はり學德共に老熟の境に進み、海內殆んど第一人の稱を博するに至り、予等も其餘榮を擔ふ心地して、予の落莫たる閑人生活中大に力强く、何か事あれば君の裁量を受けんものと大に期待せしことも水泡となり、永久君と良晤を交ふること不可能となりしは返す〳〵も遺憾千萬なり、是より先き今年三月予が鹿兒島の親類より君に額字の揮毫を懇望し來れり、予は當時微恙にかゝり且つ松方公爵重態を傳へられし時なれば、君は官暇公爵邸に出入して寸暇もなかるべし、予の微恙の癒りなば親しく君を訪ふて依囑せん、人間はいつ何ん時如何なる變事なるとも測られぬものなれば、此序に予も何か記念に揮毫し貰はんと存じ荏苒過ぎ行く中に、予は四月下旬バッタリ臥床するに至り病狀も重態になり、五月中旬頃に至りては何となく君に過ひたき氣味を催し、心竊かに思ふに、噫、之れは確に予は今度は再び起つこと能ばざるに依り、コンナ氣が催すならんと獨り胸中に覺悟し、モー君が見舞に來てくれそふなものだ、どうして來て呉れぬだらふか、手紙でも出して見よふかと、夫れのみ思續けて二十日頃に至りしとき、君の大學同窓にて予の同塾たりし末永君より、西村君重病との報あり如何と問ひ來れり、於是君が見舞に來て呉れざりし理由も略々分りしも、未だ確報を得ざれば予は病苦を推して仰臥のまゝ端書を書き、眞僞を問合せたり、兩日後夫人より返事あり、肺炎の疑あり心配なりと、予大に驚きたるも、予は絕對安靜中にて妻は看護に寸暇なし、ドウすることも出來ず打過ぎ五月下旬に至りたるに、予の病勢も幾分良經過を取るに至りければ、直に妻代て見舞ひに行きしも、面會謝絕にて病人は勿論夫人に過ふことも出來ず、只病狀を聞きて歸り未だ安心出來ざるの報を得大に心配せるも、君は平生强健の質なれば、如何に急性肺炎なればとて、手當は屆く名醫は診る、よも全快せぬことはなかるべしと、是れ丈は固く信じて疑はざりし、爾後予の病は漸次快方に向ひ、六月下旬

床拂ひを爲すに至れり、君も亦た主病の肺炎は防ぎ得しも意識未だ恢復せずとの事なれども、之れも日を經るに從ひ身體舊に復せば、漸次治愈すべし決して死ぬなどの事は夢にも見ず、予が無沙汰せしことも兩人共愈々全治の上で緩話せんと、予は專心豫後の靜養に從事せしかば遂に見舞にも行かず、七月三十日朝、朝日新聞を見て、君は昨日吳病院にて遂に死亡せりと、此時予の驚きと失望は實に一通りの事にてはなかりし、於是思ふに、予が曩に病中君に遇ひたかりしことは、實は君が遠逝するに依り此氣を催し所謂蟲が知らせるとは此事ならんと合點せり、即當時君も矢張り予に遇ひたかりしに相違なからん、其意氣が暗に相通じて予にコンナ氣を起させたに違ひなからん、其後遺族は大阪に居住することゝなり、未亡人が暇乞に來訪せられ荷物整理中此書を發見せりとて遺物として投與せられたり、夫れは左の樣なる二行の對句なり。

羽生我兄先生兩政

道出於天日月陰陽行不息

仁求諸己孔曾思孟習相傳

西村時彥 碩圖 子俊

於是又思ふに、去る三月予が親類の依囑に依り揮毫を乞はんとせる時、人間はいつ何ん時事變なるとも限らねば、此時を利用し君に記念の揮毫を求めんと期し居りしに、予が病の爲め果さゞりしも、君は己に此事あるべしと暗に思ふ處ありて此書を遺し置きしならん、是又相互の意氣相通してならんと沁々不思議に感せり、元來予は君と同じく神佛の信仰(宗教上)なく、故に迷信などは起さゞるも、此二つの不思議に依り精神の感應と云ふものは、確に起るものであると云ふことを實驗せり、君と予が能う意思がピッタリと契合し居りしかと、今更思へば涙の種とこそなれり、嗚呼哀哉。

大正十三年十一月三日君が追悼會を舊友相會して拙宅に開きし翌日鄉友羽生俊助泣血誌す。

大正十三年十一月二日舊友相會於草堂悼西村碩園君席上作

少年倶負笈。文武各修身。碩學經筵主。三長史局賓。忠誠仕宮闕。寒暑思慈親。朝野惜君死。吾儂涕淚頻。』

眼前相笑語。髣髴看英姿。聞訃猶疑夢。臨風悵且悲。

うつし取や文からうたも今尙早や

かたみとなりぬかなしかりけり

歌を讀みさゝくみかわし遊ひしは

たのしかりけりむかし思へは

五十日祭の日さゝけし歌

大園の只一本の木はかれぬ

おしみおしみて猶惜しむ哉（大園とは鄕里西村邸の小字）

鄕友羽生俊助未定稿

追憶談

狩野直喜

明治三十四年の秋でありましたか一度私が支那の留學から歸つて、再び上海へ行つて宿に着いて二三日ばかりしてから西村君の訪問を受けた。それが西村君に會つた初めであります。尤も西村君の事は能く私の友人からも聞いて居つたし、それから東京の大學の先生、私の世話になつた島田先生、西村君も昔島田塾に居

つたことがあるので、島田先生が亡くなられて年回か何かの時に西村君の顔を見たことがありますけれども別に話もしなかつた。西村君の方でも私の事は能く聞いて居られたと見えまして、上海で始めて會つて食事なども一緒にしました。又西村君は近所に居られたものですから始終往來して居つたし、それから西村君と一週間ばかり船に乘つて蘇州から杭州地方を旅行したこともあります。當時上海には重に領事館員とか正金銀行三井物産會社の實業方面の人が居つて、學問の話をする人は餘り居なかつた。さう云ふ關係から西村君と非常に懇意になつて居つた。其の時分の西村君は朝日新聞の記者として同新聞の支局見たいな所が上海にあつて其處に居られた。時々は朝日の方に通信もして居られたし、從つて最も支那の政治や何かの事にも注意して居られたやうですけれども、重に學問をして居られたやうです。併し何分にも新聞記者と云ふ身柄でありますから、別に纏つた研究をして居られたやうでもないやうです。御承知の通り西村君は若い時に大學の古典科に居つて、それから屑屋の籠と云ふやうな小説も書いたり色んな波瀾曲折に富んで居る人であつたが、併し上海に居つた時は私が人から聞き私が想像して居つたやうな西村君ではなくて、晩年の面影があつたのですけれども、まだ何分三十七八であつからして全くカチ〳〵の道學先生と云ふやうな風ではなかつた。矢張詞章の方面が非常に好きであつて考證と云ふやうなことは嫌ひでありました。さう云ふ學究的なことは自分は出來もせんし、又嫌ひであると云ふことも言はれた。又斯ふ云ふ話をせられたことを今でも覺えて居る。それは、自分は若い時には文士見たいであつて從つて隨分先輩、長者から擯斥されるやうなこともあつた。併し自分がドン底まで墮落しなかつたのは何う云ふ譯かと思ふと、そこに若い時習つた論語とか孟子とか云ふやうなものが出て來て、何うしても普通の文士文人のやうな生活が出來なかつた。と云ふやうなことを眞面目に話して居られました。それは僞らない話であつたと思ひます。上海時代は極く品行方正な身持堅固な人でありました。其のうちに私よりか先に日本に歸られて復朝日の本社に這入つた。それから私も留學を終へて京都に來まして度々會つたですけれども、何分西村君は新聞社に居つて忙しいし私と全く境遇が違ふのですから、

歸つてしみ〳〵話をしたことがなかつたのです。其のうちに何年頃だつたか景社と云ふ文社を起して亡くなつた粉山衣洲とか、京都の長尾君とか、內藤君や、私らが參加した。又た京都にも大學卒業の人達が麗澤社と云ふものを立て、それが度々景社と合併して文章を作り合ひました。さう云ふ所から益懇意になりました それから大正五年、其の時恰度鈴木敎授が支那に留學して居りまして、漢文學方面の先生が足らないので、それで私は西村君を何うかしたいと思つて同僚の賛成を得、西村君に一つ出て呉れないかと言つたのです。恰度同君は朝日新聞社員でも比較的閑な時でありましたが、併しながら私の依頼に即答はしなかつた。と云ふのは同君が謙遜の言葉でありませうが、同時に極く大事を取る性質の人であつたと云ふことが分るのですが、自分は君が知つてる通り漢學出身の者であるけれども、若い時から新聞社の生活をして學問は大變荒んで居る、さうして君等のやうにチヤント問題を定めて學究的に研究すると云ふやうな閑もなかつた、實際したいと思つても出來なかつた、併し自分は矢張學問文章が好きなのであつて、學校に出て人に敎へると云ふことになれば、昔やつたことを又再びやり直して昔やつた事を復見ることになるので、自分としては非常に愉快である。と云ふ話であつて、それから村山社長に相談せられ社長も勸められたやうで、それから愈承諾されて、大正五年の九月から特別講義と、作詩、作文と古文辭類纂と云ふやうなものを三時間ばかり敎へて貰ひました。一体敎員と云ふやうなことを今迄したことがなくてさうして年取つてから敎員になると云ふことは、隨分人によつては生活が變るものですから具合が惡いものです。併し西村君は前から同僚の中にも澤山懇意な人もあつたと云ふことも一つの原因でありますが、矢張新聞記者をやつて居つても學者先生と云ふ人であつたものだから、別に敎員をすると云つても竹に木を接いだやうなことが他からも見ないし、自分にもさう云ふ色がなかつたと見える。能く長い間文士生活をして敎員になる人は固くなり過ぎるものです。けれども西村君は全くさう云ふことを見なかつた。さうして大阪から京都迄出て來るのは隨分御苦勞でありましたが、併し自分は非常に樂んで居られたやうに思ひます。

それから懐德堂の事は私が別にお話をする必要もないのですが、あれは御承知の通り西村君が朝日新聞社に居られた時代に『懐德堂考』と云ふものを書かれたことが原因になつて、さうして今日見るやうな懐德堂が出來た譯で、永田氏を始め其の他大阪の實業方面の方々の熱心努力も無論ありますけれども、其の原因をなしたのは西村君である。上海で考證的、學究的の事は嫌と言つて居られたけれども、朝日新聞社に再び復つてからは段々學究的になつて居られたと云ふことは、私は之を見ても分ると思ひます。さうして新聞記者であつたからして、矢張日本の政治とか何んとか云ふことには興味を有つて居つて、さう云ふ所から矢張世道人心に益することがなくちやならぬと云ふことを西村君が考へたのは、一つは若い時から漢學をやつたと云ふことであるし、一つは新聞記者として經世的の方面に注意をしたことからさう云ふことが起つたと思ひます。さうして私も上海以來の交際がありますから、極めて不適當と思ひましたが西村君から引出されて、懐德堂の發會式にも講演をしたやうな次第であります。さう云ふ譯で私は寧ろ西村君の中年以後知つたのであつて、漢學生時代一緒に居つたと云ふ譯ではありませぬけれども、中年後の友人としては最も懇意な中の一人であつたかも知れませぬ。懐德堂から東京に行つて宮内省に這入られると云ふやうなことに就ても、其の前に色々私に話がありました。實は此の大阪と長い間の關係があつて殊に懐德堂と云ふものがあるから、大阪を去ると云ふことは忍びない。と云ふやうな考へもあつたやうです。併し色んな事情があり暫くの間東京に行つて、さうして時機を見て再び大阪に歸りたい、老後は吹田の何處かに家を建てゝさうして彼處で悠々と讀書して終りたい。と云ふやうなことを言つて居られました。併しそれが出來なくなつて了つたと云ふことは實に氣の毒な譯で、私も其後大阪に行くのに吹田を通りますと何時も西村君のことを思ひ出す譯であります。西村君が親に孝行であつたと云ふことはこれは誰も知つて居ることであつて私も其點には敬服して居ました。今年の春東京に出まして西村君の宅に厄介になつて居つて御老母にもお目にかゝつたのですが、如何にも家の中は儒者の家庭らしい家庭であつた。お母さんへの禮儀なども洵に感心だと思ひました。西村君の意思を察

するのに、東京に出られるのも矢張お母さんが居られると云ふことが重な動機でほなかつたかと私は思ひます。

西村君の學問文章のことを少し話ませう。西村君は御承知の通り鄕里では前田豐山先生と云ふ鄕儒に就て若い時習つたのである。それから東京に出ては重野先生の門に學び、後には島田先生に學び、それから大學の古典科に居られたのであります。重野先生と島田先生と云ふのは一私は大學で島田先生の教を承けました、一當時の二大儒でありました。重野先生の學問は私は能く存じませぬけれども、程朱が土臺になつてさうして後には清朝の學者の說なども雜へられたものと思ひます。それから古文に就ては私が今述べる必要もない程大家であつた。島田先生は程朱學者ではありませぬ。折衷派と云ひませうか、どちらかと言へば清朝の乾隆嘉慶頃盛んであつた所謂漢學問、又たは考證學を喜んだ方でありまして、文章も立派で、私の先師だから言ふのではないが、或種類のものでは決して重野先生に劣らぬ方と思ひます。併し先生は經學者でありました。私は考へるのに、西村君は重野先生の方が最も影響を受けて居られたと思ひます。それは第一西村君の御親父の友達であつたと云ふことゝ、同鄕と云ふことであつた。又重野塾の方が島田塾より長く居られたものと思ひます。西村君自身も嘗て私に、僕は重野塾で文章を稽古をして、それから島田塾の方では讀書力の方をつけたと思ふ。と云ふことを言つたことがあります。さう云ふ關係でありますが、此の西村君は上海時代から色々學問の話をして居りましたが、程朱學、即ち宋學を守つた人です。其の點から言つたら重野先生よりかも寧ろ純粹な宋學の學徒であつたかも知れませぬ。『日本宋學史』と云ふやうなものは最も西村君が骨を折つたもので、今日の世道人心を何うすると云つても、矢張り其の中には此の宋學風な固い方の學問でやらねばならぬと云ふやうな考があつたものと思ふのであります。併しながら支那にも長く居られたし所謂通儒でありますから宋學でなければならない、他の學はいかないと言うて排斥するやうなさう云ふ狹量の人ではありませぬでした。

それから文章に就て話ませう。同君の漢文は私友人として別に贔負をして言ふのではありませぬが、これは當代に於ける作家は東京邊りにあるかも知れませぬが、先つ今日はあれたけの達者な人はありませぬ。私が殊に敬服するのは、同君は長く新聞記者をして居つた。新聞記者をして新聞風の文章を書き、雜誌風の文章を書いてそこに一つの癖がつくと、漢文と云ふものはなか〳〵書けないものです。何うかすると新聞的の文章、雜誌的の文章を其のまゝ漢文に直すと云ふことであつて、それでは本當の漢文にならない。西村君はあれだけ新聞記者生活をして、さうして漢文の上では又あんな立派な名文を書くと云ふことは――、新聞雜誌に文章を書いて其の爲に漢文としての癖を受けなかつたことは私珍しいことだと思ひます。殊に偉いのは例へば御大典とか其の他の朝廷の儀式と云ふやうな時に四六風の漢文を書く。それから之を假名交りとなして朝日新聞に載つて居るのを見ると誠に立派な國文で、佶屈な堅苦しい所が更にない。吾々が書くと大した文も出來ないが、漢文となればゴッ〳〵する。そいつを書流して新聞紙に載せて、さうして誰が見てもそれが分るやうになると云ふことは非常に難しい。西村君のそうでないのは若い時に『屑屋の籠』と云ふやうなか〳〵軟かい文體を物して居る、而して漢學書生の事だから、往々漢文の句法を用ひ、國文と漢文と性質に於て相一致しないものを同君は努めて一致さした。言換て見ると西村君の書いた漢文を其まゝ假名を入れて書下すと、普通の人が讀んで分るやうな立派な國文が出來た譯なんです。そこは同君の獨特です。同君の文章は前に言つたやうに學問の方で程朱の學問をした人でありますから、それでどちらかと言へば、其の文章も支那の桐城派の文をやられたやうです。桐城派と云ふのは申すまでもなく清朝の初めに方望溪と云ふ人が出ましてそれが桐城の人でありましたから云ふのであります。それから方望溪の次に劉大櫆と云ふ人が出て、其の次に姚姬傳と云ふ人が出て其の後清朝の末まで桐城派が盛んでありました。彼の有名な曾國藩の如きも或る意味に於ては桐城派古文家の中に入ることが出來る。此の桐城派の方では、義理、考據、詞章、此の三拍子が揃はなければならぬと云ふのです。義理と云ふのは經書に見ねた所の義理でありますから、桐城派の言ふ義理は詰り程朱の

經學なんです。それから考据と云ふのは清朝で盛んに行はれた言葉だが事實を一部刻みに精密に調べる事です。それから詞章と云ふのは所謂文學なんです。桐城派の方では此の三つが備はらなければ文章ではない、其の文章の中には義理（道德）が這入つて居らなければならぬ。それから其の中に考證的のことがなければならぬ。言換て見ると議論が空疏ではいかぬ、證據がなくてはならぬ。さうしてそれを立派な名文で以て飾らんければならぬ。今の言葉で言ふと、文章の中に義理の見るべきものもなし、それから事實が間違つて居たら如何に文章を華かに書いてもそれは何んにもならぬ。斯う云ふ立場であります。西村君の若い時の文は知りませぬが、晩年の文は其の三つの點に能く注意をされて、懷德堂から出ました論語義疏の序を見ても分ります。其の中に義理があり、それかと言つて考證的の要素がないと云ふことはない。此の事實を調べると云ふやうな時にはなか〳〵綿密に調べる。さうしてあゝ云ふ流麗典雅な文を書かれる。日本で此の桐城派を色々言ふ人もありますけれども、兎に角西村君が其の點に於て姚姬傳が言つた通り義理、考据、詞章の三拍子を備へた人である。西村君が宮內省に這入られて御上の文章を掌られたと云ふことは、たゞ同君の友人として慶賀した譯ぢやない。それ以上に其の人を得たりと云ふ意味で以て嬉しく思つて居つた譯であります。西村君が宮內省に這入られてから、御上から出た文書に就て總ては西村君の手を經て居らぬと思ひます。それは高くは言はれぬけれども少し注意して見ますと、どれは西村君が書いたと云ふことは直ぐに分ります。其の意味から言ひましても西村君が亡くなつたと云ふことは實に困つたことだと思ふ。

延德本の大學を出版してさうして亡くなられて後に私も貰ひましたが、あれなんぞもたゞ鄉里の關係と云ふだけの意味でなくて、矢張西村君の學問の上から考へて、此の日本で程朱學のものが初めて版にされたと云ふことで非常に興味を有つて居つたのです。たゞ自分の故鄉でさう云ふ事があつたと云ふことばかりでないやうです。

それから屑屋の籠に就て一寸申したい。實は私はこれまで屑屋の籠を讀んだ事はなかつた、そして當時行

はれた尋常一般の戯作者の書くやうなものだと思つて居たが、今度再版が出來たので博文堂から貰つて讀んで見た。所が私は其の方面の批評をする資格を有たぬけれども、感じたのは軟かい文であるけれども、なか〳〵色んな支那の故事や支那の熟字を自由に使つてあります。若し今の若い人が之を讀んだら餘り面白くも思はぬし、第一分らぬだらうと思ひます。西村君は墮落して文士のやうになつたと云ふことを自ら大變恥ぢて居られましたが、そんな品の惡いものではない、矢張同君が漢學者であつたと云ふ面影が能く分りますし、矢張當時の政治風俗を痛罵したりする處に、稜々たる一種の風骨があります。何うしてもこれは漢學者でなければ出來ない。今日の文學者から言ふと固苦しい理屈ッぽいものであらうと思ふが……。

重野先生の所に居つた時には隨分重野先生から叱られたこともあるし、此の間屑屋の籠の岡田君の序文を見ると其間の事が想像さるゝが、かく同君を叱つた重野先生が西洋に往つて歸る時に、西村君がハルピン迄出迎へて、さうして先生に隨つて支那を漫遊して張之洞なんかに會つたことがあるらしいが、其の時重野先生も何うしてあんな風に固い人間になつたらうと言つて、先生がビックリしたと云ふ話があります。

西村君は矢張色んな曲折があるけれども、晩年に見るやうな西村君がそれが同君の特色であつて、さう云ふ特色を以て一生を終始するやうに運命づけられた人だと思ひます。

（大正十三年十一月二日藤塚誠二筆記）

碩園博士の初年と晩年

瀧川龜太郎

櫻泉小牧先生斃去せられし時、余も取敢へずその告別式に奔りたるに、西村碩園その父執なる故を以て、數日以前より先生宅に在りて諸事を經紀せり。余が入るを見て黯然として語りて曰く。成齋、敬宇、篁村、中洲諸先生皆既に世を去り給ふ。先生株として巍存せるは唯櫻泉先生のみなりしに、天また此の一老を奪ふ。今より以後疑を質し、益を請ふもの友人の外なしと。其眼には涙滿ちたり。余答へん詞を得ず、暫く茫然たりしが、事は一昨年秋に在り。程なく黑木欽堂逝き、萩野和菴逝き、友人の凋落相踵く。和菴が逝去せし時碩園の寄せたる手書に、

貴書拜誦禮卿（和菴の字）之訃嘸々御驚悼之筈小生は去一月十六日　宮中御講書始に同侍經筵、賜餐殿上、是永訣也、駿州興津に松方公見舞之留守中に疾亟との至急電にて歸東馳付候得共幽明已隔申がつかりいたし申候大阪より東京へ移居は舊交會集の樂あるを以て也四十有餘年の舊交を失ひ寂寞不可言也禮卿明治十三年弱冠にて入京十四年成齋先生の講席にて相知候内村子原は（邦藏君北涯又退帚と號す余年少の時五經の句讀を受け又文章を學ぶ出雲の人にて今京都に住す）興亞會にての訂交殆んど同時に有之禮卿に取ても子原と弟とは最舊交に候禮卿自知不起、病中舊交に談及候由興津旅行中殘念千萬に候墓志は小生之を草し圭卿（市村瓚次郎氏）繕寫銅版に致候昨九日は十日祭也夕飯相濟候後家人箋を展へて來會者之記念揮毫求候因て卒作一絕以奠

舊交四十有餘年、連袂今春上講筵、何料玉堂成永訣、音容彷彿獨泫然、

言不盡意、吾兄と君格（岡田正之氏、此時禹域漫游中）客中之悲哀とを思ひ遣り何とも言へず候舊友の各地索居は心細く候吾兄も東京に聚首如何生前に度度會飲會晤の外に老後の樂無之事と存候勿々不盡、

二月十日、時彥、

情緒纏綿字字皆涙、碩園の舊交に篤きこと以て推知すべし。何ぞ意はん未だ數月ならざるに碩園また和菴の跡を追はんとは。

仙臺の孔子會は、毎年春秋二季に釋菜を行ふを常とす、本年の春季釋菜は五月十九日と定め、碩園に來講を請ひたるに承諾せり、演題はと問ひたるに電報にて、

ブン（ブンショウノブン）クワ（ケウクワノクワ）ノイギニツキテ

と返事あり、余は武内宜卿（義雄氏）及び余か家族とその來遊を待ち居たるに、五月十日に至り突然『發熱甚しく旅行し難し程なく平癒すべければ講筵の延期を請ふ』旨來電、余はその通取計ひたるに、熱は降下したれども餘病又之に伴ひ入澤吳諸博士の投藥も效を見ず、家族門下の看護も其の甲斐なく、七月二十九日危篤との電報に接したる時碩園は既に玉堂中の人たりしなり。碩園と余とは生前度度會飲會晤の樂を與にすることを得ざるに至りしなり。『文化の意義につきて』は碩園の遺骸と共に土中に埋葬せられしなり。

明治十五年春、余始めて東遊し篁村先生の雙桂精舍に入る。重野先生の塾生なりとて講席に列せし一書生あり、身の長け五尺八九寸時時塾舍に來り好みて文章を談す。その言娓娓聽くべし。一日同舍生鄕里より碑文の起草を賴まれたれども、先生に願ふも畏多ければ誰人か筆を執るものぞといふ。彼の身長の一書生我作らんと數日ならずして作り來る。布置齊整文字簡錬、自ら大家の規模あり。余一讀驚異その鄕里と姓名を問ふに、種子島の產西村時彥と答ふ。これ余が碩園博士を識りし初めなり。

翌十六年東京大學文學部にて新に古典講習科を設け、生員を募りて和漢の學を講習せしむ。碩園も余も幸に選拔試驗を通過し官費生として入校することを得たり。碩園才力群を拔きことにその文章は漸く老熟に近く、敎授諸先生も射鵰の才として深く望を屬せられたり、當時大學文學部は神田一橋外に在り、官費生は校中に寄寓すべき規定なりし故、碩園と余とは案を聯ね堂を同じくし、相互の交誼逾加はりしが、その後大學の校舍今の本鄕赤門內に移るに及び、諸生も自由に下宿することを許され、碩園は森川町に余は駒込蓬萊町に轉寓したり。此の時碩園は歐陽公の文章を私淑し、淸人中にては、尤も邵靑門を喜び、靑門四稿を鈔し、靑門文鈔と題して書肆吉川半七方より出版せり。これ蓋碩園編著の始なるべし。尋て又大成館の屬によりて

十八史畧の補注を著し、稿その第三卷に及べり。

一日正午過ぎ、近く半鐘の聲を聞く。驚きて門を出つるに、火元は正しく碩園の下宿なり。余の着きし時は全家既に灰燼となる。西村は如何にせしかと索す中に用事にと上野附近に至りし碩園は漸く歸り來り、此の狀を見て忙然たり。（此の時碩園の衣衾書籍は全部烏有に歸し、其の先考の遺稿も亦厄に罹れりと碩園後に語る）余が蓬萊町の寓は素人の家にて室も廣ければ、今夜は我が寓に來れと連れ歸るに、同窓の諸友も漸く馳せ集り相謀りて、衣服夜具など買求め日夕の生活に不自由なきに至りしより、碩園はそのまゝ蓬萊町に机案を頓住することとなれり。

當時碩園は書を讀むに章句を求めず考據を務めず、專ら力を文章に致せり。善く飲むといふよりは寧ろ善く啖ふといふ方にて、鰻飯なれば二椀を喫せざれば其の胃腸は承知せざりしなり。時時駒込の喜樂亭本郷の若竹亭寄席に出入し、最淨瑠璃と浪華節とを好めり。

碩園余に語りて云ふ。我が鄕種子島にては諸生相會し、五月二十八日には曾我物語を、十二月十四日には義士銘銘傳を徹宵朗譯する習あり。銘銘傳は大石內藏助傳より讀み始め、漸く吉良邸襲擊の塲に至る頃は、夜深く物靜に寒氣身に徹し、油を添へたる行燈は益明なり。上野介殿の首打取たりといふ頃は、夜將に曉ならむとす。我が身諸義士と伍して讐を復したるが如く、快絕壯絕言ふへからず。蓋し此れ我が鄕の特有にして、忠孝の二道を子弟に奬勵せんが爲なるべしと。この二書朗讀の習慣より碩園は餘事稗史小說を喜むに至り、平家物語八犬傳等は最もその愛讀せし所なり。余が一週間ばかり痲疹にて困臥せしとき、常に枕頭に在りて弓張月を朗讀し、余が無聊を慰めしが、其の淀みなき朗々の聲は今も猶余が耳底に存す。碩園は此の朗讀によりて小說の句調を會得し、他日小說に評論に文壇上嶄然として頭角を見すことを得たり。

十九年、政府庶政の改革より、古典科生の官費は廢止せられ、碩園は學資を得るに由なく、余と別れて再びもとの駿河臺袋町なる成齋先生の家に寄宿することゝなりしが、その後又日本橋濱町？のホテル屋に轉寓

せり。當時原田博文堂の出版にて世間をさわがしたる『屑屋の籠』は此の際の著作なり。その頃野田藤吉郎氏（後に姓を長森と改む）は、佛蘭西の文豪ヴキクトル、ユゴーの『罪人の歴史』を飜譯し、題して『英雄の肝膽』といひ、潤飾を碩園に請ふ。碩園懇切に之を補修し又漢文の批評を加へ、これも博文堂にて刊行せり。（東海散士の佳人奇遇七八卷及東洋佳人も亦碩園の潤飾批評せし所なりといふ）二書の刊行より碩園の文名漸く世間に聞ゑ、尋て誠之堂にてはその『活觸髏』を、有文堂にては『奴隷世界』を、敎師の友は『奥山羽水』を刊行せり。これ等の書はその文字こそ概ね小說體なれ、その述ぶる所は皆嘲世諷俗の言、碩園が平生の持論を披瀝せしのみ。原田氏は今大阪に在りて『屑屋の籠』を再板せしと聞く。讀者これによりて畧々當時の碩園の抱負を知るべし。

その後碩園又猿樂町に轉寓、弟の時輔從弟の平山武燮と同居。國民の友にかかげたる端歌秋の夜の批評は此の時の作なり、その頃余に贈りたる郵書に、（大要用神田乾坤獄裏人と題し、二十一年八月十七日神田郵便局の消印あり）

近來梨の礫鐵砲玉トント返事も聞カス

扨廿日迄ハ大戰爭苦シイ〳〵十九日頃迄2丈平ニ賴ム返サレヌ事ハアルマイ是非賴ム南無賴ム重野ハ歸ル仕事ハ多シ借金ハ來ル慈悲じや情じや

おどけと思ひ玉ふナ返事ヲ待あなかしこ

君　山　兄　　天　　四

書中2丈とあるは二圓丈との義なり。窮迫此くの如し。而して其文字洒洒落落、妙不可言。窮書生の胸中自ら間日月あり。

それより一ケ月ばかりの後、予は原稿料を受取らんとて、或日の朝某雜誌發行人を森川町に訪ふに、玄關口より走り出つるものあり。單衣に菅笠、手に御座席を携へ、宛然彌次北の服裝なり、倉皇予に語りて云ふ。

『おれは江戸は食ひ詰めた、これより中仙道を經て京都に往く、貴樣の原稿料はおれが代つて高橋より受取つた、餞別として呉れ、』仰ぎ見れば碩園の天囚なり、暫し待てと引き留むれば、『同行山内愚仙が坂の下に待つてをる、あとは手紙だ』と飛ぶが如くに別れ去れり。これ碩園が關西移住の始なり。

その後碩園が京都柊屋より寄せたる手書に、

名古屋に著きたる時嚢中一物なし山内愚仙をして一書肆に至らしめて云先頃來某旅館に東京の大家西村天囚先生滯留し此の地にて筆硯に從事せんと欲す貴肆にて出板を引受呉れずやといふに書肆も『屑屋の籠』にて我が名を知りたりけむ快く引き受け呉れ多少の原稿料を得て漸く京都に到ることを得たり云云

余はその時出板せし書名を忘れたれども、端歌を漢文にて批評したる一小冊子なりしなり。

碩園はこれより柊屋に寓居。一時は滋賀さざなみ新聞に從事せしが、その後大阪に移住し大阪公論、大阪朝日、さては東京朝日に筆を執ること數十年。和漢雅俗を問はず文壇の各方面にその天才を發揮し、又日本宋學史、學界の偉人を始として有益なる著述を公にせしは、世人の知る所なれば今特に之を述べず。唯此に青年の時は全く章句考據を事とせざりし碩園が、晩年に至りてその好尚の全く一變せし所以を記せんとす。大正六年余に贈りたる書に云。

別後三年、音問杳絶、豈不馳想、疎懶使然、吾兄不深罪之、乃賜手敎、感難言喩、敬悉興居萬福、爲頌爲慰、弟昨秋以來承乏大學講師、懷德堂亦以今春開講、末學淺識、靦然爲師、慚愧不淺、勞苦亦多、然學半之効、亦復莫大焉、因是勉彊從事、惟恐不能兼顧耳、所幸身體强健、勿以爲念、承示、尊藁一篇、見徵景社同人評語、且云、東京文士、多諛少益、頗不滿意、足見賢者求益不已、佩服之至、同學之能文者、莫若吾兄焉、可知好文之深、而吾兄乃自稱不好文、何也、昔者顧亭林戒人、勿爲文士、而峻拒應酬、非學問經濟之文則不作、蓋吾兄卑視文士、其意相似、而今應索作序、則與顧氏相反、其所謂不好文者、毋乃自欺又欺人邪、弟自少好文、而拙于文、況執筆新聞二十餘年、所作者皆時文耳、古文則中輟日久矣、

六七年來、與粉山秀才、武內宜卿等結文社、每月一會、互相切劘、期以因文見道、無奈精力將衰、無復進境、尙何敢當高明之喩、祇吾兄求益之切、視之曹子建之好譏彈、僧齊己之拜一字師、有過靡弗及、而弟以三十年之舊交、徒諛言是貢、不獨辜負盛意、亦實非朋友講習之道、因策駑從命、捧讀再三、叨加鄙見、不覺塗抹、殆致難讀、乃更手寫一通、轉致秀才、得其評語謹此一幷附郵返上、夫知當否、取舍唯命、至景社客員之喩、則最爲同人之榮、幸請自今以後往復切磋、以領鴻益、世或謂漢文爲支那之文、不必作焉、可也、弟乃以謂自漢字入我邦以來、國史載籍、皆用漢文、而我邦文體、亦皆自漢文陶鑄變化、則漢文固爲國文一體、棄而不講、可乎、近時漢學大衰、而漢文之衰更甚、非績學能文如吾兄者、孰能回頹瀾、吾兄其勿謂不好文、而付之泯泯也、我輩雖不敏、請附驥勉之、今冬各地大雪、寒氣異常、想東北更甚、尙祈隨時自愛、併致意嫂夫人、是所企禱、專此布覆、順頌君山學兄先生講祺、弟時彥手肅、丁巳十二月念九、

日月逾邁、歲事莫矣、我輩以斯文任、何敢便與年俱老、今齡纔踰異粮三四矣、意氣宜尙壯、而書中云、精力將衰、慚甚愧甚、請相與鼓氣勵志、從事于此、吾兄美鬚髯、風貌有威、然白又添白、人視以爲老翁、而又以老翁自居、弟爲獻一策、不若剪去、以與年俱新其風貌、是化老爲少之法也、少者往往欲風貌似老人、老人宜伍壯者以忘其老、則剪去白髯可也、不知高明以爲何如、弟時彥再拜。

此れ碩園が現時の漢學漢文に對するの意見なり。その勇往邁進の氣象はるかに壯者を凌くを覺ゆ。九年八月念七日の手書に云。

辱手書、敬悉興居曼福、爲慰爲頌、承示高文和菴詩鈔序一篇、暢達雅贍、深歎不可及、謹加鄙注一二以奉還、惟高明取舍之、拙著屈原賦說、屢賜賛辭、感愧交加、弟生平深服姚姬傳義理考據詞章三者闕一不可之說、蓋精于義理者、不能詞章、工于詞章者、不通義理、至于考據之末弊、則拘々于一字一句之末、疎于義理、拙于詞章、難矣哉、其兼三者也、碩學白首、猶或不能、矧學淺才短如弟者乎、然竊自謂學者不

可自畫、因每讀書留心三者、及承乏大學講師、取楚辭而讀之、有所獲則筆之、雖學步三兼、憾不惟闕一、豈敢謂裨益學者、聊自從舊業耳、諸友勸登載藝文、又請繙譯邦文、意趣索然、深自增慚悔、靡及也、此種文字、現今學徒、無能讀者、幸有我兄賜一寓目、謬蒙稱揚、欣慰曷任、蓋我兄樂善成美、以進誘自任、尙希糾正紕繆、匡我不逮、浪華昨日大雷雨、俄覺爽涼、偶草屈原賦說下卷、論宋玉招魂之作于屈原死後、援禮記喪大記之鄭注孔疏、以辨王注朱說之謬、竊自信、是前人所未論及、快不可言也、近日當淨書請敎、今朝早起、作賈誼惜誓爲屈子遠遊篇注脚之說、會尊書至、捧讀高文、遂裁此書、猶晤語也、擬月內草講案畢、以來月初一東上、在東京市外下大崎島津公爵邸內、滯留旬餘、惟暑暇尙有旬日、倘得我兄亦入京、把臂一堂、置酒論文、則其樂果何如也、不知我兄無意于此乎、時下爲道自愛、是祈、謹此手肅、祇頌君山學兄講安、弟時彥頓首、八月念七。

又同年九月七日の書に云、

貴書拜誦公私御繁多にて御上京不相叶候由、遺憾之至ながら撰述益富、不堪頌慰、文章軌範、於我邦爲有用之書、高著一出、當嘉惠不尠、先覩爲快と樂罷在申候、樺島石梁讀離騷手稿御贈被下好參考、難有珍藏可仕候、我邦學者集中、除南郭拙堂等二三家外、關于楚辭者極少、石梁斯文、雖寥々短篇、亦似解騷者、賦說下卷騷學第十一に補記いたし度候、尙又石梁眞跡詩草之跋、御下命拜承、歸阪後起草乞敎可申候、

楚辭は王洪朱の三家にて澤山に御座候、尤明にては黃文煥淸にては王夫之蔣北驥の三家及び戴東原の賦注は參考之價有之、其外は陳陳相因申候、

扨家母（淺子太孺人）今年八十一に相成候に付陰曆八月二十三日の誕辰に小宴相催度誠に恐縮に候得共壽言一聯を賜り度奉希候過日岡田君格より表聯一對小包にて御送申上候筈是に御認被下候樣奉願候東京にては小牧、市村、萩野、岡田の諸老、京阪にては狩野、內藤、鈴木（豹軒）、長尾、磯野之諸君に依

賴致居候老兄の一聯なければ藻飾不足の感有之、是非願上候、支那ニテハ壽聯が流行ニ御座候間眞似申候序又は詩は尙更可なれとも面倒の事故御願申兼候間壽聯に致候

家母ハ種子島ノ儒家平山西海ノ女ニシテ其の母前田氏（小生外王母）は和歌を以て　昭憲皇太后ノ台覽を辱くせし事有之候しかし家母は學問は不致歌ハ好み申候得共取立てて申程にも無之但廿八ニシテ寡ト爲リテヨリ節ヲ守リテ二兒を敎育し小子をして今日あらしめ候迄の苦心ハ傳ふ可くやに存申候右宜布奉希候九月初七

書中に所謂義理詞章考據三者、闕一不可との說はその學風の一變せしを證すべく、楚辭の蘊奧を窮めしは京都大學及東洋文化協會學院諸子の夙に知る所、家母以下十餘行の文字は、その太孺人に對し色養兼至れる狀を想見せしめて餘あり。碩園晩年又尙書の研鑽に從ひ、尙書異讀考、尙書論文の新著ありと聞く。

大正十年秋碩園は、宮中よりの御召にて御用掛を命せられ、三十餘年永住せし大阪を去り東京に移住す、一新聞記者にて直ちに勅任の待遇を辱ふせしは蓋異數なるべし、當時余が賀詞に對する碩園の答書に、

貴書拜誦時下御淸祥不堪欣賀候陳者野生市井の間に放浪すること三十餘年、以送老閭巷爲分候處、不料推薦、再三堅辭するも允されず遂に御請仕候次第不得已候、然るに御祝詞を辱くし慚謝の至奉存候、去三日大阪引揚東上仕候、御出京之節は御來臨奉待候、御用掛なれハ散官と被存候處、中中以て忙しく臨時出勤多く、彼是多忙罷在候、但し每日出勤之勞無之ハ幸に御座候、高作例之妄評御海恕被下度候、物氏喜近聖人之國數里と同じく小生は東京住居と相成、我兄の所居に近き二百里を喜ひ申候、匆匆不備十月七日燈下、子信學兄侍史、弟時彥

内村邦藏君ハ近比京都大學荒木總長の囑託となり折折出勤之樣に御座候、荒木氏ハ其學と文とに敬服之事なれハ仕合と存候、

菲才安分掩柴扉、何料朝冠到布衣、君召臣行不俟駕、夢魂猶向瀛陰飛、

卅載遊蹤寄浪華、老來不意忽移家、他鄉看慣故鄉似、欲去遲々登客車。
恩榮幸與老萱同、遭遇清時感寸衷、秋霽應陪觀菊宴、黃華白髮上林中。
維持世道有斯文、鼓篋多年共樂群、臨別殷勤相告語、儒風消長賴諸君。
脫却簑衣向帝京、江干話別記交情、多年歸釣寧相忘、瀨上烟波鷗鷺盟。

辛酉秋赴任東京、留別浪華諸友五首錄上君山學兄有道是正　　弟西村時彥初草

留別の詩第三首其の奉檄感喜の狀見るが如し。

碩園奇書珍籍を喜び、蒐集多年、數萬卷の多きに達す。昨年歲晚の詩に云、

珍重先脩未刊書、平生過目輒收儲、歲將莫矣遭奇籍、苦問家人有俸餘、

亦曾て予に示せる書中に舊作を錄して云、

家藏萬卷不爲貧、訪購多年太苦辛、他日無妨代薪米、子孫未必讀書人、

壬戌夏日錄舊作君山道兄粲政　　弟　彥

而して絕句室人交謫の聲を聞かず。令內の賢想ふべし。楚辭の注釋異本を集むること最も多く、屋に扁して百楚山房といふ。これも昨年の冬の事なり。碩園余に語りて曰く、明後大正十四年の陰曆五月五日は、屈原歿後二千二百年なり、余は此の山房の床の正面に屈原の畫像を揭げ、之に供するにその愛する所の蘭花を以てし、快友四五人相會し、心ゆくまで丹釀をくみかはし、酣醉淋漓所謂衆人皆醉の狂態を演し、以て屈原の靈を祭らむと促す、亦好趣向ならずや、兄も亦來り會せよと。而して碩園も亦巫陽の使を受け、此趣向を凝らしたる珍無類の祭典の企圖も亦徒に歸せり。

嗚呼、明治大正の文豪西村碩園は終に此の世を去りぬ。今より以後誰か鴻典寶冊を草するものぞ。誰か雄篇大作を綴るものぞ。義理誰と與に講せん。詞章誰と與に商せん。考據誰と與に定めむ。我が疑は質するに由なく、我が過は知るに由なし。今その遺事を記するに當り、感愴胸に逼り、淚潸潸自ら禁ずること能はず。

慨然として筆を抛つ。

（大正十三年十一月六日夜）

まだ五年

笹川滿堯

「こんなをかしなものを作つては自分を慰めて居ります」と、その胸中の寂しさを言外に語られる先生の母堂淺子老刀自は、今年八十五の高齢である。

明日は東京を見捨て、大阪へと志ざす日の前一日雨降りければ。『もろともに眺めし宿の高どのゝ涙の雨とかきくもる日ぞ。』軍中にて。『千代までと頼みし兒等は先だちていづくの里に我れを待つらん。』

先生の親孝行は有名なもので、明け暮れ、側の見る目も涙ぐましい程の親愛を傾け盡して居られた。逸話がある。子弟達は、いつも先生の雲行が惡くなると、きつとおばあさまの御居間に避難する。と先生はどんなにむしやくしや腹を立てゝ居られる時でも、お母様の前に來られるとけろりと何もかも忘れて、ニコ〳〵して居られるので、お影で先生の大雷も落ちないで濟むと云つた風である。先生は、せめてまだ五年は生きて居らる可きであつたが、惜しまるゝ者に死は早く來る。對世間的な仕事もこれからと云ふ時であつた。先生自身の著述もこれから完成されやうとしてゐる時であつた。しかも何よりも、八十五の御老母を一人寂しく殘して先生が先立たれた事はいたましい事である。私はこんな話を奥さんから聞いた。病院で先生がもういよ〳〵駄目だと云ふ時、今生の別れにと御老母が病室へ案内されて來られた。と、その時まで數日間全く假死の狀態に陷つて昏睡して居られた先生は、お母様の姿が病室の入口に現れると、忽ち、奇蹟的に目を覺

まして、病体を起す樣にしてお母樣の方を疑視されたが、そのまゝばつたり倒れて、それを最後に息を引き取られたと云ふ事である。あれ程親孝行な先生が、孝養を完ふせず母親に先立つて逝かれたとは、先立つ者にも殘るものにも痛ましい、運命の戯れである。先生の遺骨の埋葬された阿部野の墓地は、母堂のために先生がひそかに用意して居られたものである。と云ふが、さかさまに自らのものとなるとは何と云ふ痛ましい不幸であらふ。遺族の人達は、先生の第二の故郷――懷德堂及び大朝のあるこの浪速の地を永住の地として來阪された。その寓居を森の宮に訪ねたのは秋も深い十月廿日の夕刻で、私も病床を離れた許りの時であつた。市電を降りてから余程歩いた所で、田舍町のやうに靜かな家である。市電の音も聞こえず都の騷音も屆かない。

その時、先生の沒後初めておばあ樣に會つたのであるが、何と云つて挨拶していゝか、只默々として頭を下げて對座したのみであつた。恐らく其時一口でも先生の事を口にしたならば、おばあさまの目には、痛ましい老ひの涙の溢れ出る事を私は知つて居た。室の一隅にある白木造りの新しい神棚の中に安置されて、さゆらぎもせぬ燈明の光に守られた先生の位牌の前に額づいた時、無言の中にしみ〳〵と涙のみが流れ出た腰の曲つたおばあさまが、『後先きではあるがこうしてやれば息子もよろこびませうから……』と云ひ乍ら何かと神棚の中を世話してから靜かに目を閉ぢて合掌されるのをじつと見入つた時は一入いた〳〵しく感じられた。永遠に日の光を絶たれた大きな冷たい墓穴の中に自らも横はり乍ら、尙ほ失ふた子供の死骸を抱擁し愛撫し續ける母親の、限りなく溫かい純情を感せずには居られない。

奥さんに案内されて寓居の二階に上つて見た。一番廣い室には、恰かも先生がまだ存命して居られるかの樣に、先生の趣好に從つて、先生の居心地のいゝ樣に飾りつけてあつた。奥さんの心持がよく察せられる。室の入口には狩獵姿の先生が鐵砲を小脇にかゝへ乍ら、故福島大將と握手して居られる寫眞がかゝつてゐた室の中の欄間には重野先生の書簡を額にしたのをかけてあつたこの部屋は北向の室で少しうす暗い室であるが如何にも落ちついた部屋である。奥さんの說明に依れば先生はこんな部屋を好むで居られたらしい。成る程

そう云へば松ヶ枝町の舊宅も暗い家で、先生の書齋になつて居た部屋は、幽邃な深林の中にでも居るやうな感じのする部屋であつた。こんな所に先生の內面の何かゞ覗かれるやうな氣がする。先生の少年時代を過された鄕里種子島の生家も矢張りうす暗い大きな舊家で、四方とも森に圍まれた閑靜な落ちついた感じのする屋敷にある普通大園と呼ばれる古い屋敷で、先生の晩年の號碩園と因緣がある。

先生は又奥さんと同樣に知人や子弟の人達に御馳走をする事が大變好きであつた、それも金持の見得を張つた御馳走とは無論趣さを異にして、奥さんの手製の御馳走で質素に、みんなの家族と一緒に一つ食卓を圍むのである。何よりも親しみ深い御馳走である。今度もその習に從つて是非とのすゝめで夕食の御馳走になつた。食事で思ひ出したのは、先生は非常に支那料理がすきで、いつも二三人連れては川口の支那料理店へ出かけられた。と云ふ事であるが、不幸にして私は其幸運にめぐり會はなかつた。先生は又鄕里の產物であるモハミ（藻喰み）と云ふ魚の干物が大變好物だつたと聞いてゐる。先生の言葉の中には何處か鄕里の言葉の訛りがあつて、それがかへつて吾々同鄕の者に得も云へぬ懷しみを與へたが、それと同じ樣に、世界一の支那料理に無上の舌鼓を打たれた先生が余り美味でもないがしかし鄕里の香の特に甚だしくこびりついて居るモハミの干物を好物とされた事は何かしら吾々に床しい感じを起させる。先生は又酒も好きであつた。若い頃は隨分酒豪だつたと聞くが晩年は極く少量だつたやうである。今度もおばあ樣の食膳に小さな〈〈グラスの酒瓶が添えてあつて、それを自分で燗し乍ら飲むで居られたが、やがて少し醉ふて赤くなつた頰に、物憂さも忘れたやうなほゝ笑みを夢のやうに浮べて追想を語られる、『いつも時彥が飲む時一つ二つづゝ相手になつてゐた所が今ではくせになりましてなあ……酒も少しつゝ戴くとかへつて藥になるそうで御座りますから、こうして今でも戴いて居りまさあよ……』と。藥かどうかは別にして、酒は矢張り飲む人々に、老人にも壯年にも青年にも、色々の意味で夢と空想と慰安とそして稚氣の世界を擴げてくれる不思議な魔法の水である。おばあさまの顏に紅がさすやうにおばあさまの心にも、又吾々の知らないなつかしい世界が、愛兒

の生ひ立ちから死までの長い〳〵幾春秋を辿り乍ら、くり擴げられて行く事であらふ。先生の若い時代には隨分亂暴な生活や遊蕩的な生活もあつたと云ふことで、中年以後とは全く變つた生活だつたやうである。所で面白い話がある。先生或る時子弟の某氏に對して、『お前達は若い内にもつと〳〵勉强しなければならないぞ、酒色に耽るやうな事があつてはいけない』と云つたやうな御說敎をされた。そこで、先生の若い頃の事を知つてゐる某氏は答へて「だつて先生も若い頃には隨分豪遊されたさうですが……」と一本やり込めた。先生は莞爾として「うむ、それはそうだつた、だがねえ、俺には俺の不拔の所信があつたよ。人間には、いくら酒色に耽つても決して間違ひのない人もあれば、一度でも遊ぶ味を覺えると、もう一生救へなくなる人もあるし樣々なものだからね、前者にはなりがたいが多くは後者になる。だからお前達は好んでそんな危險な道には近寄らない方がいゝのだ。わし程の自信があればお前達がいくら遊んでも少しは默つて見守つて居やうが……』と、これには流石に一言もなく某氏は頭を垂れたと云ふ。先生は世間一般の概念に在るやうな所謂漢學者、道學者式の固くるしい融通のきかない不具的人格の所有者ではなかつた。晩年の先生は、角の取れた溫雅な磊落な人で、その中に犯し難い尊嚴を持した人であつた。懷かしみの中に尊敬の念を起させる人であつた。人情の表裏を辨へた人であつた。酒も飲めは、狩獵も好き、琵琶歌も唸る（北白川の臺灣入、常陸丸共に先生の作である）と云つた碎けた自由な氣分の中に、金鐵も破り得ぬ誠實な信念が秘められて居たのである。

郷里の種子島は平家の落武者の末裔の住地丈けに昔から風流な所である。先生の母堂が古今式の和歌を咏まれるのもその影響の一例である。明治前後までの文化の程度は日本の何處の土地とも肩を比べ得られた事を信ずる。又平家風の風流と同時に昔から儒敎の盛んな所で、先生の恩師前田豐山先生の門下からは先生初め可なりの人材が出て居る。豐山先生は非常に高德圓滿な人で、子弟の敎育に多く盡瘁された人である。そして郷里の精神的中心人物として深く尊敬され、吾々の幼年時代まで、双眼とも盲目となつて生きて居ら

れた人である。その家は今でも保存されて居て、私の家から極く近い所にある。天囚先生もその家に通ふて幼い頃から論語や孟子を修められたのであらふ等と思ふと次から次へと色々な空想が湧いて來る。餘談は置いて、豐山先生の沒後は、大阪に居られる天囚先生が、鄕里の儒敎思想の代表者として、精神的中心人物として、遙かに故鄕の人々の德望と尊敬とを一身に擔ふて居られたのである。しかし先生の死去と同時に鄕里の儒敎思想も中絕を來す事であらふ。何だか惜しいやうな氣がする。先生の書かれた南島偉功傳（種子島の歷史的記錄）は、今は故鄕の普く人に遺された只一の尊とい片身となつた。

同鄕出身の人達の大部分は、東京及京都阪神其他何處の地に居る人も、直接若しくは間接に先生の恩顧を蒙つて居たのである。そして、今恰かも慈父を失ふた子供達のやうに、皆等しく先生の在りし日を追想し乍ら深い哀愁を感じて居る。何とも云へぬ大きな寂しさを感じて居る。吾々は先生と時代が違ふ。吾々若い者には矢張り近代人としての惱みがあり、懷疑があり、批判がある。敎へられる事を總てそのまゝに信念にまで高く導く丈の單純な美しい心持を持合して居ない。だから先生の根本的の思想生活——つまり思索の少い、批判の少い、そして傳統的な規範的な信念の生活にそのまゝ無條件で共唱する事は出來ないが、然し乍ら先生の高德な人格には深い尊敬の念を感ぜずには居られない。あたかも、藝術上の古典的な尊とい完成品に對すると同じやうに。

そして、假令先生の思想的な事業を故鄕に於て繼承するものがなくても、故鄕の一小島よりも幾百倍か偉大なるこの浪速の地に於て、意義深い懷德堂が復興され、そして堂友諸彥が、先生と志を同じくし道を同じくして進まれる事を影ながら幸甚に思つてゐる。恐らく先生の靈魂も堂友諸彥と共に存つて永遠に修道される事であらふ。

森の宮の寓居を辭する頃はもう宵も更けてゐた。わざ〳〵玄關まで見送つて下さつたおばあ樣の姿に又も淋しさを感じ乍ら、交々の思ひ出を抱いて潛り戸の外に出ると、待つて居たやうに秋の夜風が急に冷たく頰

を撫でた。ボヘミアン的な私にも儒者の家にも秋風は同じ樣に吹いて來る。

（一三、一一、一〇夜）

懷西村先生

河内久彦

五月からのお病みつきで、六月の末頃一時御危篤の報に接しましたが、あの御體で而かも充分の御手當も出來て居るのですから、まさかと思つて居たのでした、其後急に御快方に向はれたと承り、何はさて安神致しました。其の內時期を見て、御見舞申上げてと思ひ、平素御嗜みの岐阜名物、長良川の鮎もそろ〳〵出廻りの季節となりましたので、七月の十五日途中岐阜に立ち寄つて、漸やく五六寸位にもなつたばかりの鮎を一籠提げて、御見舞致しました。

此頃先生は、ずつと御よろしい方で、四五日前より御床を離れられて坐敷中を、ブラ〳〵散歩がてらの御運動をなして居られるのだと承りました、永い病でおやつれ甚だしくあやしげなお足取りで歩るいて居られるのを見まして痛はしう思ひました。

この正月御會ひしてから今日までの、御變りの御樣子で如何に御難病であつたかを御察しすることが出來ました。されどこれで、余程御快方の處だと聞けば、日を經ると共に御意識もとゝのはれ、お体の方も快復されることゝ思つて御喜び申上げたのです。

先生は私が手土產の鮎に大變感謝されまして、長良川の鮎は又格別だ、今年も鮎の初ものを食べたと御仰つて如何にも天下の珍味と云はんばかりの御風情で、舌鼓を打たれたのですが、これが先生の最後に鮎を賞

味されたのであつたかと思ひますと……

先生の鮎ずきと來ては一通りではなかつたのです、丁度昨年夏私が駿州小山に居る時分、此處も又名高い山北の鮎の產地でありましたが、山間の僻地だけに殊に夏分は誂へ向きの土地でありましたので、而かも鮎の御好物でお一泊がけにと、御招き致したのです、先生はそれは何よりだとて、お酒は自分で銘酒を持參するから、うんと鮎の御馳走になりたいとのことでした。

愈々當日となりまして、私は山北へ出掛け漁師が釣り上げるのを待つて片端から買ひ上げて來て、御望みにまかせ調理させて差し上げましたが、まあこんなに澤山鮎を食つたことはなかつた、御陰でお酒も、ちと量を過ごしたと申された位でした、そこで色々鮎の御說明を承つたのです、日本一等の鮎と云へばやはり岐阜の長良川の鮎だねと、云つて居られたのです、此度もこの御言葉とこの御好みを思ひ出して長良川の鮎を特に選んだのですと申しますと、先生は御達者な時分とお變りなく、忘れられない鮎の風味と云つて賞味されたので、私も此の上もなく心地よく、此の分ならば旬日ならずして元氣も恢復されることゝ思ひました、尙又御一統樣も今後兩三日の模樣では、鎌倉へ靜養するか或は早速腦症の治療に取りかゝるかとの事で、私もまづ〳〵安神致し即日歸阪したのです。

私が同家を辭去するとき、先生はわざ〳〵玄關まで御見送り下さいまして『御前は大阪へ行つたらすぐ引き返して來てくれよ』と、御仰つたのですが其の御言葉が未だに明瞭に耳に殘つて居るのです、私は當時何心なくハイと御答へ申したまゝ御別れ致しました――私が、歸阪後は、日々御恢方の由に承り、殊に十八日より吳養生園に御入院と聞き、最早日ならずして御全快の御事とこそ思ひ、其の吉報をこそ御待ちして居ましたのに、計らずも廿九日には御危篤の電報に接したのです。

不取敢其夜上京しましたが途中汽車中でも、氣が氣でなく夜の明けるのが待ち遠い樣に思はれ、且つ先日御別れした時に先生が『すぐ引き返して來いよ』と、お仰つた事が一厨はつきり私の頭に浮んで來ました

ので、御言葉に從つて今上京して居るんだが、果して、どんな御用があつたのでせうかと、若しや萬一の場合の豫感でもあつたのかも知れないなどゝ、あれを思ひこれを思ひ、最早力も落ちた樣に、思ひ耽つて居ますと汽車は早や、靜岡に着いた頃夜も漸く明け離れて居たのです、早速東京朝日を求めて先生に關する記事を探しましたところ

西村博士危篤

肺炎から腦症併發し小石川音羽養生園で加療中の宮內省御用掛天囚西村時彥博士は二十九日朝來病勢昂進全く危篤に陷つた

尙又

西村天囚博士重態、本多靜六博士大禮丸で遭難の噂ありこの二人が逝けば恐らくこの二人の後に、この二人はあるまじ哀しむべし

と、ありました

噫々此の樣子では、迚ても〳〵望みもあるまじ、最早や失望の底に沈み、所詮東京へ向ふ元氣も挫けましたが、勇を鼓して五反田の御宅に辿り着いたのが御晝頃、同時に全くそれと悟つた私は勝手口からスゴ〳〵とお座敷に通り痛はしい先生の遺骸を拜んで、何と御挨拶が出來ませう、永い間の御病氣でおやつれの面影さぞや御老母の上を御思し召しつらんと思へば、無情の涙下るのみ、たゞ旬日前のこと、先生はまだ病み上りの危うげな、お足取りながらも、自ら御老母の御手を取られてお夕食の膳に導かれたるなど、何と御孝心の程いと感じ入つて居ましたが、今は只だ忍びの草となり果てられし、おあさましい御姿を御守りすることゝなつたのです。

顧れば丁度一年前、あの恐ろしい關東大震災の當時、御養子時敎君と私は、駿州小山に住居つて居ました爲めにどれだけ先生に御心配を、お掛けした事でせう。

小山が山間の僻地であるだけ、東西の交通全く杜絶し被害も甚だしかりし上に、箱根の險所の事なれば、兎に角、人の行き來も困難にて、先づ暫くの間は所々よりの情報にて想像する位ですから、お互の心配はたまらないのです。私達は東京の慘害を聞いて、皆樣の御身の上を思ひ、居ても立つても居れない始末、又東京では小山全滅と聞かれて如何に御心配を掛けたか知れません、漸く五六日後に互に消息を知り合ふ事が出來たのですが、それ迄の思ひやりは一通りではなかつた事が判ります。

當時先生から第一信を戴きまして、厚き先生のお情を感じ入つたのです。難有さの余り之の御手紙こそは大事に大事に保存して居るんです。

長い〳〵御手紙ですから、其の後節だけを一寸擧げます。

高輪南町の持田氏方(富士紡績專務取締役)に好便ありと聞き此の手紙を認め申候、先々運の强さよ、兩家の多幸よ御先祖樣に今夜は神燈神酒をさゝげて祝ひ可申候

物質缺乏を察するも今は如何ともし難し、瀛車便開けたらば見舞に行く、災後は流行病多し、健康に注意せよ、分けて子供の健康に注意せよ、東京は大慘害言語に絶したり、追々知れる事と存候に付畧す

今日より電信開通、宅は玄米を買ひて臼にてつき申候、一家皆々健康御安神のこと、先はめでたし〳〵

九月六日　　時　彦

と認めてあります、當時たよりなき私達は、余震尙頻々たる間に、如何に力强く感じました事でせう。

若し又私達の內に誰か間違でもあつたらばこそ、どれたけ先生に御心配を掛けた事ならんと思ひます、今年の正月は家族全部打ち揃ひ年始旁々、災後初めて上京し當時の模樣を御話したのでしたが、お互に無事で何より〳〵結構な事だつたと打ち喜ばれましてから、まだ漸く半歲、災後まだ一年にもならぬに、かくも無情の風すさみ慈父とも賴む先生の御不幸に遭遇しました事は、悔みても尙足りませぬ。

生れ出つるとから、先生の御腕に抱かれはぐくまれて可愛がられた私の長女マッチンは、先生をヂッチヤ

ンとお呼び致して居ました、ほんに赤ん坊の時からマッチンは殆んど先生の御書齋で育つたと申してもよい位に、又先生に親しんで居たのでありますが、先生の御病中は時折、やあマッチンが來たのか、などゝ御呼びになつたと承ります、今六つになつたマッチンが申しますのに、ヂッチャンは何處へいらしたの、何時でもヂッチャンは居ないのね、わたいね、ヂッチャンが居ないから淋しいわと、子供心にも淋しさを感じて居るのです。

マッチンが泣いても笑つても可愛がつて居られた、只だ一人のヂッチャンに受けた御恩は、海山に譬へる事も出來ないのに、其の御恩の萬分の一も御報じすることも出來なかつた事を、このマッチンが物心ついてから、どんなに殘念に思ふ事でせう。

限りなく惜しみても、今はすべなく、只々先生の、とはの御旅路安らけきを祈りつゝ。

祭　碩園西村先生

松窓　岡田　英

皇紀際中興。渾沌奎運移。非有天才出。挽回誰能爲。嗟哉碩園子。文章仰宗師。擒藻何自在。光采眞陸離。操觚一代業。立言不朽垂。育英存至樂。薫陶遍相施。動靜都率化。寛嚴各得宜。懷德崇先修。堂址親支持。翺翔江湖上。夙貯鸞鶴姿。民風任揮椎。名聲寰宇馳。挾翰朝紫闕。草詔布丹墀。蘭臺軒霞標。鳳池整羽儀。奈何天緣淺。問道悔太遲。華城一交膝。容顏僅相知。白玉樓急就。皇天不慭遺。乍失光明燭。後生何所隨。

噫々碩園先生

肥後　鐵二

私は大阪中學時代に碩園先生宅の書生でありまして、今日社會の一員と爲り得たのは全く先生の慈育薫陶の賜であると感謝して居る次第であります。

此度松山先生より碩園先生追悼號發刊の御通知を受けましたので、故先生日常の一端を御紹介し、併せて先生が如何に言行一致の學德高き方であつたかと云ふ事を申上げ度いと存じます。

明治三十五年、大阪では天王寺で全國第四回博覽會がありました。其頃、先生は北區此花町に居られましたが、先生は當時阪神在住の我々同鄕の子弟を、毎水曜夕、自宅に御集めになつて、孝經、論語、孟子の各篇に亘り講義を爲して戴きました。先生は御座敷、床の前に端座し、見臺上にて、古本の孝經を繙き、我々講聽者を圓座せしめ、謹嚴なる態度で、諄々と講義をせられましたが、當時の有樣は今尙眼前に髣髴として居ります。先生が最も力を入れて我々子弟に敎へて下さつた事は、世に三恩ありと云ふことでありましたが先生は、終生、實行を以て、我々に範を垂れて居られた次第であります。

舊主、種子島家に對する實例

先生は、御承知の通り、南島の一孤島、種子島の方でありますが、舊主種子島家が華族の恩典に漏れて居るのを、先生は御嘆きになつて執筆せられたのが、南島偉功傳であります。同書が上梓せられ、畏くも　乙夜の覽に供し奉る事が出來、續いて種子島家が華族の禮遇を御受けになつたので、我々舊臣は　天恩の優渥なるに感泣致しましたが、此の種子島家の事が　天聽に達したと云ふ事は全く先生の御力による事で、舊臣一同先生に對して感謝して居る次第であります。其後と雖、種子島家の事に就ては寸時も腦裏より離さず、表面上、裏面上、舊臣としての本分を盡し居られたと云ふ事は申す迄もありません。此度、先生御逝去の報

舊主、種子島男爵家に傳はるや、男爵に於かれては、御愁嘆に相成り、我が片腕が折れたる心地すと慟哭し給ひ、先生の寫眞を飾り祭壇を設け、遙かに鹿兒島に於て、遙拜式を爲し給ひしとか仄聞して居ります、之れを以て、如何に男爵家に對し舊君臣の情義が厚かつたかと云ふ事が窺はれます。

師に對し情義の厚かりし實例

先生は、幼少の頃、鄕儒、前田豐山先生に師事して居られたと云ふ事は、多くの人が承知でありますが、先生は、私が先生宅に居る間も、時々、前田先生の安否を、手紙を以て問はれ、面白き事等は、直に、通信して居られました。又、御歸省になつた際は、第一に、舊主の御邸に、次に、豐山先生宅を訪はれるを常として居られました。豐山先生歿後、前田家が家計不如意になつたので、先生は、豐山先生の子孫を恰も自己の子孫の如く、自宅に引取つて、或は養育し、或は良緣を求めて嫁せしむる等、他人の企及し得ざる情義の厚き範を示して居られます。

親に對する實例

先生が、御老母に對し孝養を盡されたと云ふ事は、社會全般の認むる處であつて、私が申上る迄もありませんが、私は、先生が今日學德高き一世の大學者となられたと云ふ半面に於ては、御老母に滿足を與へんが爲めに、自重、自愛、自奮、刻苦精勵の結果、遂に今日の社會的地位を得られたと感する者であります。前に日常の事を一寸と申上げます。

先生の御邸は、先生は勿論、家族一同、御老母に滿足を與ふる樣に心懸けて居られた次第でありますが、先生は、特に何ぞ面白き話しでもあれば、先づ御老母に話しを聞かせて上げる、珍敷物が送られて來れば、第一に御老母の御覽に供する。甘いものがあれば、御老母に上げる。御老母が心配になり相な事は絕對に言はぬと云ふ風で、朝夕食事は勿論、見るもの聞くもの、萬事、御老母に滿足を與ふると云ふ事に努力して居られました。又、喜怒哀樂の情に於ては、母子恰も一体の感がありました。面白き事や、可笑敷き事があつ

て、老母が御笑ひになると、先生も如何にも愉快相に相好を崩して笑はれました。之れに反し、御老母が一寸した病氣に御罹りになると、實に心配になつて、醫師を招くは勿論、諸方面に亘り充分注意を與へられましたが、恢復になると、早く御癒りになつて結構であつたと、安心されました。先生が、御老母を大切にし孝行を盡された實例は、餘りに多くして其擇擇に苦しむ次第でありますから、最近に於て、御家族より承つた話しを申し上げます。

昨年、震災當時であります。先生は、頑健とは云へ五十九歳の老人でありますが、自ら八十四歳の老母をお背負ひになつて、自宅より山越にて島津邸に避難されたと云ふ事です。其途中、先生が骨格偉大なる爲め御老母は負はれて居つても骨に痛みを感ぜられ、止むなく、先生は、御老母を抱くが樣にし、或は後方より押し上げるが如くして、漸く火急の難を免がれられたと云ふ話しであります。

右の例を以ても、先生が如何に御老母に孝養を盡されたかと云ふ事が、窺はれると存じます。

右の外、先生は、眞の儒者で、道德家であつたと云ふ事は、皆な御承知の事でありますが、私は、就中、長幼序ありとか、古老を尊ぶと云ふ美風があつたと、考へます。

大阪在住の際は、時々同鄕人會を開催せられ、京阪神の各地より、多數の同鄕人が集りましたが、其際は社會的地位、階級、職業等の如何を問はず、常に、年長者順に席次を定められました。又、鄕里より年長者の先輩が上阪すると、文樂座等へ案内して、老人を樂ましめて、自分も喜んで居られました。

其他、他人を世話するとか、子弟の誘掖に努力すると云ふ事に、常に心掛けて居られました爲めに、大阪在住の際は、京阪神の者、東京御住ひの際は、關東地方の同鄕人で、先生の御厄介にならぬ人は、尠からぬと存じます。獨り同鄕人のみではありません。各地の方を、隨分世話も爲し、書生に置くと云ふ風にして居られた爲めに、先生の高恩を蒙つた者が多く居ると存じます。

私の如きは、先生の眷遇を辱うする事茲に二十餘年、今尙我が子の如くに訓育指導して下されて居つた次

第でありますが、今は、形見ともなり、家寶ともすべきものに、左の一幅の書があります。

居處不莊非孝也。事君不忠非孝也。莅官不敬非孝也。朋友不信非孝也。戰陣無勇非孝也。

丙辰春、肥後中尉、將赴任朝鮮、特來告別。乃書曾子之語、以贈中尉。其拳々服膺而勿敢或忘也。

邦彥。印。

私は、此の訓戒を受けまして、眞に座右の銘として居る次第であります。

其他、先生の一言一行、吾人の範とせざるものはありませんが、今や、幽明處を異にし、再び先生の溫顏に接するを得ず、暗夜に燈火を失ひたる心地して、吾人の進路に迷ふ次第であります。

私の觀た西村博士

岡野告天子

西村君と私とは朝日新聞を中心として因緣淺からぬものがある、君が明治二十三年朝日入社當時は私の父とは十七の年少であつたが同僚として又浪華文學會同人として親交ありよく宅へ遊びに來られた、六尺豐かの背高で何時も玄關の鴨居を庭に立つたまゝ兩手でグッと衝キ支へて下を覗き『お宅ですか』とやる流儀、當方はまだ十二三の小僧だつたから仁王さんの前の小猫のやうに下から見上げ同君の小說は紙面で愛讀して居るから何となく興味を以て『ハヽンこんな荒ッぽい人が面白い小說を書くかなァ』と思ひながら父に取次いだ事など記臆して居る。當時父に伴はれ西村君と一緒に大阪郊外の秋を賞せんと梅田停車場へ往つた事がある、君は初めから片手を袖に入れた切りだ、私は手に怪我でもして居るんだナと思つて居たら切符賣り窓の

口へやがて其袖にして居た拳固をグワンと出したかと思つたら夫れは一個の五十錢銀貨を握つて居たのだつた、今時は脛囓りの學生が流行洋服でカフェーを飲み廻るのに當時既に天下に文名を馳せて居た同君が錢入れ一つ持たないなど今日から考へると想像の出來ぬ磊落さである。私は小供の時から同君や渡邊霞亭君等が盛に遊び、遊び過ぎては後で困つて居る話など小耳にはさんで居た、父の歿後新聞社の人となり、西村君とは十三の年少であるが是れも親から引繼いで友人となり、余り近しくして居る爲め又一面單に新聞事務の交渉にのみ日が暮れて其上私に學問の素養なき爲め君の學問識見に就いては却つて感じが鈍い憾がある。私は西村君を師友としてもつと愼しみ深く尊敬せなければならなかつたのだが、餘りに親しかつた爲めに今から思ふと敬意を失した事も多々あるやうだ、私が師友として奉ずる程度よりも西村君が亡友の子として私を庇護し指導してくれられた親切は遙に深いもので實に感謝に堪へぬ次第である。

前述の如き間柄であるから今日まで私の眼からは單に『新聞社の同人としての西村君』を觀て居た丈けで、改まつて西村時彦とは如何なる人なりやなど考へて見た事もなかつた、君が歿後其一生を通じた業蹟を考へて見るに西村君は普通の漢學者道學者でもない、小說家文士でもない、新聞記者でもなければ又大學講師でもなく、況して宮內省御用掛でもないやうに感ずる、其何れを取つても之を西村氏であると說明するには不充分なやうに感ずる……と云ふと何だか詭辯に類するが、要するに西村君は矢張り一個の西村時彦君である。是れは特に親しくして居た私が今瞑目して過去三十年間の交りを一貫した感じを思ひ浮べた歸納である。

西村君の育ちは勿論漢學畑である、併し同君には漢學に偏した臭味が餘程少ない、道學者のいやに窮屈な所がない、同君と話して居ると尤も是は私が話し相手として不足であつた結果でゞもあらうが何時も書畫談や狩獵談や旅行、滑稽に失敗談、旨い食ひものなどの肩の凝らぬもので食後など寢ころびながら夜更くるまでやる、而も其間に何か古人の云つた事に當ると、該博な引例で面白く話し出し知らず〳〵敎訓を受ける。君は大義名分をやかましく云つた、併し是れは所謂昔氣質でアレ位のやかましさは別に道學者でなくとも云

ふ事だ。若い時の遊び盛りは別としてダラシのない所謂文士を以ては決して比すべきでなく、さりとて新聞記者としては又餘りに嚴格に過ぎる。大學講師としては人間味が餘りに豐かで、又宮內省の人としては非官僚で平民的な處が多過ぎる、斯う見て來ると其何れでもない、然らば西村君は果して何者であるか。強ゐて云へば一の『大藝術家』であると斷ずるを最も適當なりと私は信ずる、而して藝術の本領は勿論彼の殆んど古今獨步と云ふべき名文である。西村君の書いたどれ〳〵が名文であると今一々具体的に說明の必要ない位に同君の名文家たるは旣に天下に許されて居る、同君の生命は矢張り彼の文章にある、勿論內容なき虛飾の文はいくら名文でも何にもならない、西村君には別に特殊の思想や主義はなかつたが漢學育ちの勤王家で大常識の上に立つ批評家としての堅實な態度が絕ねず彼の名文を通じて關西人士に密接に結び附けられて居た。

私が新聞社で永年机を並べて居る中に感じた事は同君の眞面目な事と大きな常識の持主である事との外に名利に淡なる事と官僚式の嫌ひな事と案外事務家である事で、勿論此等が決して西村君の全豹ではないが、普通知られて居る所に附け加へて置き度い。同君の性行は中年支那遊學以來豹變したと云はれて居る、尤も若い時でも無暗に亂暴した譯でもなく又中年以後も無暗に堅くなつた譯でもない、西村君としては何れが眞にして又何れが僞といふ譯でもない、又詭辯と云はれるかも知らぬが西村君の美點は心理學的に解剖して云へば寧ろ其放縱な所で、其欠點は却つて堅い所であつたかも知らぬ、西村君の放縱は支那遊學をせんでも年を取れば止むべきものであつたらう、又放縱だからとて別に人をひどく困らせた譯でもない。あれ丈けの文才あり學問あるのは普通ならば必らず幾らかの誇大妄想を持ち又名譽慾に驅られるものである、文章丈けを見て居ると立派で人に接し更に親しく起臥を共にすると興の醒める事の多いものだ、ソレが西村君には毛程もなかつた、大體『何になり度い』といふ事を生來思はなかつたのではないかと想像される位君は名利に淡泊であつた、薩閥が幅を利かした時代に少々でも野心を持つて居れば彼れ丈けの才幹がある人ならばどんな出世でも出來たらうと思ふが、ソンな面倒臭い事は考へた事もなかつたらしい。朝日新聞に入社したのも別

段新聞記者志願でも何でもなかつた、只偶然入社したのだが此又朝日斯聞社といふ處が昔から一種の空氣を持つて居る、夫れは『朝日式』といふより外に一寸説明が出來ぬが強ゐて云へば『大平民の氣分』だ西村君が此空氣中へ飛び込んだのは頗る其處を得て居るし又飛び込んで後同君が更に此空氣を純潔なものにして容易にツマラない名利の爲めに動かされ汚されない強固さを養つてくれた。同君は曾て居つた、『我々は雇はれ人で社長は雇ひ主だ、併し朝日社では此感じが少しもない。何だか自然の流れに從つて此職務を執つて居るやうな感じがある、是れが他に一寸見られぬ美風だ』と、内藤湖南博士や本多雪堂博士も同樣な感じを云つた事を記憶して居る、野心を持たず而して一面一國の宰相も屁とも思はぬ、況んや木ッ葉役人や金持町人や代議士をやである、だから此等の小名利に汲々たる連中が社員にあつても夫れ等は長續きしない、直ぐ社を止める事になる、過去の歴史が明らかに之を証明して居る、此空氣の中に西村君は三十年の久しき其全精力を傾注したのである、而して其間論説に小説に紀行に美文に儀禮文に考証に隨筆に詩に琵琶歌に編輯事務に經營に講演に有らゆるものに當つて來た、而して行くとして可ならざるなく又力めざるなく、私が新聞記者てないと云つたのは畢竟之を一個の新聞記者として類別し去るにしては餘りに立派過ぎるからである餘りに餘分の天才を持つて居るからである。』

君は官僚嫌ひとして自然東京よりも大阪が好きであつた關東よりも關西の平民主義が性分に合つて居た、從つて關西文學の考證から懷德堂の復興となつて來たのは自然の勢であるし、既に新聞記者として三十年の大努力を盡した後の事業としては最も適當のものであつた、又京都大學に漢文學の講義をして居た事も、是は自分の趣味としてやつて居る』と常に云つた、だから義務的にやるのとは違つて樂んでやるから講義は非常に興味がある、荒木總長など常に學生と机を並べて聽講せられたと聞いて居る、宮内省御用掛となつたのも勿論先祖からの勤王精神を享けて居る君としては適材適處であつたし又誠心誠意奉仕した事であらうが、一寸旅行をするにも許可を受けなければならず、又年に僅か一二度しか大阪へ來る事も出來ないといふ窮屈な

事は同君としては好ましからぬ事であつたに違ひない、だから私は官内省向きと思はない。斯う述べ立てゝ來ると結論として西村君は畢竟するに西村君で之れに或る特殊の資格や肩書を附けて尊ぶべきでなく單に「一個の西村天囚居士」として永く記念し尊敬し又同時に親愛すべき大人格者であると云ふより外にないと私は思ふ、そして其本領は何處までも一代の文章家として寧ろ之を藝術家の範疇に入るべきである。故松方公は同郷の大先輩であるが常に西村君の文章學問に敬意を表し老公邸訪問の客は大抵座敷で失敬するが西村君の時は必ず玄關まで見送られたといふ事だ。

藝術の深みは人格に依る、西村君の名文を永久に光輝あらしむるものは全く其深き修養に成る大人格であらねばならぬ、哲人トルストイの若い間は盛に賭博に耽つた事もあつた、西村君が藝者を總揭げして祇園の一力から格屋へ人力車の行列を造らせたなどの逸話は少しも同君の功業を傷けないのみならず、君の血脈中に詩人としての暖かみが絶えず、苟くも君に接する人をして如何なる時、如何なる場合、如何なる條理にも必ず人情を基調とした一種云ふべからざる懷かしみを感せしめ、益々君の德を醇乎たるものたらしめた處に君の偉大を認めたい、此點に於て私は君を單なる文士記者とせず、明治の人格高き大藝術家の一人として永久に記憶し度いと思ふ、同君を無暗に窮屈な道學者と見る人は其一面のみしか知らぬ人である。

故碩園西村博士を懷ふ

在鹿兒島縣指宿　八板正二

這回故碩園西村博士の追悼號を御發刊になりますので、私に迄感想なり懷舊なり寄稿すべき御懇書を辱うしましたが、貴命に副ふべき記述をなすべきことも出來ませず、從つて博士の德業を顯彰するの一端ともなりませず、却りて貴紙を汚すの恐れがありますけれども、私は鄕里に於て博士の居宅と近隣でありまして、幼少より今に至るまで少なからず指導や御世話になりてゐましたし、又多少緣故の關係もありますので、追悼禁じ難く御懇命に任せ懷ふまゝの概畧を斷片的に述ぶることに致します。

博士の家系は種子島の舊邑主なる今の種子島男爵家の祖先より分れたる舊家でありまして、西村、下村、河東等の宗家であります。近年號を碩園と稱へられましたは鄕里の博士の宅地の字を大園と唱ふるに出でたことのことであります。曾て博士の某知己が碩園などゝ六かしい文字を取りたるは何か意義ありやと問ふたことがあるが、之は別段の意味あるにあらず、鄕里宅地の字名より出たるのであると答へたが、まさか大園などゝは云はれないからと笑話をしてゐられました。博士は常に忠孝を說き、感恩報謝即ち報本愛敬の美德を唱導し訓諭してゐられました。又所ら其の實踐家でありました。種子島男爵が未だ授爵の御沙汰がない以前には其の名門の埋沒せんことを慨して、博士の幼時の師たる故豐山前田先生と俱に奔走盡力せられ、舊主家累代の功績を顯したる南島偉功傳なるものは當時の著であります。實に授爵の恩命を受けられたるは博士の力も亦與りて大なるものと存じます。爾後今に至るまで其の隆運を念じて萬事に心を致してゐられました。舊師の前田先生は博士母方の姻戚にも當りてゐられますが、先生が晩年失明せられたる不幸を殊に悲みて常に慰問の音信を斷ず、歸鄕の折には暇あれば必ず身邊に伺候して只管慰安に誠を捧げられたることは至れり盡せりでありました。先生逝去の前年歸鄕せられたる時、先生より種々後事を託せられたそうでありますが、圖らずそれが遺言になつたと涙ながら語りてゐられました。そうして依託の遂行には心を碎き力を添へてゐられました。鄕里の郡敎育會と村敎育會とが主催して豐山先生の紀德碑を建設することになり、碑面の（豐

山前田先生紀德碑）なる大文字は博士の手にて揮はれ、碑文も亦博士の撰に成り、本月十一日竣工除幕式が行はれましたが、此の時博士も故人となられましたのは、轉た感慨に堪ない次第であります。博士は三歳にして父君に訣れられましたので常に之を嘆じてゐられました。大正五年八月歸展五十年祭を執行せられ其の告文を靈前にて捧讀せられましたが、聲涙共に下り殆ど讀むに堪ざる体には列座袖を絞りました。其の告文は至情横溢眞に讀むものをして涙なき能はざるものであります。本書は當時私に寄與せられましたので保存してゐます。博士歸鄕の時は必ず先づ祖先、並に先考の展墓をなした後にあらざれば他事を見られず、時には上陸直に展墓をされたこともあります。博士が文學博士の學位を授けられたる時、及宮内省御用掛を拜命せられた時は直に電命して私に祖先、先考及故前田先生の墓に代參奉告せしめられました。現在の母君に孝養を盡されたる事も終始一貫にて、未だ母君が鄕里に留守居をして居られた時の時々伺候の音信は懇切周到を極め、眞に母君をして安意されざれば措かざる底のものであつたことを記憶してゐます。其後大阪東京に同棲せらるゝになりましてからの奉侍振は大阪東京に於かるゝ知己の方は寧ろ私より以上詳悉のことゝ存じます。私も兩三回訪問して親しく見聞いたしましたが、常に母君の心を慰め參らすることを唯一に赤心を盡され、其の欲せらるゝ處に順ふて母君の喜びなさるゝのを見ることを眞の樂みとしてゐられましたことを深く感じました。一昨年私が上京しまして一夕某軒に晩餐の饗を受け、其の歸途銀座の夜景遊覽に隨ひました時に、近比おばゝ樣が老年になられて丁度小供の樣にあらるゝと笑ひながら小供の玩具の人形など御氣入の物を求めて歸られ之を呈せられましたが、母君大に滿悅になりまして共々にそれを弄びて笑ひ興せられたる眞情の溢れたる態は今猶髣髴として眼前に在ります。今八十餘歳になられました母君を殘して去られました博士にして若し靈あらば如何にあられましようか。又母君も明治二十七年には二男時輔君を失ひ、今又極老に達して此の不幸に遭はれ悉く實子ご幽明を隔てられました心情を察しまして事々物々涙でないものはありませぬ。博士は又親戚故舊に厚く、一昨年の春は新宿御苑の御製茶の恩賜を拜せしとて、其の光榮を分つべ

く之を割いて遙々贈與せられ、故前田先生及母方祖父母等の靈前に供へ、其外親戚に拜戴せしむべく私に分配せしめられました。私が父は最近博士の家より分れました西村家より養子に來ました血族のものでありまして、昨年九十六歳を以て亡くなりましたが、西村の血統を受けたる長老として存命中常に眷遇を受けましたことは誠に感銘してゐます。是等數へ來れば筆に盡し難くあります。又鄉里の爲には懇切に配慮せられ、出身者にして其の前途の光明を與へられたるものも少なからず、鄉里の視察員の一行など上京しました時には必ず之を招きて鄉情を聽取し便宜を計り指導をなすなど懇待せられまして皆其の德を景仰せざるものはありませぬ。先輩の中には後進の世話を見るは其の依賴心を增長し、自主獨立の勇を養成する所以にあらざるとて、靈ろ冷淡に附して殆ど顧ざる的の方が多いと云ふ事を聞いてゐますが、是も一理ありましよう。けれども依賴心排斥と指導啓廸其の志を遂げしむると、先輩たる所以に於て其の見を異にしてゐられたものがあつたかと想はれます。我鄉里は舊藩時代當時より領主大に文學を奬勵せられ、士分は一丁字なきものなからしめられ、從つて學殖の深き儒者の出でたるもの少なからず、博士の先考も故重野博士の學友にして其の一人たるが如き、南溟の孤島なれども薩藩に於て文學の淵叢として日州都の城と併び稱せられ、明治三十七年以前迄は中等程度の敎育を施す機關もありました。けれども學制や財政に制せられ中等敎育を施すこと不十分となりましたので、博士常に之を慨嘆し之を興すことに心力を盡されつゝありました。近比近き將來に於て其の設備の實現すべき曙光を認むるに至りたるを聞くの時に方りて、其人を見ること能はざるに至りたるは誠に遺憾に堪へませぬ。博士は又雅德人を容るゝの量大海の如きものあり、接するに貴賤老幼の隔なく、等しく溫容を以て迎へ、快濶に眞率にして、毫も飾る處なく眞情を發露せられ、誰として一度博士に接して快感を起さざるものなく、幼童も其の慈に懷つき婢僕も其の德に服してゐました。博士は十六の少年にて鄉里を出でられましたので、四十餘年他の言語を慣用せられ、鄉語は全く轉化せられたるものと思の外、鄉里の者に接せらるゝ時は勿論、家庭に在りても多くの鄉語を使用せられ、宛も鄉里に於けるが如き感を生じまし

た。博士曾て語らるゝに自分が青年時代他府縣人の問に對し、鄉里が種子島であることを答ふるは何だか恥かしき氣持も生じたるが、之は自ら屈し率直を缺く所以にて宜しからず、故に自分は特に之を明言して恥しからず、反りて島人たるを自稱するの快感を生ずとのことでありました。前述の碩園號の出處と云ひ、愛鄉の情操大に味ふべきものがあると存じます。今回御惠送に預りました貴誌懷德第一號に、博士の堂友會の成立を祝せらるゝ講演を閲覽いたしましたが、其の所說は前來述べました事は唯二三の概畧に過ぎませぬけれども、其の躬行の一致の點あるを窺ふに足るものがありはすまいかと存じます。世の中には學理の蘊奧を究め卓見博識の大學者にして其の裡面の行爲を覗ふときは嗤ふべきものがなきにしもあらずであります。けれども博士は多く得難き學德兼備の大人格の所有者であつたことを今更一入感ずる次第であります。本年の五月病に罹られました報に接しまして驚愕措く能はず、遠隔の上に公職の末に列りてゐまして親しく病床を伺ふことも出來ませず、唯電報に書信に思を馳せまして、輕快の報に接しては天にも昇る心地いたし、時に變を來たさるゝことを傳へましては愁に沈み、有名なる國手の診療あるを唯一の頼みといたし、生命には別條なきことゝ遙察し、尙只管神明の加護を祈りてゐましたが、遂に天年を假さず、不歸の客となられました悲報に接しまして、天を仰ぎ地に俯して慟哭し無情を絕叫いたしました。春秋と云ひ、地位と云ひ、將來益重きをなさるゝの時に於て、此の不幸を見たるは悲痛譬ふべきものなく、鄉黨は柱石を失ふて痛惜措かず、國家も亦國器として損失あるものと存じます。落花流水再び歸らず、如何に涕泣いたしましても返すことの出來ませぬのは人世の常と諦らむる外ありませぬ、人として死後餘芳あるは最貴きことは申迄もありませぬが、博士臨終に當りて天恩の優渥なりしは誠に餘榮ありと申すべく、博士も泉下に感泣してゐらるゝことゝ存じます。又博士は大阪は多年馴染の地にして居心地よく老去りて骸骨を乞ふたる時は隱栖の樂地となすべく語られてゐましたが、今日圖らずも貴堂に於て特に設けられたる盛大なる葬儀の下に永眠の地となり安らかに瞑目せらることゝ察します。茲に終りに臨み更に博士生前素懷の一片を述べ、追悼の誠意を布き冥福を祈り

ます。

文學博士西村碩園先生を懷ふ

谷山初七郎

西村碩園先生一生の光輝ある閲歴は、實に世上周知の事にして、之を表彰するも、他に餘る程其の人あり。予は只自ら先生に接見せし所の數事を記し、以て其の感想を述ぶるに過ぎず、且つ病後健康未だ復せず、僅に意を書生に授け、以て筆を執らしむるを得、看官請ふ其の粗陋を恕せよ。

予の始めて碩園先生に邂逅するや、鹿兒島市築地の有村旅舘に於てす。時正に明治廿八年日清戰後の際にして、予、先生の舊師前田豐山翁、舊主種子島氏に侍し、天機を奉伺せんと欲し、此の旅舘にあるを聞き、刺を通じ許されて其の室に入る。翁席（座布團）を外づして予を迎へらる、予も席を避けて翁を拜す。翁着席を勸めらるること再三。予尚遜讓す。翁曰く、其の儘にては御挨拶も出來ずと、窃に舊主に注意せらるる所あり。舊主即ち席を外づさる。予恐懼して御免を被る旨を述べて謝し、主客同時に席に着く、此に於て始めて敬意を表し、指教を乞ふことを得たり。傍に客あり。軀幹雄偉にして、襟度洒落なり。翁之を紹介して曰く、是西村天囚（當時の號）なりと。予天囚先生の名を聞くや久し。今此席に於て其の謦咳に接す、誠に望外の幸なるを告ぐ。時に翁予が加治木の出身なるを聞き曰く、曾て貴鄕の文儒伊藤瓊山が霧島榮之尾溫泉の作を見る、曰く「天下名山良夜月、人間能得幾回看」と先生直に是實に名詩なりと稱賛せらる。予乃ち瓊

山の事、竝に榮之尾の勝に就き少しく說く所ありて辭す。翁の謹嚴にして苟しくもせざる此の如く、以て其の平生舊主を輔導し、子弟を薰陶するの如何も知らる可し、而して先生は夙に出藍の譽あり、曾て東京に遊學し、既に文壇に角逐し、社會に推重せらる、故に翁舊主家に關する事も、專ら先生に謀らる今回東上奉伺の美擧も、亦先生と議せられしを知るべし。

其の後三十二年、予重野博士の駿河臺の宅を訪ふや、先生も亦至る。曰く、今回前田老、舊主種子島家授爵の件に付き、遙々上京せりと。博士に向ひ助力を乞はれ、予も亦傍より之を贊成する所あり。博士も之を快諾し、宮中に斡旋せんと答へられしことあり。時に先生、種子島の遠く南洋に僻在して、其の事蹟多く世に傳らざるを以て『南島偉功傳』を著はし、以て種子島家の七百餘年間、能く其の領土を保ち、其の士民を撫し、而して其の治績の大に見る可きものあるを顯彰せらる。一日豐山翁予が本鄕の寓に來り、偉功傳一冊を贈らる。曰く、識者云ふ、舊列藩主家が、清時授爵の恩を受け、尙舊士民との關係を結び、以て皇室に奉事するは、益々帝國の基礎を鞏固にする所以なり。と此の說洵に然りと。其の上京の理由を告げらる。予も之に感動し、偏に恩露の南島に降らんことを希望せり。幾許もなく『南島偉功傳』は辱く天覽を賜はり、尋いで種子島家は男爵を授與せられて、清華に列せらるるに至る。此に於て先生と翁との、舊主家に報ゆるの志は、成れりと謂ふべし。

大正三四年の頃、先生豐山翁の歿後、繼嗣の絕ゑんことを憂ひ、予に繼嗣の人選を托せられしことあり。予も先生と翁とに報ゆる所あらんと欲し、銳意奔走すれども得ず。尙物色中、俄に命を奉じ、學生を携へて支那視察の途に上れり。其の歸りて大阪に至るや、先生予を迎へて高樓に招飲し、縷々他に其の人ありて繼嗣の定るを告げ、予が勞を謝せらる。予慚愧に堪へず、其の舊師を思ふの厚きや此の如し。

昨年予の南島に赴くや、上妻氏に案內せられて、種子島家の館址に登る。地頗る高爽にして眺望に富み、喬木鬱然たり。今小學校の敷地となる。北方校舍棟を竝べ、講堂特に揭ぐるに豐山翁の寫眞額を以てす。其の

南方に𤋮の舊宅あり、而して其の傍に巨大の石碑横はり、尙工事中に屬す。是亦豐山翁の爲に建立するなり。蓋し先生の主として周旋する所、碑面の題字より碑文に至るまで、又皆先生の手に成る。此に於て、豐山翁の學風は、永久に傳はることゝなれり。先生又能く師恩に報ゆと謂ふ可きなり。是より先、予先生麻布の僑居を訪ひ、揮毫を請ひしことあり。時に二詩を書して與へらる。一は吉野の作にして、『不似柳營煙址冷、香雲深護古行宮』の句あり。蓋先生の得意とする所にして、需めに應ずる毎に、此の詩を書せられしと云ふ。一は先生始めて海外に航せらるる時の作なり。

今朝初辭故國天、一衣帶水是朝鮮、勿將行路勞慈夢、兒在穩波明月船、

此の二幅今尙予の家に藏せり、以下所載の詩と共に、先生忠孝の心深きを知るに足らん。

去歲予が息、種子島松下家次女と婚を結ぶや先生夫妻、同家に代はりて、專ら其の間に盡力せられ、大小の事其の指圖を仰がざるはなし。其の厚誼、今猶感謝措かざる所なり。曾て先生予と新夫婦とを招いて、晩餐の饗あり事終はりて將に歸らんとするや自動車を招かる、予辭すれども聽かず。其の新作を半切に書して示され、以て姑く予等を留むるの策をなす。其の人に親切なる此の如きものあり。而して其の詩は七首に及び、皆震災後の作にして、每篇至誠惻々、時事を慨し、皇室を思ひ、窮民を憐むの情に發せざるはなく、人をして歎賞已む能はざらしむ。

頹俗滔々可奈何、不知修省事機多、震驚百里火三日、無乃皇天垂譴訶。
歲暮都門劫燼殘、孤兒孀婦泣飢寒、君王減膳憂勞甚、宏濟誰令上下安。
春宮令典近佳期、忽遇刼災朝市悲、予不忍行須緩々、蒼生聞命感仁慈。
九重煥發詔書新、大訓昭々示所遵、固本淳根須努力、盛衰只在一精神。
震壞人家日旻延、生靈當日籲旻天、相逢相慶幸無恙、願送災年迎吉年。

特に『恭讀皇后御歌謹賦』と題するあり

霰聲一夜到蘭闈、軫念寒威徹板扉、要使疲癃皆挾纊、深宮仕女縫綿衣。

又當時兇徒襲來の蜚語ありて、先生自ら八十餘歳の萱堂を負ひ、後方の山中に逃れられしを詠せるものあり。

繁華一旦震焚空、回想當時悸且恫、猶記訛言寇將至、蒼皇負母入山中。

此の美談は、此の詩と共に不朽なるべし。

又去年九州夏期講習會の、霧島榮之尾の溫泉場に開かるるや、先生大迫大將に案内せられ往いて薩藩の歴史を講演せり。畢はりて五古四十韻一篇を作り、後予に示さる。先生講演の精神は、悉く寫して此の詩中にあるを知るべし蓋し先生最後の傑作にして、國體に關し、風敎に繫り、以て千古を戒むるに足るの大文字なり。

扳地六千尺、雲霧繞山根、疑是海島浮、蟠龍仍虎蹲、東曰高千穗、干霄何嶂嶂、絕巔接廣野、母乃高天原、萬世可以王、　天祖誥　天孫、降臨瑞穗國、披雲駐鑾軒、三神治西偏、皇祖始東轅、肇國丕基遠、綿延一系尊、隼人居山下、狗吠守禁垣、子孫忠且勇、祖法矢弗諼、胙土誰守此、將主出將門、襲封七百載、海內推雄藩、密邇事王宮、不敢怠大番、交代守闕謂內裏大番文武養士久、奚啻多育賁、一旦風雲會、英豪忽聯翩、中興贊鴻業、旋乾而轉坤、鍾秀生人傑、士風有淵源、矧此發祥地、于今神蹟存、今茲癸亥夏、吾來訪山村、崎嶇試攀陟、澡浴湧泉溫、匪惟洗暑熱、鄙吝銷無痕、匪惟銷鄙吝、俯仰感　皇恩、列聖深德澤、仁風似春暄、億兆一心赤、奉事情義敦、君民牢相結、加之王敎惇、國體何其美、上下本一元、萬邦森羅列、豈可同日論、所彼何爲者、外慕多旁言、世道有興替、雲雨相覆翻、一朝墜前烈、何以貽後昆、三州俊髦士、念祖勿暋暋、內省須反本、存養日本魂、願如山不動、無窮護　帝閽、維新舊邦固、光華永煒煒、自笑杞人匹、不如獨叩盆、高歌發逸興、臨溪聽潺湲、山樓肆遐矚、雲霧變晨昏、櫻洲如拳石、海門一高墩、早起登山角、肅然拜朝暾、清明生浩氣、欲復無憂煩、

顧ふに三十年前、先生『天下名山』の詩を賞せらるるの日、豈今親しく其の地の溫泉に遊浴せられ、此の佳詠あるを知らんや、人世の事亦奇なりと云ふべし。

先生の生涯最も力を盡されしは、大阪朝日新聞主筆時代にあるべく、曾て浦鹽に赴き、又支那に遊び、常に其の横溢せる才筆を以て、豐艶雄麗なる文字を行り、以て萬丈の氣焰を揚げ、盛名已に海内に馳す。且つ懷德堂の再興に關し、寄與する所亦尠しとせず。數年來東京に至り、宮内省御用係となり、又島津公爵家編輯所の主任となり、其の間文學博士の稱號を得、明治大正の耆宿凋落の後を承け、其の多年蘊蓄せる所を以て、大に國家の奎運に貢獻する所あらんと欲し、又他日功成るの後、再び阪府に退き、其の餘力を懷德堂の爲に致さんと欲し、而して俄に二豎の厄する所となり、其の志を果す能はずして逝かれしは誠に終天の恨なり。然れども、先生生前の功績は、其の文辭と共に、千秋に傳ふるに足るものあり。今又懷德堂の會員諸彦相謀り、廣く先生生前の故舊知友に請ひ、先生の學德に關する寄稿を集めて發刊し之を後世に留めんとするの擧あり、先生又以て瞑すべきなり。

（大正十三年十一月十日）

拜啓尊書正に拜誦仕候　故西村先生には小生幼少之頃より御眷顧を蒙むり居り慈父の如く慕ひ居り候事とて懷舊之情も人一倍深き次第に候へ共之れを綴るは平生筆採らぬものには容易之業にあらず折角之紀念號を汚す事もやと思へば氣後れ致し、又先生之德業は御長逝の當時大阪朝日紙上に諸方面の懷舊談掲載され大體之

れにつき今更蛇足之觀有之候まゝ旁乍失禮御辭退する事と致申候　唯先生は大阪を永住之地として疾く定められ殊に平生其恩顧に浴せるもの相集り一種の理想鄕を作らん事を希望せられ大正九年春猶淺き一日小生御伴して茨木在を實地踏査したる事有之候が其後間もなく小生大阪を去らざるを得ざる事となり先生亦續いて東京に去られ其實現之機なく簀を易へられしは返へす〳〵も遺憾に存候

右乍遲延御斷旁御詫申上度如此御座候

敬具

十一月十七日

玉利七二

懷德堂堂友會長　松山直藏殿

晩年の碩園先生

東京　有馬純彥

予曾て天囚時代の先生の文名を聞くこと久し、而かもそれは單なる新聞記者としての文章家たるを知るのみ、然るに一と度先生の著日本宋學史を讀むに及び、先生が單に文章家たるのみならず博學の人なるを知り爾來先生を慕ふこと年あり、會大正九年夏先生が島津家の招聘に應じて上京せらるゝや、予は櫻泉小牧翁博士推撰文の起草を依賴せんとて、青山原宿の弓削田氏方に先生を訪ふ、これ先生の溫容に接するの初なりき、

爾來朝夕先生に接して親しく教を受くること四星霜、初先生我が編輯所の編纂長に就任せらるゝや、時に櫻泉小牧翁總裁たりき、翁は先生が夙に同國の先輩として敬慕せられし所なり、故に先生は就任以來よく翁を補佐して修史の事業を統督せられき、當時儒文に名ある而かも同國出身の二大博士を我が編輯所に併せ有することは予等の以て大に光榮とせし所にして一種の誇を感せざるを得ざりき、其後先生の文名は九重の雲深きあたりに達し遂に宮内省御用掛に補せらる、櫻泉翁曩に宮内省御用掛として經筵に侍せられしが今又先生この名譽に浴せらる我が編輯所は一層の光輝を放つの感ありたり、然るに好事魔多く先生の就任後僅か二年餘にして櫻泉翁は長逝せらる何等の恨事ぞ、當時先生が如何に翁の死を哀惜せられしかは予等の親しく實見せし所にて、先生の情義の篤きに今更ながら感激措く能はざりき、實際先生は翁を先輩として畏敬し諸事翁の意見を聞き其得意の文をも必ず先づ翁の校閲を仰ぐを常とせられき、故に翁もまた深く先生を信じ自己の文を先生に示して批評を求めらるゝことありたり、兩先生の間は斯の如く水魚の交ありしを以て翁臨終の際は親しく先生を病床に召して後事を托せらる、故に先生は葬儀萬端を督し且つ翁の遺書を整理し又遺稿を校訂して刊行のことに力を盡さる。斯くて翁の沒後は我が編輯所も先生自ら之を主宰せらるゝことゝなりしを以て先生の責任漸く重きを加へぬ、曾て櫻泉翁の在世中は先生翁に遠慮して修史事業に就ては毫も自己の意見を加へらるゝやうのことなかりしが、翁の沒後先生は始て事業の方針を一定し、修史に就て大に爲す所あらんとし、自ら薩藩文化史に筆を染めらる、當時先生は一週間に二回宮内省に出務の外編輯所に在りて專心修史に從事せられしが本務の外に猶成齋、櫻泉兩先師の遺稿を校訂せらるゝの務あり、又近年宮内省職員の爲に經書を講し、且つ予等の爲にも唐鑑を講せらる、更に本年に入りては島津公嗣君の爲に孝經及日本外史を講じ、其外大東文化學院、國學院大學等にても又經書を講せられき、加之、櫻泉翁の沒後一般の賀詞、碑文等の如きは自然に先生の執筆に俟つもの頗る多かりしを以て先生の晩年は實に多忙にして殆んど寧日なき有樣なりき、而かも先生はその多忙の中に閑を得れば予等を從へて近郊の史蹟を探り古き碑文を手拓するを

唯一の樂みとせられたり、本年三月春まだ淺き日先生例の通り予等數人を從へて埼玉縣飯能に游ぶ、會某寺内に建長頃の板碑數基を發見し大に喜び、數日後金石文の研究家たる木崎愛吉氏を伴ひ再び飯能に往き板碑を手拓し、大に滿足して歸來直に得意の文を物し予等に示さる、これ實に先生が近郊史蹟探訪の最後なりけり。

噫、想ひ出せば涙の種なり、五月九日夜、庚申倶樂部（島津家職員の會）の例會を目黒の旗亭草の屋に催す、當日編輯所より出席するもの先生及東郷中將と予の三人なり、然るに其日天候惡く烈風沙塵をまき、旗亭まで十五丁行程大に苦む、予少しく先生を氣遣ふ、至れば果して先生酒を口にせず、又名物の竹の子飯も僅かに箸を附けられしのみ、而して宴半ばにして窃に予に中座すべきを以てせらる、予乃ち先生と共に中座して歸途に就く、風少しく止むも冷氣加はる、先生薄着なるを以て予大に之を氣遣ふ、先生目黒新道より桐ヶ谷に出で五反田通りを經て歸宅すべきを以てせらる、蓋し間道は淋しきを以てなり、故に予は桐ヶ谷の第一日野小學校前に於て先生に別る、翌朝出勤の途大崎町役場前を過ぐ半丁位前に先生の後姿を見かく、當日は恰も衆議院議員の總選擧日なり、先生今し投票して歸宅せらるゝ所なりけん、予先生の異狀なかりしを見て大に安堵す。然るに翌日役所に於て先生發熱臥床のことを聞く、前日宮内省に出務せられ非常に惡寒を催ふし新聞紙を脊中に入れて僅かに凌がれしと、予愈一昨夜の宴會に出席せられしことの惡かりしを覺り、氣の毒の感に堪へざりき、其後先生の病は次第に重り遂に肺炎と爲る、以後の病狀經過は予之を筆にするに忍びざるなり、斯くて先生は幸子夫人の渾身の看護も其甲斐なく、八十五歳の淺子母堂を殘して遂に長逝せらる予先生の臨終に侍して、未だ曾て斯の如き悲哀の感に打たれしことなかりし、そは實に淺子母堂の永別の光景にてありき。

教室に於ける西村先生

北京　松浦嘉三郎

大阪に生れ、大阪に育つた私は、中學時代から西村天囚先生といふ名は聞いて居つた。殊に中學の一級か二級下の生徒の中に、平山某、黒木某といふ、西村先生のお宅に寄食して、私達の中學に通つて居つた人があつたので、先生の名はそれとなく私の頭裡に刻み込まれて居つた。併し直接謦咳に接して、教を受くるに至つたのは、大正六年京都文科大學に學ぶに至つてからである。史學科の專科生である私は、西村先生の講義を正科目として聽かねばならぬ規則はなかつたのであるが、幼時よりその高き名聲を聽ける西村先生とは如何な人であるか、一度見て見たいといふ好奇心も手傳ふて、大學一回生に共通な氣分を以て、同窓神田喜一郎君に誘はるる儘、聽講に出掛けた。その頃は、毎金曜日の第四時限と、晝食と差し挾んで第五時限とが、先生の講義時間であつて、第四時限には楚辭の講義をなし、第五時限には漢作文の添削といふことであつた。楚辭の時間には、大學院學生も聽きに來るし、彼れ此れ二十名近くの聽講生があり、先生も非常に熱心に、音吐朗々抑揚頓挫に富んだ、極めて快活な調子で講義を進められたやうであつたが、漢作文の時間には、出席學生が支那文學專攻の學生に限られて居つたので非常に寡く、加ふるに學生も餘り熱心に漢作文の添削を請はないので、勢ひ先生も乘氣になられず、文章の話をしたり日本の中古文の模範漢譯を試みたりなどして、學生が漢作文の實力を涵養するやうに種々鞭撻して居られた。

先生は當時尙ほ大阪に住んで居られ、毎金曜日には、汽車か電車で通つて居られた。だから大正六年吹田の水害の時には、隨分永らく缺講があつたやうに記憶する。大抵は和服で、黒の紬の紋付、ゴム裏空氣草履といふ姿で、洋服のことはすくなかつた。頸から細い紐を下げて、眼鏡サックを懷にし、腰には矢立を差し込み、書きものをする時には、必ず矢立の筆を取り出し悠々と墨池に筆尖を浸して書かれ、決して萬年筆や

鉛筆を用ひらるるを見なかつた。此の光景がカントや、セークスピヤを講義するのと同じ教室で、演せられたのであるから、私達學生は、先生に對して始めは非常に異樣な感を抱いた。文科大學といふ處は、大体に於て保守的な空氣に滿ちて居る處であるが、先生を見ると、その保守派の餘程頑固な部類に屬するのであらうと想像を逞くした。始終此の矢立計りは氣になつた。史學科の喜田先生は、年中白足袋を穿いて居られる。此の白足袋が喜田先生を特長付け、學生には異樣な聯想を惹起せしめしが如く、西村先生の矢立は、學生が寄れば噂の種であつた。講義は上手であつた。言葉が明晰であつて、順序よく進められたので、筆記も容易で、時々趣味ある挿話をも入れられ、好評判であつた。殊にボールドに書かれた字は、甚だ奇麗で、講義が終てから之を消し拭ふに忍びざるやうな立派な文字があつた。聞けば當時先生は、朝日新聞の方は既に閑職に就かれ、出社せらるることすら珍らしく、毎日門を閉ぢて讀書に沒頭して居られたので、一週に一日大學に講義出校せらるるのは、唯一の樂しみであつたので、講義の草稿にも非常に骨を折られたといふことである。此れ程熱心であつたには拘らず、學生が寡つたことは、先生をして餘程淋しい感を與へたらしく、私が始めて聽講に出掛けた時などは、直ぐ姓名、鄕貫、學歷を尋ねられ、その大阪に生れ、大阪の中學を卒へたことを答へると、大阪に歸鄕した時は、松ヶ枝町の宅に遊びに來いと申された。爾來大阪に歸る度びに數回松ヶ枝町に訪れたこともあり、種々御敎訓にも接したが、その中に先生も東京に轉せられ、私も亦北京に來て終つた。學生時代は、唯ウカ〳〵として暮し、先生の學殖が、如何に深かりしかも知らず、自然充分の御指導をも仰うぐことすらなく、過ごして終つたが、今はこうして漢字新聞に筆を執つて居るのであるから、もつと先生に今後も敎を受けねばならぬ所はたくさんある。學者としての先生の長所も、新聞記者としての長所も、充分私には判らないうちに、沒せられたことは、返へす返へすも殘念である。此に就いて、憶ひ起さるるは、現に渡英中の內藤湖南先生の御愁傷は如何ばかりであらう。

（十一月十三日於北京化石橋畔）

人格者西村先生

鮫島宗也

今回懷德堂堂友會に於て西村碩園先生の追悼號を發刊せらるゝに當り松山會長から私にも何か書く樣にとのことであつた、然し私如きものが鄕里の大先輩たる西村先生の德業に就て書くのは烏滸がましいことであるから辭退したいと思つたがそれも何となく故人に對して濟まぬ樣の氣もするので私が先生に就て知る所を少し許り書かせて戴くことにした。

碩園先生は私と同鄕とは言ふものゝ先生は吾々の幼年時代志を立てゝ鄕里を出でられたので私共も鄕里に在る間は先生のことは只人の噂に聽く許りであつた。私が先生に大阪で始めてお目に掛つたのは確か明治三十一年頃で私が十八歲の時であつたと思ふ。その頃一度先生に連れられて大阪朝日新聞社の裏手の或る料亭で御馳走になつたことがある。當時一貧乏書生の私に取つてはかう言ふ機會は滅多になかつたので好機逸すべからずと勸めらるゝ儘に盛にばくついたことを覺えてゐる。當時已に勢力隆々たりし大阪朝日新聞の重要の地位を占められた先生は私共に對しても少しも威張ることがなく全く友達の樣に待遇せられた。その時の先生の親しみのある態度は今にも忘るゝことの出來ない印象として殘つてゐる。その後私は外務省に入つて外國に行き十四、五年間先生に面會することが出來なかつた。大正三年五月私は外務省を辭して三井物產に入り大阪支店詰となつた頃から屢々先生に面會する機會を獲たが先生は確か一度大阪朝日の世界一周團に加つて歐米諸國を廻遊せられた許りであるにも拘らず、歐米の事情には驚く程精通して居られた。勿論朝日新聞の編輯を主宰せられてゐた關係上世界の大勢に通曉して居られたのは何等異とするには足らざることであるかも知れないが先生の如く漢學を專攻せられた人の中には東洋のことには通じて居ても歐米の事情等には理解を持たぬ人が多いのであるが、我が西村先生はそうでなかつた。歐米の事に就てもよく調査しよく知つて居ら

れ私の述ぶる意見に對しても大に共鳴せられたのであつた。先生の親孝行は有名なものであるが私が訪問して用談が濟むや否や先生は何時も必ず母堂を客間に招じて私が母堂と郷里の噂などをするのを始終ニコ〳〵顏で聽いて居られ母堂が故郷の話しに興がられるのを見てサモ嬉しそうにして居られるのが普通であつた。斯程に大事にし孝行をして居られた母堂を後に殘して永眠せられた先生の胸中を察するとき實に悲痛の感に打たれるのである。

先生の義理堅く他人との約束を堅く守られたことも有名であるが、私もそれに就て實例を擧げることにする。私が大正三年五月に大阪に來た時豫て友人が私に送り呉れし一幅の達磨の軸に讃を書いて貰いたいと先生に願つて置いた處、中々急に出來そうにないから私も別に催促もせずして打過ぎてゐた。然るに翌四年三月に私は急に露都の三井出張所詰となつて露國に行くことゝなつた、無論先生方へもお暇乞に行つたが生憎先生は不在であつたので面會出來ずその儘出發することゝなつた。處が出發の夜梅田驛で滊車が將に動き出さんとする間際に『トンビ』を着た大の男が群集を掻き分けて息せき切て私の乘つてゐる列車の窓口に近づいて來て大聲に『宗也君〳〵ヤツト出來たよ』と言つて新聞紙に包んだ軸の樣なものを差出されるのを見れば、それは先生が一年前に賴んで置いた軸に約束通り讃を書いて持つて來られたのであつた。私は先生の義理固きに驚き厚く感謝したのであつた。その軸には達磨の像の上に『一葦平安』と先生が讃を入れられてある。その軸はその儘私が露國に持ち行き彼方で私の下宿の居間の壁に掛けてその魁偉なる達磨の眼光の鋭きに露人を驚かしたのであつた。私は今尙その軸を先生の好記念且つ又家寶として大事にしてゐるのである。

先生は又道の人であつた。少なくとも先生の後半は道德と言ふ點に餘程重きを置かれ、道の研究に一身を委ねて居られた樣である。懷德堂記念會の創立に寢食を忘れて奔走せられ、懷德堂の事業を以て自己後半生の事業と考へて居られた樣である。私は先生が昨年十一月四日懷德堂堂友會創立總會席上に於て試みられた講演を讀んで如何に先生が晩年道の研究及道の實踐に重きを措かれて居られたかを窺知することが出來ると思ふ

先生は言つて居られる『道を以て集る友は終身一生は偖置き幽明を隔てても變らぬものである。それで私は何時も考へる。何事をするにも出發點が正しければ精神上の苦痛はない。失敗しても自分の心を慰める事が出來る。出發點に己れを欺かないと云ふことが必要である、出發點に何か自分に面白からぬことがあると途中で精神上の苦痛がある。』云々。私も先生と同じく常にかう云ふ事を言ひ且つ實行せんと努めてゐる。『人は常に良心に恥ぢざる行爲をなすべきである。俯仰天地に愧ぢざる行爲をしてさへ居れば人間の精神は安靜である。假令思ふ通りに行かぬ事があつても自分が誠心誠意良心の命ずる所に從つてその事の爲めに努力したものであれば夫で諦めねばならぬ。若し又萬一良心に反した行爲があつた場合には潔よく自己の良心に向つて懺悔せねばならぬ、そして決して過を再びせざることを誓ひ且つ實行せねばならぬと、これが私の平素奉ずる信條であつて『西村先生の出發點が正しければ精神上の苦痛がない』と言はれたのと同一である。私は先生から道德の問題に就て充分敎を乞ふ事が出來なかつたことを今更ながら殘念に思ふ。要するに西村先生は親に孝にして信義に厚く而して道を奉ずるに固き當代稀に見る人格者であつたと思ふ。天かゝる人に長壽を與へなかつたことは返す〳〵も遺憾の極である。

「三十年の家」と別れられし翁

緒方竹虎

私が翁から直接敎を受けたのは大阪朝日で例の筆禍事件のあつた後一年半ばかりの間で、當時の翁は實際

全社の重きを荷つて居られたが、同時に翁としてはあの頃が一生中最も苦勞の多かつた時代ではなかつたらうかと、私は今でも當時の事を思出しては暗然となる。翁は事件の起る前までは總務局員として傍ら京大で講義をせられ、直接編輯には干與せられず、謂はゞ元老といふ形であつた。それが筆禍事件でいや應なしに第一線を指揮せられることになつたのである。翁はよく自分は過渡期の人間だ、今の新聞には全く不適任だと述懷せられたがまた、朝日新聞は三十年自分の住むだ家である、この家は何物を賭しても盛立てねばならぬと口癖のやうに云はれた。隨つて一旦外部に對すると内の苦勞はすべて胸にたゝんで全身を世間の毀譽に暴露され、如何なる批評に對しても少しも辯解がましいことをせられなかつた。

忘れもせぬその年の十二月一日、事件に對する世の疑を解くべく社の態度を宣明した長論文を翁が書かれた一文の趣旨は孟子公孫丑上の『行うて得ざるものあれば反つて諸を己れに求む』といふにあつた。丁度その翌日は翁が京大で講義をせられる日で、京都から歸られると翁はその足で社に寄られ、今日は皆（京大の教授達）からいろんなことを聞かされたなど話された。私の想像では可なり色々の批評が出たのだらうと思はれた。しかも翁は態と晴々しい顏で笑つて見せられた。當時の社にはこの翁の笑ひ顏が何よりも必要だつたのである。私はその笑顏と翁の心中とを考へ合せて實に無量の感に打たれた。其後翁は社を引かれ、次いで宮内省御用掛を仰付かつて御家族も共に上京せられ、その爲社の客員社友などいふ待遇を辭退せられたが、三十年渝らぬ翁の心は片時も朝日新聞を離れず、その後も序があるとよくあの悠揚たる風姿を東朝社の編輯局に現はされた。そして昔知つた顏を見付出してはさも懷しそうに語つて居られた。宮内省御用掛となられ、側近の文事に任ぜられたことは學者として勿論身に餘る光榮に違ひないが、『三十年の家』と別れられた翁の心の片隅には何處にか淋しいところがありはしなかつたらうかと、私は今も時々想像する。思想と云つては大袈裟だが翁と私とは物事の考へ方見方が恐らく可なり違つてゐたらうにと思ふ。それでゐて翁とは一室の中に對座してゐて少しも窮屈を感じなかつた。それは全く翁の人德の然らしむる所に相違ない。後輩の又後輩

とでもいふやうな私は小供の教はるやうな事までも翁の叱正を受けたが、しかも翁には何でも無遠慮に云へるやうな氣がした、これは私ばかりでない、恐らく誰でもが翁に對して感じたことであつたらうと思ふ。翁の孝心については私が蛇足を加へるまでもあるまい。これは今北京に居る大西齊君から聞いた話であるが、大西君が初めて翁を天滿松ケ枝町の宅に訪問した時、丁度母堂の誕生日か何かで、翁は家族近親と盃を擧げて居られた。母堂は非常な御機嫌でやがて興に乘じて昔を偲ぶ舞ひの一さし舞出された。すると謹嚴なる翁は直ちに團扇をとつて三味に代へ口三味線をひいて母堂の歡をそへられる、その有樣が如何にも自然に出て、云ふに云はれぬ床しさだつたと、よく大西君は語つた。かういふ團欒の和氣が何時も翁の家には充ち滿ちてゐた。そして何時も母堂がその中心であつたのに、その母堂に先立たれた翁の心中は果して何うであつたらうか、推察するさへ涙の種である。

追悼天囚先生

在大連　平山竹齋

碩園主人西村天囚先生、於大正十三年七月二十九日、病歿于東京、嗚呼哀哉、先生生于小蓬萊、（先生故里大隅種子島有小蓬萊之稱）幼從鄉儒前田豐山先生、受句讀、年甫十六、負笈游于東都、師事重野成齋先生、更入大學、研修古典科、學業大進、年少負氣、有不可一世之概、未畢業而出大學、嗷嘯自遣、偶著屑屋之籠、不過藉充糊口之資、非苦心經營之作、此著一出、膾炙人口、紙貴洛陽、文名噪於一世、未幾、受大

阪朝日新聞社之聘、從事操觚、先生年甫若冠、慈母在堂、歲時回籍、承歡膝下、或江濱垂綸、或郊外射獵、或論文評詩、與父老子弟、共同其樂、後年奉母至大阪、侍養無所不至、先生以文章報國爲念、而天性至孝、明治三十三年、先生重游清國、臨行賦詩、有句云、文章報國狂奴志、涕淚辭親游子情、實寫眞情也、先生游於滬寧之間、訪古探勝、錦囊詩滿、交游名流、談論時事、當時予亦從游、經二年、先生東歸、予送先生於黃浦之濱、越二年、予亦回國、明治四十四年、予赴大連、繞道大阪、訪先生之寓、先生留予、與放浪衣洲諸人、詩酒爲懽、不意不數年間、放浪衣洲相繼殂謝、大正七年、予因事回國、又至大阪、留於先生之寓、旬日而別、從此而後、先生奉徵入宮內省、移居東京、予在大連、側身報界、再會無緣、遂成千古之別、哀哉、先生重道德尊名敎、其學問文章昭昭在人耳目、莫庸贅述、予之與先生、情如手足、（先生爲予之表兄）誼則師弟、予因報務叢忙、難於分身、先生之病也、不能慰問、先生之歿也、不能執紼、遺憾无窮、嗚呼先生、初志未滿、功業未竟、而與世長辭、深爲斯文惜之、回憶往事、轉增傷悲、記以表追悼之忱、

碩園博士と圖書館

今井貫一

私と碩園博士の初對面は明治三十六年の春、私が圖書館に奉職して大阪に來た時である。その時博士は、圖書館は自分が年來唱道せる大阪の三種の文化事業の一であり、それが愈近く開設せらるゝことになつたのは、實に宿望を達したもので愉快であると話された。博士の望まれたる三種の文化事業の他の二つは何であ

つたか忘れたが、圖書館が其隨一であつたやうに云はれたのを確かに記憶して居る。その翌年の四月、圖書館が公開してから二月目に、偶朝日新聞社で物故社員の祭典が行はれ、其記念として古今圖書集成群書類從其他內外の圖書二千四百冊餘を同社から圖書館に寄附せられた。之が創設當時の圖書館の書庫を强大ならしめたことは申迄もない。次で明治四十四年三月に再び同社から朝日新聞壹萬號記念として獨逸書二百六十冊餘の寄贈があつた。この二回の大寄贈は勿論社長の厚意に依ることであるが、博士が圖書館愛顧の溫情また社議に與つて力あつたことゝ當時密かに推察したのである。それから明治四十一年に博士は龜門二廣の業績を研究せられ、之を新聞にも連載せられたが、其時旭莊の日間瑣事備忘百六十七冊を日田の廣瀨家から借受けて精讀參考に資せられ、さて其用終つて之を返却せらるゝに當り、旭莊は大阪遊寓が最も長く、從て此日記が當時の大阪學界の消息を探尋すべき資料に富めるを以て、空しく之を豐後に送り返すのは慊らぬことゝ考へられ、或日の朝圖書館に見わて、突然其複寫方に就て私に相談があつた。然し圖書館には其費用か不充分で困つたが、一たび思立たれた博士は直に其足で鈴木馬左也氏と村山龍平氏を訪問し、即刻兩氏の配慮によつて相當の援助を得られ、之に少額を圖書館から加へて資金が出來た。かくして圖書館に珍藏する同書は成就したのである。また大正二年に博士が支那の戲曲傳奇を研究せられ南曲琵琶記などを選述せられたとき、參考に資すべき十數部の書籍が何れも高價のもので、博士の財囊を以てしては及びがたく、之を嘆かれたのを、八田兵次郎氏が聞かれ、進て之を購求して博士に贈呈せんことを申出られた。その時博士はその厚意を謝すると共に、自分は之を繙讀することを得れば足る、其上に尙ほ書籍までも私有するは屑しとしない、宜しく之を圖書館に置き、自分も使用し又同好の士にも隨意に閲覽せしめたいと云はれ、八田氏に勸めて遂に三百十九冊の貴重なる詞曲傳奇類を寄贈せしめられた。

私は碩園博士に交を辱ふすること二十年餘、この間公私大小の事に當り、博士の人格の發露に感激したことは甚多く、今追懷記の筆をとると、彼此のことが交々腦裏に浮んで來て一寸簡單に書き盡しがたい。依て

私が初對面の時の記憶から考へ付て、特に博士が圖書館に寄與せられたるものゝ一端のみを撰びて茲に記し併せて此機會に於て私は圖書館長として博士に深厚なる謝意を表するのである。

西村先生を追想す

千葉高等園藝學校　西　村　時　直

私は西村家の總本家として又同郷の先輩として尊敬し、陰に陽に御人格の感化を受けて居りましたが、特に故先生から特別の御恩顧を受け始めましたのは最近十數年前からであります。

先生の幼時の舊師前田豐山先生が御老後兩眼を失明せられ、加ふるに嗣子が或る事業に失敗して當時鹿兒島の女學校に在學して居る長孫女も退學しなければならなくなりました。先生は大阪に在りて此報を聞かれるや直ちに歸郷し自邸へも立寄らず舊師の隱宅を訪はれ、失明不自由な當時八十四歳の老恩師豐山先生の居間を寸時も去らず、一週間餘も起居を共にせられ、心痛せらるる老師を慰め尿屎の世話賤役の勞をも厭はれざりしは子女の注意も及ばぬ程でありました。前田一族の感謝は勿論、現今道德の衰頽せむとする時郷土の人士は深く感激し活きた教訓として永久に其德を慕つて居ります。當時豐山先生には六孫女あれども男孫なければ長孫女琴子の將來を憂ひ「婉娩貞淑」の四字を盲書して琴子の教養を託されたのを先生は快く進んで引受けられ梅田高等女學校へ轉學せしめる等舊師をして全く後顧の憂無からしめられました。豐山先生は深く先生の厚意に滿足し感謝して其年（大正二年）の秋永眠されました。それ以來遺族の事に御心掛け下さつ

た事は到底私の筆に謝辭を盡すことは出來ません。大正五年琴子は學校卒業の夏先生の養女として私と結婚致しました。申迄もなく結婚の總ての調度品其他一切は先生御夫婦の希望に依り心盡の總てを受けました。而して永久に感謝して居ります。先生が舊師へ厚かりし御高德の一端を追慕し敎訓として居ります。大正十一年春私が熊本縣農學校から只今の千葉高等園藝學校に轉任することとなりましたのを先生は自分の事の樣に喜んで下さいまして東京驛着の際の如きは態々御夫婦で御出迎へ下され其上手荷物まで自ら御手傳して戴き恐縮しました。今でも忘れられませんが東京驛から五反田までの省線電車（先生は常に私共に身分相應にして虛榮心などもたぬやう戒められました）の車中袂の中から用意された一個の林檎と小刀を出して皮を剝き私の子供に與へ其喜ぶ笑顏を見入つて溫顏に無限の情愛を含んで居られました。私共夫婦は涙含ましく感じました。先生は子供好きであり愛孫時紹君の敎養を樂しんで居られた事は人の知る所でありますが、子供の親しむ老爺さんとして又子供の保育に如何に細心の注意を拂はれしかは初對面の私の子供に林檎一つを用意して居られた一事を以ても故人を偲ぶに足る事と思ひます。

大正十三年五月十一日……先生が發病せられ再び起つ能はざるに至られた日であり又私に取りては痛ましき日となりました。母に事へて至孝なる先生は母堂が姪の子である琴子の家庭を見たく又高等園藝學校農場の作物を見て遠く過ぎ去りし若き日を追懷す可く一度は必ず行かんと樂しみにして居られました。五月十一日日曜日は內外多事殊に發病の前兆にや氣乘りして居られなかつたのに何事にも母の意を迎えらるる先生は校庭の牡丹の花が滿開して東都の觀客盛況を極むとの私の通信に依り老體の旅行としては今が好時季なりとなし家族全部で御伴して私の所に見ゐる事になつて居ました。十日夜は母堂の旅行に就き細心の準備をなし寢に就かれましたが十一日拂曉から發熱されました。折角母の慰安の爲めに行く旅行を自分の病氣の故に中止してはと病を押して千葉行を決行されようとせられましたのを家族總懸りで引止め中止して病床に就かれたのが遂に再び起つことの出來ない悲しき病みつきの日となつたのであります。今になつて考へますと此事

が最後の慰安孝養の企てであり又最後の思ひ出となりました。數日を經て病床を見舞つた時『時直か殘念した、病癒ねて母の御伴をして千葉に行く機會があるだろうかね』これが面會謝絶當日の最後の言葉であり俗事を語る最後でありました。

私は私の受けた數多き日常の感謝と敎訓の中から舊師への報恩、個人として受けた感謝と孝養の活敎訓を叙述したに過ぎませんが、私の受けた故人の印象、幾多の敎訓は將來永久に事毎に私の前途の羅針盤となり前途を照らす燭光となるを信じます。故人の肉體は亡びても靈は永久に生きてゐます。今更乍ら生前の恩惠を追想せずには居られません。

千枚漬を買上げられた話

大阪朝日新聞社　坂本靜一

天囚氏がどうだこうだと、概念的に云ふことは私には出來ない。よし、それが私の知つてゐる狹い範圍で出來ることだとしても厭である。それこそ群盲撫象の譏りを免れまい。そんな譏りは意にとめぬとしても、それは私の氣持が許さない。どんな長上に對しても、容易く友達の話でもするやうに、無雜作に客觀的な批評をする所謂『記者氣質』を多分に持つてゐる、ズボラな禮を欠いだ私ではあるが、天囚氏に對しては、氏から恩顧を受けた故ばかりでなくて、どうも憚かられる。私のやうな粗笨な者に『氣持が許さぬ』といふ氣持を起させる位置（位置といつても朝日新聞の編輯局長などの位置ではない）に氏がおられた――それがも

はや、ゐなくなられた私には、天下の碩學を失ふといつたやうな性質の悲しみと、まるで違つた悲しみがある。恰度それと同じく、氏の偉大さといふのも、私の氣持に蔽ひかぶさつてゐる。極めて個人的な『感銘』だから、筆紙には盡しがたいものばかりである。で、私が初めて天囚氏にお目にかゝつた、つまり私の求職話に、身の恥を曝すことにした。この話が、氏を知らぬ人達に氏の片鱗を窺はしめることに役立つやうなれば、私としては非常な喜びである。

大正八年一月も押し詰つた頃、故あつて九州は佐賀の生家を飛び出した。否でも應でも何か仕事を探さねばならぬ。まづ京都に着く京都は學校にゐたので馴染の土地である。嘗てさんざん手古摺らしたことのある下宿のお主婦に泣きを入れて落着き、その足で、文學部の事務室へ行つて、伊津野さんに頼み込んだ學校の先生は迚も出來ない、まづ新聞記者だと止めを刺されて『西村さんに逢へばよかろ』といはれる。その頃天囚氏は朝日新聞の編輯を主宰される傍ら、一週に一回か、京大支那文科の講義をしてゐられたのである。『早速逢ふことにしやう』で、大阪のお住居を聞いて歸らうとすると『ちよつと待てよ』だ考へてみると『このちよつと待て』が話の緒言となつた譯である。

物には順序がある。君みたいに『ぢや行つてみる』では不可ない。世間といふものは……と伊津野さんが懇々と注意して呉れた。書生は書生らしく、それに相應した物でも携ゐて、慇懃に禮を厚ふして身の振方を頼まねばならぬ。『先生ひとつお頼みします』で、ペコンと頭を下げるやうな、どうも君はさうしたオッチョコチョイな傾向があるから、特に注意する譯だが、と、何時の間に人を見てゐたか解らないが、痛いところを抑へて置いて、伊津野さんが熱心に氣をつけて呉れた。書生らしい品物とはどんなものだと評定の末、伊津野さんは京名物の「千枚漬」がいゝだろうといふ。

聖護院に千枚漬屋がある。そこで金二圓を投じたら、十文字に荒縄でからげた千枚漬の樽をくれた。それをそのままブラ下げて、久留米絣の袷に羽織なしで、穿いた袴は友達のまつくろな擊劍袴だから、寒い朝の

ことなり、躰のなかは職を求める者に通有な、妙に心細いうら悲しさが一杯で、それこそ文字通りに冷ゑ渡つてゐたが、外見には時代錯誤な颯爽たるものがあつたでもあろう。その荒縄の樽をひつさげて京阪電車で大阪へ出かけた。二月の二日か三日の朝であつた。

松ケ枝町のお宅を訪ねた。幸ひに天囚氏は御在宅、女中さんに件の樽を渡して（そんなものを通された座敷までブラ下げて行くんぢやない。取次の人に渡して置くものだ、これも伊津野さんの注意にあつた）通されたのは氏の書齋である古い漢籍が隙間なく取り圍んだ、その南側の庭先の明りを浴びて小さな机がある。机の上には、まだ一度もお目に懸つたことのない、むづかしい字の古い書物が擴げられてある。側の朱硯が半ば乾いて、小さな毛筆が忘れられたやうに轉がつてゐたと記憶する。向つて机の左に手焙りがあつて、鐵瓶に湯が沸つてゐる。

九時ちかくでもあつたろう。急にポカ〳〵と暖かく待つてゐると、鈍い太い足音がして天囚氏が這入つてこられた。素破らしい大きな肩幅が、のしかゝるやうに、その手焙りの上を占領して、恰度私の眞正面に位して、小粒な烱々たる犀の眼のやうなが、私の眉間のあたりに、瞬間ピカッと光つた氣がした。何とはなしに劍道の先生とむかい合つた氣がする。で、そこで私は名前や素性や、今までの學歴といつたものを正直に一とほり述べて『どうぞ御採用をお願ひします』といつて頭を下げた。それですつかり云ふことがなくなつて仕舞つて、頭を下げた儘畏まつてゐた。

その間に氏は手づから汲んで、私に茶をすゝめられ、机の方へ向いて書物に、紙撚のやうなのを挾んでそれを丁寧に元へなほしながら、やつと口を切られた。

『新聞記者といふものは、君がいま考へてゐるやうに容易いものではない。殊に九州人にはむかない仕事かも知れない。』

微笑を漾はしながらさう云つて、その次に、

『君は何を最も得意とする。』
『何にも得意なものはありません』
と、初めて顔をあげると、急に輕く笑はれながら
『では何でも得意になり得るだろう』
さう云はれてみると、俄に窮屈な場面碎けて、普段はそこで笑ひさうな際であつたが、今思つても恥かしい、一生懸命に生眞面目に『人がやることなら何でもやれる自信がある』とか、何とか、そんな意味のことを云つて、もじもじしてゐると、
『あゝ、さうですか』
と默つて仕舞はれた。
思ひが叶ふか、叶はぬか、人物試驗の五分間である。所在なくて手のやり場に困つてゐる癖に、心もちはねる返つたやうに緊張して、さてどうだろう、パスしたものかな、不可ないかな、と、ボーッと何かゞ頭へ浮きあがりさうな氣を、下腹へ力を入れて、氏が早く何とか云つて下さるのを待ちあぐむだのは、決して氣持のいゝものではなかつた。
と、そこへ、音もなく隔ての唐紙が開いて、例の女中さんが、千枚漬の樽を荒繩のまゝ盆の上に捧げて、行儀よく天四氏の前まで辷つてきて、氏と私との中程にそれを置いて、
『お客樣がお持ちになりました』
と、愼ましく云つて引退つた。私はすこし顔がほてるのを感じながら、稍テレた氣味で、その無恰好な樽を見るともなく見てゐた。すると、今まで默り込んでゐられた氏が、謹嚴そのものの態度で、容赦なく私の顔を鋭く見詰めて、
『これは何です』

『ね』

面喰つて『いね何でもありません、ほんの……』といふ氣持でゐると、さうした氣持も何もかもヘシ飛んでしまふやうな、私から謂へば、その場の調子にまるで似つかはしくない、いきなりズバリと不意を斬られたやうな、名狀すべからざる布置に、ガラリと、そこいらが一變してしまつた（あゝ不可ないな）と心細い豫感で、グラグラと眩いがしさうな時、

『かういふものは直に持つて歸つて貰ひたい。君を新聞社に入れることは、何もわたしひとりで決め得られることではない。わたしにこんなものを貰ふ筋合もなければ、君が差出さねばならぬ義理もなかろう。これから世の中へ出るといふ際に、間違つた考へをしてゐては、先が案じられる。折角寒いのに遠いところを提げて來ただろうが、すぐ持つて歸つたがいゝ。もし萬一、君が新聞社に這入れたところで、それは君にさうした機運が臨んだのであつて、君は感謝の念さへ失はずにゐたら、それで足りる。

餘裕のある聲で、矢繼早に云はれてみると、この筋道のたつた訓戒が、私には一言なく、そこでお詫して引退れさうだつたのが、どうしても入れて貰はうが一心で、『もし萬一這入れたとしても』の『萬一』が、胸先へドシンと響いて、（しまつた、落第だ、千枚漬が出たばかりに……）と恨めしく、件の樽を見返したが、それつきり默つてゐるのもおかしいと思つてゐる間に、ツイたわいもなく、口が先になつて、

『だから私はたゞお願ひにあがろうとしたのを、伊津野さんが、どうも、それでは餘り失禮だといふのでその……』

と漸く立直つて、

『こんど學校で伊津野さんにお聞き下さい。私は何もヘンなつもりで持つて來たんでは……』

『そんな餘計なことは言はぬがいゝ。ともかくすぐ歸りたまへ。追て君のことは社から改めて何とか通知する』と押へられて（いよいよ不可ない、入社の見込更になしだ）と思ふと、その時、鰓こ張つた胸のあた

りが、いくらか『ゆつたり』とした氣になつたのが、不思議であるが、（折角さげて來たものを、何だかおかしなことになつて仕舞つて、みすみす亦ブラ提げて歸れるものか、よし……）と咄嗟に思案を決めると、わりに度胸が出てきたとみゆる。

『お暇します。こんなものを亦さげて歸るのは厭ですから、御門の外に放つときます』

『そんな無茶をしてはならぬ』

樽を無造作に掴みあげて、立ちあがつた私の背後から、片膝たてゝ、おなじく立たうとされながら、

『も一度お座り』

で私が澁々座ると、いきなり、

『君、それは幾何だして買つてきた』

それを聞かれるのはあまり非道い。一体持參した本人を捉ゑて、贈物の値段を聞くなどは非道すぎる。そんな法があつて堪るものか——

『値段をお聞きになるとは、私の腦に落ちかねます。そんな篦棒な……』

すつかり意氣込んで、それにどうせ見込がないとすれば何もびくびくするには當らないといふ氣が手傳つて、勇敢に、私は氏に楯づいた。

氏は懷手しながら、ニヤニヤと笑ひを含んで、

『さう怒るな。君がさげて歸るが厭だといふから、成程、寒いのに遠いところをさげて歸るのも氣の毒だから、わたしがそれを買はうと思つたまでだ。それで値段を聞いたのだ』

まるで好々爺らしく穩かに（何も無理に聞くわけではないといつたやうな）、和やかささへ見せられたが、私は腹の中へ鐵の棒でも呑み込んだごとく、堅くなつて無暗に腹が立つた。

『私はさげて歸るのは厭です。只でお賣りします。値段は申し上げられませぬ』

『只で賣つては商賣にならぬ。よし、ぢや宜加減な相場で買はう』

獨りのみ込んで、氏は手文庫からとりだしたものを、紙に小さく折り疊むで、机の上の筆を嘗めて『西村時彦』と走り書きしたものを、私の前に無理に推しやられた。どつちにしたつて、もうお暇をせねばならぬのに、そんなことで愚圖〳〵してみても詰らない、聊かバツは惡かつたが『では仕方がありません、戴きます』で、例の堅くなつたまゝ、サツサと門を出た。氏が、それでもにこやかに笑つて玄關に見送られるのを、後ろに感じながら。

がつかり氣が抜けて歸つた京都の下宿には、既に吉左右をまつ友達の二三が集まつてゐた。駄目だつたことを話しながら、懷中した紙を明けてみると、中から綺麗な拾圓紙幣が出てきた。『奢れ』『奢れよ』で、皆と肉をつゝきながら、それでも二圓の千枚漬を拾圓に賣つた――といふのが、何となく寂しかつた。それから約一月目に入社を許されて以來、亡くなられるまで殆ど六年ちかく、無沙汰がちの私を、不意によばれてみたり、又は手紙や葉書を戴いたり、慈愛に滿ちたお叱りを受けた。それらは、すべてが言ひ現はせぬ『感銘』として殘つてゐる。

で、いまの話のつゞきだが、どうせ入社の見込はないと諦めながらも（それならそれで通知がきさうなものだ）と、痺れを切らして二月も過ぎ、待ちかねて三月の五日に朝日新聞社に天囚氏を訪ねてみた。

『あ、さうか、君には報せなかつたかね、ウン、さうか、ぢあ明日から出社したらよかろう』

おやッと躍りあがつて嬉しく、お辭儀してゐる間に、もう氏の姿は應接間の扉の外へ見えなくなつて、憎乎してゐるところへ、岡野さんが這入つてこられて、記者としての細かい注意を與へてもらつた、

天囚氏にはもうお目にかゝれない。さう思ふと、この『千枚漬を買上られた話』が、たゞ單なる話ではなくなつてきてゐるのに氣がつく。この話や、そのほかの『叱られたこと』などが、いま迄とは違つた、いろんな意味の示唆を投げてゐるのに氣がつく。

御發病前の二三事

東京　梅園良正

西村先生に逝かれて一大文豪を失つたといふことは、天下後世一般の歎きであるが、況して日常其の眷顧を受け、多少にても其指導に預つた吾々は、實に萬斛の涙を呑んで慨かずには居られない。併し向ふに立つ先生は如何に偉くても、肝腎な此方の心鏡が惡いから、一向に其要を得たる影は撮る事が出來ぬ。則ち先生の博學深遠を以てしても、聞く吾々が淺薄だから、所謂聞き對が無く、又言ひ對が無いので、誠に先生には相濟まぬ譯である。故を以て別段これといふ感想はないが、唯先生發病前に於ける二三の狀況を記して御斷りを申事にしよう。

先生易簀の後、其日乘を拜見したが、本年三月二十日の條に晴、早起、與木崎、梅園、林田、安富四君、再遊圓照寺と書かれてあるが、これが先生最後の郊外散策である。扨再遊とあるから其前遊を御紹介せねばならぬが、其れに就ては未定稿ではあるが、幸に先生の記文があるから、先づ其文を寫して御一覽を願ふ事にしよう。

其記曰

因疾服藥、行而宜導之、謂之行藥、見文選五臣注、近人出游城外、謂之運動、蓋無爲而行血、運動氣血、有益攝生、但日月不可徒費、遊必訪古、訪必有文、而後足以安步當事矣、予一日與有馬、林田、安富、那須諸子及童子三人、游武之加治村、林田君加治人、爲予東導、早天自池袋乘瀛車西北行、約二時至佛子驛下車、沿人間川而西行、過徒杠達加治村、有寺曰圓照寺、未詳何世創立、本尊阿彌陀佛、傳稱行基作、庭有清泉、々滙爲池、々畔多佳木焉、不果觀、寺後竹林中多古碑、石色皆青、高三四尺至五六尺、厚二寸許、

其形仿板碑、上刻一大梵字、下有銘文、按新編武藏風土記所載、

其一刻建長六年甲寅五月十六日孝子等敬白十六字—其二刻康元元年丙辰十一月廿三日比丘尼妙證造立之二十字—其三刻文永七年庚午正月十三日有志者爲丹治泰家丹治宗泰孝子丹治氏敬白三十字—其四刻橫呑十虛天遙地遠、堅亘三際、山深水寒、無影樹下風細々、琉璃殿上月團々、頑然獨露不磨勢、當與子孫萬古看、于時嘉元三年乙巳八月八日、孝子等敬白六十一字—其五刻乾坤無卓孤節地、只喜人空法旦空、珍重大元三尺劍、電光影裏折春風、元弘三年癸酉五月廿二日、道峯禪門四十三字—其六刻爲悲母淨三大姉所立虔營追善最上之惠業以新當來佛果之旨因者也、文和三年一月十五日孝子加治豐後守季貞敬白四十九字—其七刻應安元年戊申九月五日十字—其八刻長享三年己酉八月十六日修記禪門十五字

吉田氏地名辭書蓋據之、而元弘碑法旦空、旦作且、折春風、折作斬、嘉元碑、橫呑十方虛堅亘三際、其餘皆同、今掃苔而觀之、嘉元元弘二碑完存、元弘碑改字者是矣、嘉元碑十虛三際二句、風土記爲是、佛氏寫易周流下虛語省十方空爲十虛三際下無□留與子孫萬古看々（不明）誤折當者、吉田氏襲風土記之誤也、建長康元文永諸碑、漫漶不可辨、文和彷彿可辨、應安碑無年字、長享碑無所見、索得一斷片於林中、有三天己酉八月十七字、豈此歟、又有一大碑、僅存八九字、字大二寸許、正書遒美、用隸法（良正曰書風酷似石門銘——恐是本朝隸碑之祖）二書所不載、蓋近年出土云、此碑皆風土記（不明）書五六年前物而外集七十種及金石（不明）書皆不載二書亦據寺記而記載、故有誤字、今吾輩目覩手摩得以刊誤是亦學也、丹治氏本姓丹治比、其先元慶中、自紀東遷、爲武藏七黨之一、加治氏其支族、世居此地、因氏焉、未知子孫有無、而貞石不磨、使後人想見其盛時、不亦幸乎、林田君爲說寺中七奇、其一曰、池水濁則雨、是日不濁、衆皆踊躍、午餐于西久保氏、林田君母黨也、飯後西北行一里餘、登飯能山、山宜遐矚、適雨至、佛法已衰、池水無驗、乃走至飯能驛、乘汽車而歸、雨益甚、時大正十三年三月六日也、吾輩幸收訪古之益、而又得登山之樂、安步緩行、當事當樂、其可無文乎、因記、

以上

右にて大暑おわかりに成るであろうが、前回の一行には自分は加はつて居ない。先生は二回目であるが、木崎君と自分は初めてゞある。此日も矢張り未明に出發して池袋に集合し、汽車に乘る事は出來たが身動もならぬ有樣で、おまけに三味太鼓で囃し立られ、先生も殆んど閉口をされた。併し普通では見得られぬ事が多かつた。今日は王子の陸軍兵器廠とかの職工連が年に一度の花見遊山に出掛けた者と同車したのである。飛行機はうなるやら、連中は騷ぐやら、いや早天地鳴動、震災の再來かとも疑はれたが、其連中は下車したので、所澤驛からは大に靜かになつて腰をかくる事も出來た。間もなく佛子驛に着いて、一行は悠然訪古の歩を進めたが、今日は天氣快く晴れて、春光融々、實に好き散歩日和である。さて先生此日の扮裝はカーキー色の狩獵服に巨軀を包み、いかめしき赤靴を穿いてゲートルを堅め、マホー壜を帶んで握り太のステッキを左脇にかいこんだ樣子、威風堂々、行き交ふ人もおのづから道を避けて腰をかがめん計りである。時に午前十時、四五丁も歩いたかと思ふ頃、左方の山麓に一古刹がある。池袋にて一列車をくれたる安富君を待たるゝ氣分もあつて、先つ此寺を訪問せんと立寄つた。門前古松の下に板碑の孤立するを見るや、先生聲を揚て歡び、一同寄て視るに正に建長年間のものである。石段を上りて本堂の左方に至るや、新古墓石幾百となく並列せり。此處にも板碑數基あり。木崎君住職に請ふて直ちに手拓に取りかゝる。先生住職と相話す。林田君は獨り先行したが、余は此の間一人の童子を伴ふて上方の山林に入り、春蘭の花の有るのを引抜いた。今移し植ゑて家にある。安富君はまだ追つ付いて來ぬけれども、此處に時間を過す譯には行かず、當寺を辭して目的の方面に向つた。先生の文中にもある徒杠を渡つて圓照寺に着し、一同上衣を脫ぎて直に竹林に入る。用意は先着の林田君に依て整備したれど、凡ての器具を携帶せる安富君が遲いので氣を揉まれたが、程なく到着したので、先生も喜ぶ事限りなしであつた。或は紙を裁ち、或は碑を洗ひ、或は打方を始め、殆んど戰場の有樣である。時に先生余を呼んで曰く、ドウダ摹搨の響は遠く隣里に及ぶじやナイカと、余亦た欣然として應へた。全部終了、竹林より竹林に入りて間道を辿り、西久保氏に招せられて辨當を食つた。各自

交換を始めたが、先生は余が家風の海苔卷を攝つて曰く、ナカ〳〵甜いなあ、君が細君は上手じやなあと、恐縮千萬であるが、これが則ち先生運動の効果であろうと思ふた。西久保氏は鄕黨の舊家で、元より家の造り方も違つて居て、關西育ちの吾々には餘程珍敷思ふた。丁度寺の書院と普通の民家とを折衷した樣な一種古風のものである。間數も多いが、庭前も廣い。庭中の小丘に出でゝ一同記念の撮影を爲し、飯能行はやめて歸路に就いた。

これが先生最後の訪碑じやとは誰有て知る事が出來よう。次回は何處、次回は何處と色々御相談もあつて近き將來を樂まれて居たのである。それから今一つは

五月十一日の發病で、其の十日の事である。此日は自分も內大臣府に參つてゐたが、先生が見えたので挨拶に出た。先生は一室に一人で多く御用を勤めたのである。四邊寂としてゐるから好く愛想を言はれる。此時もひどく寒いじやないかと云はれた。自分の室と先生の室とは相連り、中庭を隔てて前方にも又室がある暫く經つて自分は筆硯に從事して居たが、先生は中庭に出て、日光を浴びつゝ御椽の外を頻りに東西に濶步せらるゝを見た、どうも顏色が蒼白である、戶を排いて出てゝ先生に問ふた。先生曰く寒くてたまらぬと、豫て自分は先生に聞た事がある。寒い時には紙を脊負ふが善いと、因て自分は紙を着る事を勸め、直に同僚に請ふて奉書を二枚貰ひ、先生の室に入るに隨ふてチョッキの下に着けてあげた。ウンこれで暖い食堂に行て何かあついものを飲まうと云はれた。平常斯樣な場合には先生はすぐ退出されるのであるが、此日は省內有志者の爲に演ずる論語の講義が四時以後に有つたのである。翌日は日曜であり、前日の樣子が氣に懸つたから、午前中に大崎へ行て百騷書屋に先生を尋ねたが、先生は既に病床に臥して居られた。嗚呼五月十日が先生最後の參內であつた。

次に自分が非常に殘念に思ふて居るのは、松方公の那須の別莊を先生の筆に寫さなかつた事である。實は去年震災の前に公爵と堅き御約束が有つて、十月頃には先生と共に那須に伺ふ事に成つて居た。自分は曩に

皇后宮の行啓の時、公爵に呼ばれて行つたが、先生は此時御用掛の御都合で行かれなかつた。今別にいふ必要は無いが、同別莊は赤松の林中にありて、實に雄大な氣風の見ゆる處である。これを先生の椽大の筆に寫し、これを先生の錦繡の詩に賦したら如何であつたかと殘念に思ふのである。

終りに臨んで特に御一讀を願ひたいのは去年の暮に詠せられた先生歳晩の詩である。自分は此詩を誦んで實に無限の感想に落ち入るのである。詩曰（全五首、今其一ヲ錄ス）

震壞閭閻火曼延、生靈當日籲旻天、一家十口幸無恙、願送災年迎吉年、

追憶談

山內愚僊

私は西村君の學問上の方面に就ては畑が違ふのでよくは知らないが、その內面的生涯に就ては古い時代から俱に困苦を嘗めて來たりして、かなり熟知してゐる。請によりてその長い過去の追憶を筆にせうとも思つたが、健康を害してゐるので、それすら意の如くにならない兎に角憶ひ起す儘に述べて見やう。

西村君の訃を聞いた時には餘り突然であつたので到底信ぜられなかつた。併し朝日新聞等には諸種の追舊談が連載され、又東京の未亡人からお報せがあつたので、或は天囚も歿つたのかと思ふと同時に、頭腦が變になつて悲さがこみあげて涙はとめどなく溢れて來た次第であつたが、今日猶天囚の死を思へば名狀し難い哀涙を禁じ得ない。

抑々私に愚僊といふ號を命けて呉れたのは實に天囚君であつた。今より四十年も前、東京市神樂町の下宿屋に居つた頃、天囚君を初め鈴木天眼子や私等が集つて、無聊の餘り蕎麥の奢り合ひで花骨牌を弄んだことがあつたが、私がこの方には至つて下手であつて、爲すことが皆世間離れをした遣り方だといふので、天囚兄が愚僊と謂ふべきだと言はれた。それが私に取つて馬鹿に氣に入りましたが、天囚兄も天眼子も此は好い名だと言つて賛成したので私が號とした譯なのである。

その後天囚兄も私も東京を出ることになつたが、丁度その三日前に神田駿河臺に下宿を移したことがあつた。その家の邊りは今全く記憶にないが、多分紅梅町邊りであつて、一時凌ぎに移つたのであつた。何しろ風呂錢にも事缺いだ場合であつた。二人は鳩首して『これぢや風呂へも入れないが如何したら宜からう』と思案した處が、天囚兄の曰く『オイ愚僊君は丁度尺八を吹くぢやないか。今日夕方から一つ戸外に出て吹いて廻つたら、風呂錢位出來やう』といふ。窮すれば通ずるといふ譬もある處から、相談一決して兩人が夕方になると下宿を出掛けて行つた。役割は私が尺八を吹き兄が錢を貰ふといふことにして、なるべく淋しい處を擇んで軒下に立つた。それは或る閑雅な黒門構への邸宅であつた。その邸の窓から思ひ懸けなく鶯の樣な聲で「尺八屋さん！』と呼んだので、兄が『オヽ、ソレ來た』と私を麾いた。見ると窓から夜目にも瞭然と纖手が兄に二十銀貨を渡してゐる。そして注文は越後獅子の曲であつたから吹奏しやうとしたが、さて吹く一段になつて乞食までしてもと云ふ念慮が閃めいて手が戰慄へて吹けない。そこで兄に『俺はこんなことは出來ない。やめる』と云ふと、兄は『左樣か』と言ふと窓口に引き返して先刻の銀貨を投げ返して『明日にして呉れ』と言ひ捨てゝ、二人は後も見ずに半町許り馳けて逃げた。そしてホッと一息すると、兄は『オイ愚僊、二人共未だ乞食は出來ないナァ』と言つたことがあつた。

その後三日經て、二人は愈々東京を立つことになつた。兄の紀行八種（明治三十二年刊行）に收載せる「雲の行方』と云ふ紀行文にはこの出立の狀を叙して

世の憂事をしのぶ摺、陸奥の旅より歸りてこのかた、都のたゞずまゐいとわびしく、夜も夢だに結びあへず、七夕祭もすみてやうやう夜寒になるほどより、四面楚歌の聲は一身に集りぬ、天道はいざ知らず、戰の罪に因りて垓下に陷りし我身、今は是迄なり。

あすよりは都の塵をよそにして雲のゆくゑに身をやまかせんとて旅の用意する折、兼ねて深く交れる山內愚仙も諸共にゆかばやと云ふ。愚仙は洋畫に巧にして我が著作の挿畫も其手に成れり。尤も寫景に妙を得たれば此は好き同伴なり、文畫の道は變れども何れも同じ筆の命毛、行方定めぬ同行二人、今日は必ず打立たんと、二人三人の朋友に別を告ぐるに、例の氣まぐれもの珍らしからずとて、袖引き止むるものもなければ中々に心安し。中に旅の用意は如何にとて風呂敷包引きほどきしものあり、韓蘇詩抄二冊と筆硯の外に一物なかりければ、ひたと呆れて物も言はず。兵法に言ずや糧に敵に因ると。山靈水伯の待ち給はんに、いざとて明治二十一年九月六日の夕間暮、上野より滊車に乘る。早や相圖の鈴打振れば車は名殘惜し氣もなく走り出でぬ。家弟時輔停車場の柵にもたれて見送りぬ。都も遂に住家ならねども、流石に忍ばるゝもの東臺墨陀の風月のみならず。

といつてゐる。

かくて宇都宮に着いて翌朝は兄と同縣人小野昌速氏を訪れた。私は同氏の老嚴山蓑翁の肖像を揮毫したりして、同氏の贐を得て旅費もやう〳〵調つたので、又も旅裝して十四日の朝まだきに出足した。大宮で高崎行の汽車に乘代へたが、丁度その車中の放吟だといつて兄は次の詩を示した。

翩々矣彼都人士、役々畢生爭青紫、唯知人間有膏粱、不知天下有山水、齷齪慚吾與之居、短筇野服拂袂起、山自高兮水自流、間雲野鶴去悠々、

私は貧惜しみも甚しいといつて哄笑した。

横川で汽車を捨てゝ信濃路に入つた。その日は輕井澤に泊して、翌日は望月といふ處に宿つた。望月から五

里程行くと和田峠といふにさしかかつた。會々足を痛めたので馬を雇つた所が大兵の天囚と私の軀幹とが均衡とれないで飛んだ目に遭つた。このことも『雲の行方』に

鞍の兩方に四角にして井桁の如く炬燵のやぐらの如きもの結付け、兩人各其一に乘る。其狀八犬傳の尺八力二に似たり。之を『こうじ』と云ふ。格子なるべし。弓手に明神山をながめ、依田川に沿ふて登る。村雨さと降來しかば茶屋に憩ひ、晴間に又も格子に乘りしに、何とかしけん鞍はする〳〵馬の横腹に垂れ兩人とも眞逆さまに落ちぬ。よき大將と引組みての此狀ならば兎も角、愚仙が上に落重りての見苦しさ、怪我なきこそせめてもの幸なれ、とて苦笑しつゝ又も乘る。此日は諏訪泊と思ひしかど馬士の肯はされば默止せしが、この過につけこみ、斯く客人に落馬させては馬士の役目すむまじ。其罰として諏訪までゆくべしと責むれば、馬士は年の頃十五六なるが泣んばかりに我身は繼子なるが、日頃些少の事にも目に角立てゝ打叩かれ、昨日も襦袢一枚にて追出されんとせしを、巡査さまのお世話にてやう〳〵わびて事すみぬ、今日も峠までとの言付なるを、諏訪までゆきて歸の遲くば勘當沙汰なり、許し給ひてよと云ひて打わびるに、思はずも袂をしぼり、たとひまゝしき中にても、親の云ふことは負かぬものぞ、去らばよし〳〵とて今更おどしすかせし事を悔いたり。日暮にし頃東餅屋に着き、木曾屋と云ふに宿りぬ。此處は和田峠の絶頂なれば、夜深くるままに襟元寒し。

と書いてある通りであつた。

下諏訪上諏訪、鹽尻等を經て十九日には木曾路に入つて奈良井といふ處へ來た。こゝで又『雲の行方』を引くと

奈良井に至りて坦途盡きたり。此より鳥井峠の山路なれば、彼の落馬にも懲りで、又も馬を雇はんとて越後屋といふに入りしに、主人は目ばやくも余が被れる笠の上に何やらん書きしを見て訝る面色なりしが、頓て走り出でゝ頻に一泊を勸む。急がぬ旅なれば遂に杖を留めぬ。

主人の名は藤兵衛とて、頗る好事の人と見ゐ、やがて予等の室に入來りて、種々の物語し、愚仙が畫を善くするを聞きて肖像を賴み、且つ予にも毫を揮へとて紙筆なんど取出でたり。性來書畫を好み、風流の士と見れば家に留めて揮毫を乞ふを樂と爲すなど物語る。誠に山中の奇人なり。家を薫風樓と號し、山に對し水に臨む。愚仙やがて樓上の矚目を寫す。其上に

溪邃秋來早、山高日出遲、把毫樓上坐、雲水是吾師、

と題しぬ。所藏の書畫を展覽す。中に明人某の書、筆氣遒勁、飛雲激浪に似て、いとめでたし。―中略―大雨曉に至る。

翌廿日風雨尤甚し。今日は舊曆八月十五日なり。客中の中秋無月は、なか〳〵に物思はで心安きに似たれども旅寢に晴間を待つも亦憂し。―中略―

此の日愚仙主人の肖像を寫す。低き鼻を其儘に寫生せしに、氣に入らぬ風情なり。因て再び寫生して鼻を稍高く寫せしに、扨もよく似たるかなと打喜べり。愚仙いつの間にか旅畫師の苦心を習ひ知りけん。愚仙愚ならず。

廿二日天の色は覺束なけれども雨は止みたるに、いざとて馬を雇ひ、例の格子に乘りて立出つ。主人藤兵衛驛端なる鎭守の森まで見送れり。

この越後屋の主人はその後、年に一度位大阪へ來たとて我々兩人を訪ねて吳れるのが常例であつた。その歿後はその息子が今猶父親同樣に每年鶏を贈つて吳れたり。來訪したりして吳れてゐる。この息子の容貌が親とは瓜二つで、現に宿屋を繼承してゐる。

福島では枕水樓に一週間も滯在した。丁度天囚兄の學友赤沼天心氏の姻戚に當る山中助藏氏が郡衙に勤められてゐたり、景色もよかつたり、宿屋も氣に入つたりして、かく淹留したわけであつた。併し九月の下旬で他處では未だ殘暑なるに、此處は早や霜を見る有樣で朝夕は肌寒かつた。二人は一重の着物にシャツ一枚

にて身震しつゝ、酒を借りて何ともなき裝をしてゐた。恰もよし或る人が親切にも丹前を一枚態々縫つて同地出立の餞別に呉れたことは、誠に地獄で佛とも云ふべきであつた。

この枕水樓に滯在中、兄は木曾の俚謠をものしてゐる。これも一部は『雲の行方』に出てゐる。それを引くと

木曾の勝は清國の三峽にも比すべく、古來公卿名士の題詠勝げて數ゆ可からず。予の淺才、豈拙作を以て此の靈境を汚す可けんや。但兒童の爲に鞠歌を作りて他日の憶想に供しつ。

一ツトヤ　人はつはもの木は檜木曾の名物見せたやな（下の句疊句以下皆同じ）

二　古き名所は棧橋やうすぎぬ引いたるあさ霞

三　宮の腰にひゞくなり德音禪寺の暮の鐘

四　與川の月の影すみて秋の景色のおもしろや

五　何處を吹くや風越の晴れし嵐の長閑なる

六　昔の夢を忍ぶなり寢覺の里の夜の雨

七　何にたとへん御岳に暮れて降り積む雪景色

八　山に木こるや小野の瀧切立つ岩に玉ぞ散る

九　駒が岳の白妙にあかねさしたる夕けしき

十　巴が淵はかはるとも木曾の人情は移ろはぬ

更に雜詩十首あり。其四に曰く

古寺樓臺半夕暉、鐘聲隱々落溪扉、淡烟輕鎖秋風路、獨木橋頭拾栗歸、

翁媼相對語言奇、風俗看他太古遺、嘉客新來供何物、山村珍味煮蜂兒、

梅雨初晴採綠桑、秋風時節繅車忙、山中女子傳天巧、織出岐蘇八景圖、

溪聲盡日伴凄寥、倚檻何妨酒氣消、紅葉青山渾似畫、逐牛人渡夕陽橋、

鷄肋に過ぎざれども、亦聊か實景實事を寫せるを以て此に存錄す。

愚仙は日毎に人の請ふまゝに肖像の寫生に暇なし。予が名は、麁名と云ふほどにもあらぬを、猶人々の貴著を讀みたりなど云ひて揮毫を請はるゝに、我ながら閉口したれども、勇を鼓して塗鴉を試みつ。或は居士の名を聞きて四五十の老人なるべしと思ひしに、扨はまだ少き人なりけりとて、今更予が乳臭きを嘲るが如きもあり。愚仙が今少し老人振れかしと勸むるも、持ちて生れし狂態を如何にせんとて哄笑せり。

とある。やがて福島を出足したが例の儘の風體で寒くて仕方がない。幸ひ某女の深切で一枚の丹前を惠まれたことは先刻述べた通りであつて、大助りとは云ふものの何分二人に一枚なので途中交代に被て歩くといふ慘めな有樣で京都についた譯けであつた。而もその途中木曾の中津川といふ所では旅費さゑ盡き果てゝ了つたので我は金策の都合すべく別れ別れになることになつた。

適ま、中津川の郡役所で輿地圖に收載する惠那山の揮毫を依囑されたので、僅少の報酬を得たので、それを以て天囚兄を先發させて名古屋へ金策に行つて貰つた。これを待つこと五日間、宿屋では最後には行燈部屋まで投りこむといふ不待遇であつたが、辛じて天囚兄が五圓送つて寄越したのでヤッとの事拂を濟ませることが出來た。而も囊中剩す處はタッタの二十二錢、これで名古屋まで二十餘里徒歩せねばならぬが、五日の恥の喰ひ仕舞などと無駄口利いて發足した。その途中それでも一泊が出來たが翌日は虛溪と云ふ處で橋錢を要求されたが、既に無一文であつた所から、纔かに所持してゐた郵便切手を以て、それに代へたりして遂に名古屋に着いた。

名古屋で、天囚兄は東雲堂と云ふ書店と確か閨怨とか云ふ標題の端唄の評釋を漢文で書く約束をして若干の金員を獲て、二人は京都に入ることが出來た。そして柊屋といふ宿屋で草鞋を脱ぐつもりであつた所が、柊屋では、體よく謝絶されたのみか『貴君方の御泊りになる宿屋は三條大橋を東へ渡つた邊にあります』と

深切やら侮辱やら分らぬ挨拶をされた。併し飜つて考へたならば無理もない。時候外れな單衣の垢染みたのを二枚襲ねた男と丹前を着てゐる異樣な風采の男と何れにしても見窶ぼらしいものであつたに違いない。けれども天囚兄は重野成齋の身内の者、私は當時長崎縣知事日下某の親戚の者として證明が出來たので、柊屋でもヤット宿めて呉れた樣な始末であつた。

京都に入つて月餘、天囚兄は滋賀縣の『さゝなみ新聞社』に入つたが、豪放の氣は失せないで、獲るものよりは散ずる方が多かつた。二人は盛んに遊び且つ飲んだものだ。或る時もこんなことがあつた。『何でも愚仙を驚かしてやるから、俺が迎にやつたら、直ぐその車で來いよ』と命令的に言つてゐたから、心待ちしてゐると果して迎の車が來た。聞くと先斗町の柊屋（青樓の名）からといふことである。訝りつゝも行て見て驚いた。三階の一間に二十幾人の妓が天囚兄を圍繞して處狹き有樣である。私は度膽抜かれたが、飲むことは兄に劣けをとらなかつた。とやかくする中に『オイこれから行かう』と一令を天囚兄が下すと、總勢の車が用意された。その車は先斗町の入口――四條大橋から三條大橋の手前の畜生寺の邊まで殆んど二町許りの長さに列んでゐた。これが繰り出されて宿屋の柊屋に歸つて行つたが。妓達の下りて了つた後から、我々二人が悠然と車を下りて入つて來たので、柊屋の主人は何人の入來かと迎へてゐたのであつたから二度吃驚したといふことである。

兄はその翌年、朝日新聞社内の公論社に入り、傍ら西區靱で發刊されてゐた新世界（齋藤運藏經營）にも關與してゐた。これは二三年位でやめたが、その齋藤某の周旋で中寺町の顯孝庵といふ鴻池家菩提寺の別莊かなんかに住まつてゐたこともあつた。後、暫くで此桃谷に移つた。その後渡邊霞亭、本吉欠伸の二氏もその近くに住居して居つた。

（筆者云く。明治二十四年發行浪花潟の奥附によれば西村先生は南區北桃谷二百九十九番屋敷に、本吉欠伸氏は東成郡清堀村三百四十五番邸に在られたるが如し。次いで同二十五年二月十三日出版の桃谷小

說の奥附によれば渡邊氏は南區北桃谷三百三十七番屋敷、本吉氏は同三百七番屋敷に住居せられたり。煩しけれども左に桃谷小說と云ふ小冊子の序文を揭けて愚仙畫伯の談を補ふ。)

序

桃谷在大阪城南、地高境靜、門巷蕭疎、庭園間曠、鳥與人遊、而去市不遠、望之鬱然、問之則古人士之所居也、三年前予始來大阪、乃卜居於此、獨讀書於夭々蓁々中、以爲得古人擇里之意焉、厥後渡邊士璋、本吉子文亦相尋至、於是乎三人昕夕講論、銳意修文、而桃谷會成、士璋尾張人也、白面無髭、雙眼如星、其文豊腴婉約、巧寫人情、夙以艶筆聞、子文豊前人也、其貌癯然、其面黧黑、如無能爲者、而其作文也跌宕紆餘、變化自出、以風神勝、士璋二十九、士文少一年、皆以文爲性命、勉而匪懈、其所造詣、豈可測哉、予出自海島、遊方十年、落托飄零、鹿々無爲、與子文同庚、而才學文章瞠若乎二子之後矣、但好文如食色、非病未嘗釋筆、與二子追隨驅逐、以研修斯文、予之所樂而願也、昔者劉關張三傑屹立于巴蜀之地、獨以正統居、其人死而其名傳、方今文章之紛亂滅裂、不啻三國戰亂之比、而唱文章之正宗以披靡一世者誰歟、予輩三人居桃谷、而蜀漢三傑之會亦在桃園、予竊喜其名之相似、而恐其事之不副也、請與二子勉之、頃者書肆梅原生輯三人雜文近稿、名曰桃谷小說、是固咄嗟之作、不足示人、唯聊存錄以徵他日之進修耳、

壬辰二月　　多徵　　天四生

私は兄の桃谷在住の頃その食客となつてゐた。丁度令弟時輔も一緒であつたがその頃彼の大津事件が勃發して二人が津田三藏(?)を取り押へた車夫が何千圓かの賜金を得たことを羨しいな等と戲談口を利いてゐたこともあつた。

兄の先夫人を亡つたのは明治廿四年の春で、桃谷在住時代であつた。

又或る冬の朝、天四兄と私とが合乘人力車で內安堂寺町の阪を西へ下つた。生憎彼の板石の急勾配に加へて撒水が凍結してゐたので、丁度骨屋町の少し西へ下つた邊で、突然、車が仰き樣に覆つた。驚いたものの車夫

は梶棒握つ儘、宙にぶら下つてゐる。天囚兄は彼の大兵の軀を得起しも出來ず、膝を打つて『オイ俥屋どうして呉れるんだ。早くしろ』と頻りに怒鳴つた。同車の私も暫くは何うも出來なかつたものの、又傍の兄の樣子が又とない圖であつたので腹が立つより可笑しくなつて來た程であつた。

大兵で憶ひ出したが、兄の健啖は又有名であつた。或時京都で會食した時、あまりに平げるので仲居が可笑しがつて給仕に出て來ないといふこともあつた。何でも鰻一人前、會席一人前、洋食五皿位一度にペロリと平げるといふ大食漢で、鰻でも東京風だと二人前でなければ承知しなかつた。その後明治二十六年福島中佐がシベリヤから歸朝された頃には天囚兄は曾根崎に遷つて居つた。その家は何でも馬場がその近く東にあつて、又丁度歌舞伎座といふ劇場の裏手の方に當り、都橋の畔にも近い地點で、生垣を繞らしてあつた。その頃は未だ大阪府西成郡曾根崎村二千六百十番邸と呼稱してゐたものだ。そして廿七年十二月三日には令弟時輔が朝鮮で客死した。その時の兄の感想は時輔君の一周年紀念として令弟の大阪朝日新聞に寄報した通信を纒めて一卷とした『甲午朝鮮陣』といふ一冊を知己舊友に頒つたことがあるがその序文に詳かである。

時輔君は私より一つ年下で慶應三年生れで、私の直ぐ上が天囚兄、その又一つ上が渡邊君であつた。時輔君は天囚兄程大きくはなかつたが、容貌は酷似してゐた。天囚兄は普通の反物では着物にならないので丈のよほど餘裕のある反物を買はねばならなかつたといふ體であるから、時輔君でも普通よりは小さくはなかつた。この人も惜しいことには二十八歳で夭死して了つた。

兄の作で芝居に上演されたのは『天目山』が最初であつたと思ふ。次いで『老女村岡』が又大評判であつた。

この前後、兄は勤王僧月照の僕たりし大槻重助と懇意になつた。この重助の事蹟を綴つて新聞に載せ、又これを脚色したらしいものも上場されて、これは私も天囚兄や當の大槻重助君及月照の弟信海の姪玉井伊兵衞等と一緒に觀に行つた。その時重助に扮したのは今の中村梅玉で、當時は未だ福助の頃であつた。確か浪

花座であつたと思ふが、判然したことは渡邊君が知つてゐられるだらう。

この重助が京都清水瀧の上で水茶屋を出し、又同寺境内にも張り店を出してゐたのを、兄が忠僕茶屋と命名してゐたことがある。

兄は廿四年の八月嚴島に遊んで山陽道を上り、翌二十五年八月には金剛山に登り、二十八年十月には奈良の舊蹟を探り、翌年の四月は奈良鐵道の全通を幸ひとして大和の天誅組の遺蹟を弔つて更に伏見嵯峨を巡つてゐる。廿九年六月には南河内の社寺を巡賽してゐて、これらは何れも紀行文を『紀行八種』に載せてあるから、人もよく知つてゐる所である。

明治三十一年兄は朝日新聞社から支那に派遣された。私等はこれを送別しやうといふので京都の大槻重助（二代目）の家に到つて相談した。その時天囚兄は島原にせうと言はれたが、重助は祇園のある茶屋で西郷吉之助、平野國臣、桂小五郎に緣故があつて、皆その名を呼んでゐる婆さんの居る家が送別に相應はしいからそこで宴を張らうと言つた。

けれども、兄は『言ひ度いことを言つて自由に遊んだ方がよい。オイ山内行かう』と車に乘つた。實は櫻井も大槻も私も囊中乏しかつたので、今度の送別に就て誰れも幹事になりてがない。それを『萬事は俺が心得てる』と膝をたたいて行つたのは宜かつたが、さて勘定といふ時になつたら、『山内は若干』『櫻井は若干』等と追徵を課して平氣であつた笑話がある。彼の時には我々の意見に委して置いて呉れたらよかつたのに、兄が行かうといつた。その氣に呑まれて了つて自ら隨從せざるを得なかつたのである。

この天囚兄を弱らせる唯一は私の酒のみであつた。兄を困らせるに足りるものは實に私の酒量であつたのである。

この櫻井君は、私が大阪に來て以來の知己で洋畫を善くします。先達まで尼崎市々長を勤めてゐた人である。私とその弟子の松本君とは元からの懇意であつた。

その後の或夏、二人は泉南の深日に遊んだが意に滿たず、淡輪に榻を移して誠に勝地なることを知つてこゝに十日餘りも滯在した。この樣子は兄が文章を私が挿圖をものして當時の大阪朝日新聞に海風と題して十五回に亘つて揭げられた。是れが淡輪が江湖に紹介せられた最初であつて、これにより、遙々京都あたりから出掛ける位であつたから、やがて汽車ホテルを設けるやら、翌年には停車場を設けるやら、同地は急に繁昌した。故に同地の人は深く兄を德としてゐる。

又明治四十一年七月に、淀川名物枚方の「くらわんか船」の遊びを思ひ立ち、社中の面々を色々の役割に當てゝの珍趣向で出掛けた。兄が山伏で松ヶ枝坊時源となり、霞亭君が醫者の六樫霞老、好尙君が町儒者好尙堂、私が普化僧一仙となり等してゐたが、宿屋が朝日大和守の入來等と大形に待受けたものだから、急に趣向を變へて兄が俄大名の朝日大和守、町儒者好尙堂は典醫好庵、後醍院君は五大院與膳と申す指南番、六樫霞老は家老樣に早變り、私は茶道愚齋となつて淸遊したことも忘られない。

その後、私は明治四十五年から洋行することになつたが、これ全く兄の激勵によつて奮發したのであつた。

又斯う云ふ話もある。兄が支那から歸つてからのことであるが、恩師重野成齋先生が來阪せられたので、網島の鮒宇で書食の饗應したとて、その話の末に『山內。俺は自分の心に背いたことをした。俺も支那から歸つて以來、鄕里が彼の樣に靑樓遊びとか何とか、どうも、驕奢の風が存してゐるのを慨嘆してその結果、斷然狹斜の巷に足を入れないこと、又おつき合にもさる場所には行かないと誓つてゐる。それに重野先生と相對してゐる中に、先生が何か物足りない面持だ。そこで、心にもなく、若い妓でも聘びませうかと申上げたら、それもよからうと言はれた。隨分心苦しく思つたが目を瞑つて『伊豆鶴』へ電話して二三人の妓を招いた。實に心にもないことをした』と述懷してゐた。この頃の兄は昔の天囚式でなくて已に碩園式になつてゐたのである。それまでの天囚兄は全く快男子式な男で一快男子といへば明治二十五六年前後に朝日新聞の小說がなんかにそんな題の著作もあつた。よく覺ゑぬが何でも或男が最期に西鄕南州の墓前で割腹して果てる

處があつたと思ふ。

兄と私とが一緒に東京を出發する時、在京の友人、殊に廣津柳浪君等は愚仙を天四と共に遣るのは愚仙の爲に危險であるといふ位で、兄を非常に危險視した時代もあつた。之を譬へると刀で云へば村正の利刀であつたとせられる。所が後半生に於て宗旨を更へて、五郎正宗の銘刀に化して了つたと、今さらに私はさう云ふ感に堪ねないのである。

最初、人から、『甚麼だい。天四は相變らず危いかい』と尋ねられる。けれども天四兄はその頃から立派な天四であつたのである。殊に愛弟時輔の歿後は肉身も少かつた爲め、その愛が友人に及ぼされた故か、私は弟の如く身を挺して愛し且つ導いて呉れたものである。而も私が之に未だ報するに至らずして兄を喪つたことは哭しても及ばぬこと乍ら憾多いことである。

兄の親孝行であることは最も特筆すべき美點であるが世人周知のことであるから略して置かう。

私は大正十年頃、母堂八十の賀と令嗣時敎君新婚の披露とを兼ねて一夕の宴を大阪ホテルで開かれた時に招かれて兄に會つた。その後東京に移つてからも、懷德堂の祭典とかで來阪したとて私を訪ねて呉れた。これが最後の面晤であつた。この以前、渡邊君に『山内は、この頃何うも浮かない顏をしてゐる』と、非常に心配して注意してゐて呉れたことは、東京に遷つてから耳にして、誠に嬉しく思つたことである。

兄は又大變借金することが上手であつた。これは飲む爲のものもあつたが、又人の爲にしたものが甚だ多い。同鄕の子弟その他の爲に學費を給し面倒を見てやつたりしたことは中々尠くはない。兎に角人を世話することは徹底的にしてやつた方であつた。

要するに薩摩武士に漢學を注入したものが西村天四兄なのである。

何分御覽の通り痛く健康を害してゐるので、想も纏らぬし、記憶の誤りも保し難いが、想ひ出でた儘、斯く述べた次第である。

（中川幸三筆記）

噫碩園先生

前田幸麿

噫々、先生逝て百餘日を過く、追悼の念は更に倍々深甚なるの感あり、先生幼にして父君を喪ひ母堂に保育せらる、年齒僅に六歳出ては予が先人（通稱讓藏號豐山）の門に入る、洒掃應對を執らしむるを家法と爲せしを以て、廣瀨淡窓先生の君汲川流我採薪の身神鍛錬法に倣ひ塾生をして之を踐行せしむ、先生風雨寒暑を厭はす眛爽床を掃ひ衆に先んじ門に登る、先人其の俊穎にして孤弱なるを愍み愛育他に過ぐ、入りては母堂及び外王母の膝下に在りて、忠臣孝子の昔話を聽き養育せられ、漸く長するに伴ひ、天性の才學は蔚然として群を拔き一を聞いて十を知る、人皆な神童と呼ぶに至る、予八歳先人の嗣となるや、先生弟の如く愛撫訓育されし事今猶ほ之を記す、先生十四歳に達するや、蛟龍遂に池中の物たらず、東都に游學する多年、業大に進み衆に擢んす、殊に其の文才の如き驚く可き進境に達し、追隨する能はざる所なりと先人常に嘆賞せり、嘗て任を帶ひ東上先生の宅に寓居する月餘、共に編輯の業に膺る、其の稿脫するや先人を伴ひ水戸に烈公の偉蹟を訪ひ、鎌倉に北條家の舊蹟を吊ひ、江の島に晴光を賞し、多摩川の鮎を獵し、目黑の卯月を詠し、到る所の游跡を都の春風なる小冊に載せ東游の記念となす等、花晨月夕、慰撫欵待懇到を極む、先人常に晩年盲後に至り暗涙を催ふし、終世忘るゝ能はざる快樂なりしと予に語れる述懷なり、其の師恩に酬ゆるの情篤き知るべし、又た予が家道衰頽に遭遇するや、先生遙に歸鄉長女を同載浪華に伴ひ、某校に通學せしめ業卒るに至るまで一切を辨する等、情誼懇切感泣の外なし、暫くにして義父歿し妻逝き、三女亦た世を去り、艱患困頓の厄に遭遇し、父子相擁して世を嘆し、乳兒膝を繞りて飢に泣くあり、即ち先生に書を寄せ之が善後と就職の途を問ふ所あり、慇懃示教せられ且つ金品を惠與せらる古歌に『おちふれて袖に涙のかかる時人の誠の奥そ知らるゝ』の實狀に洩れず、深刻に感激忘るゝ能はざる所なり、予は妻子の祭事を行ひ、上阪先生の宅へ淹留

する四閱月、諄々として諭し、懇々として戒しめ、猶ほ慈父の其の子を導くが如く獲る所大に多し、其間職を得、長女亦た嫁するを得たり、加之二女も招喚養育する所ありしに、先生の力に依り婚嫁を結ぶを得たり、而して末葉の幼兒漸成長を待ち、指教を期待する所ありしに、事茲に至る痛恨何ぞ堪んや。

予來阪先生の眷遇を蒙りしより茲に九年、短日月と云ふべからず、而も未だ浮浪一家を成さず、短才識學吏務に晦く、加ふるに齡已に知命に達し日暮途遠きの感あり、噫々、先人に背き故人に愧づ、今より以往誰に向つて之を諮り之を質さん、只だ空しく孤墳の慘として夕照に映するあるのみ、噫々。

尙ほ先生の行事に逸すべからざるは、極めて鄕黨故舊に篤く、殆んど五十年他鄕に在りては鄕音の如き殆んど忘却すべき所なるに、毫も之を改めず、鄕人をして最も親しみ易く快感を與へられしを常とせり、是れ故鄕を忘れざるは親師の故舊を忘れざるの反映なり、而して其の歸省せらるや、先つ父老故舊を訪ひ往事を談り、舊情を溫め或は靑年を會し諭示鞭韃せられ、公共の事に至るまで盡瘁されし事多し、附言す碩園の雅號は鄕里の居宅は俗に大園と呼び、素と舊家なれば周圍に大なる土堤を築き、花時梅櫻多く三反歩餘りの大宅地なり、大園卽ち碩園の出所も之に因れるものならん、先人に寄せられたる左の一詩に、

讀破萬卷書、文章爲痼疾、不朽在立言、豈敢徒弄筆、詩禮足傳家、功名胡能必、願守先人業、
來門不屈膝、慇懃諗父老、阿世我無術、

歸鄕書感之一

天　四　彥

後ち禁裏に入り樞要に膺られしも、是れ先生の素志にあらざるべし、其他記憶に存する所多きも茲に省く、月明かに梧桐南軒を掃ひ、孤雁新愁を牽く、切に萬感交々到りて涕淚潸々たり、噫々往事之を語るに忍びざるなり。

追憶談

懷德堂記念會理事長　永田仁助

西村先生と私と懇意になつたのは今から約二十五年前です。尤も往來を重ねたのは明治四十三年位からである。それから恰度大阪朝日新聞の主催で、懷德堂の先賢諸儒の大祭典をやられた。これは西村先生が主としてそれに與つて居られた。組織は住友さんが會長で村山、小山兩先輩が副會長で、西村先生が幹事長であつた。但し主としてこれは西村先生の計畫であると思ふ。それが極く盛大に行はれて、其の時の計畫に贊意を表して相當な寄附金が集まつたやうである。祭典が終つて而して差引した殘金が六千圓であつた。其の差引した金は無論種々な金である故に、西村先生は之を意義ある事に始末をしたい、それは懷德堂の再興が一番宜からうと云ふ考を有つて居る、それに就て此の懷德堂の再興を圖る事は一朝一夕にはいかぬが、先立つものは金である、一つ幸ひ君は――恰度私が浪速銀行の頭取をやめて浪人をして居る時分である――手も空いて居るしいゝ時であるから之をやつて呉れぬか、と言うて宅へ見えたのが初めであります。それで私は、其の事柄は頗る結構であるから、我輩の手に適ふだけの事はやらう、と言うてお受けをした譯である。それから財團法人の組識をして、西村先生、今井君我輩などが寄つてやつたのであるが、爾來西村先生と此の懷德堂の經營に就ては始終往來を重ねて今日あるを得たのは、畢竟西村先生が始終積極の行動を執られたからである。私は何うかと云ふと、性急のやうで少しゆつくり構へて居る。西村先生はゆつくり構へて居るやうに見えるがなか〳〵急込んで來る。時に或は辟易する事があるが、どん〳〵進んで來るから遂に西村先生に追隨して行かなければならぬやうになつて來る。而して今日懷德堂在る所以は西村先生の積極の行動が與つて力がある。若し西村先生が最初から此の方針を採つて呉れなければ、懷德堂は今日迄に至つて居らぬと私は思つて居る。故に懷德堂は西村先生に負ふ所が頗る多い。西村先生は常に世道人心に就て非常に慨して居

られたが、これは懷德堂を興した最も主たる原因で、さう云ふ風に諄諄と我輩に說いて居られた。爾來死ぬ迄それを言つて居られたが、何とかして此の商工業地の大阪の一角に構へて所謂町人の學問所懷德堂の趣意を廣めていかなければならぬ、と云ふ事を話の間に始終言つて居られた。晩年宮內省に奉仕せられて以來、月に一回は必ず書面の往復があつたが、其の西村先生の書面の中にはいつも懷德堂の事がない事はない。懷德堂の現在、前途に就て色々心が配つてある事が書いてある。私は常に其の手紙を貰つて感奮して居る。まだこれから懷德堂は西村先生に負ふ所が多いにも拘らず、突然訃音に接した事は、洵に懷德堂に取つて非常な損失である。

（大正一三、一一、二二藤塚誠二筆記）

追憶談

朝日新聞社長　村山龍平

私が西村君を知りましたのは西村君の書かれた「屑屋の籠」あれを見て西村君を知りました。それから大變文才のあるいゝ人だと思ひました。それで西村君を招聘する事に致したのでございます。然る所最初の其の目的よりは彼の西村君の莊重なる文章、申さば宮中文學とも謂ふのを書かれる事になつたが、是れは實は非常なものであつて、殆ど西村君の獨特の文章である。それで西村君が亡くなつて、或は此の宮中文學とも謂ふべきものがなくなつたやうに思はれるので、洵に殘念な事をしたと思ひます。あとに續かれる人もありませうけれども、私の知る限りでは一寸マアないやうに思ふ。此の莊重なる文章は朝日新聞の紙面に屢出ま

して内外共に感嘆の聲を發したやうな次第であります。實は斯う云ふ文章を書く人を後に養成したいと云ふ考をもちまして同君にも話した事もありました。それでお話は變りますが懷德堂なんと云ふ事を同君が思ひつかれましたに就て、私共の賛成しましたのも其の意味を幾らか含んで居つたのであります。御承知の通り漢學と云ふものが段々すたりますから、何うかして漢學を長く留めたいと云ふ考から懷德堂なんかゞ出來て、漢學などが盛んになつたならば、又後を繼ぐ人が出樣かと云ふ期待を以て賛成したやうな次第であります。西村君の學問と云ふ上から言へば、マア大体それで盡きませうと思ひます。

先生の人と成りは洵に愉快な人であつて、時によるとまるきり子供のやうな風で、是は私が直接に當らないのであるけれども、或る時に西村君と社員等と何か食事をすると言つて、何處かへ出かけて行つたが、今日は一つ大名遊びをやらう、それで高いとか偉いとか云ふ事は一切相成らぬと云ふ事を言うて飲食をされたと云ふ事も聞いて居る。又游獵が好きで私は獵銃を西村君に贈つたが、其の獵銃を持出して屢行かれた。健康も非常にいゝ人と思つて居つた所が、意外にも早く死なれた事は洵に殘念に思うて居ります。

（大正壹參、壹貳、貳、談話筆記）

哭碩園西村博士 疊留送別詩韵

黄坡　藤澤章

往年奉詔侍金扉、相送江干淚濕衣、小別何知成久別、夢魂空逐白雲飛。

文字含英又咀華、明經今日更成家、講筵曾上崇文閣、手澤空存書五車。
藻思翩々誰得同、好從清要竭丹衷、如今金石長收響、筆翰長留御府中。
眞成天上待修文、不許奇才與俗群、偏歎詞林凋落甚、何堪今日又喪君。
乘彼白雲辭帝京、訃音到手最傷情、豈思伯氏追君去、白玉樓中訂舊盟。

西村さんと陶詩

大阪朝日新聞社　原田棟一郎

西村さんは陶詩が好きであつた。この數年來、人に書き與へられた墨蹟など、偶まには自作の詩もあつたが、多くは陶詩であつた。

『どうも書物の講釋ばかりやつて居ると文章がかけなくなる、ことに神韻縹緲とか餘韻嫋々と云つたやうな文章はかけなくなる』と述懷された事があつたが、晩年特に枯淡質實な陶詩を愛誦せられたのは、此う云ふ點に氣づかれ自から其の弊を矯めんとせられたのであつたかと私は思つて居る。文章家たる用意の程が偲ばれる。

社友某君が墨蹟を賴んだ時もその見事に書かれたのは、陶詩でも有名な例の『飲酒』二十首中の其五

結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、採菊東籬下、
悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、此中有眞意、欲辨已忘言、

であつたが、その友人早速と坐に展げて訓讀を試み、やがて『菊を東籬の下に採て悠然として南山を見』とやり出すと、西村さん『ちよつと待つた』と手をふつて、『君達はさう云ふ俗訓みをするから不可ない。それでは此の詩の情景が全く顯れない。淵明は何も菊を東籬の下に採て、さうして南山を見たのではない。』

『蘇東坡が此の詩を評し、『菊を採るの次で偶然山を見る、初め意を用ゐずして景は意と會せり』と云つたやうに、菊を採つて故らに山を見たのではなく、菊を採る時不圖南山を見たので、どうしても之は『菊を採る東籬の下、悠然南山を見る』と訓まなければ不可ぬ。でないと又この見ると云ふ字が活きて來ない。意を用ゐて望んだのでなく、不圖見るところに餘韻がある。望でなく見でなければならぬ所以も茲にある。』と說明され成るほどと感心した。

西村さんが宮內省に奉仕する事となり、東京へ移られるので、社友同人が鶴屋に送別の小宴を催した時であつた。鶴屋の主婦が、其時ちやうど出來上つた甲陽園支店の茶亭の題額を是非お願ひすると賴み出た。西村さんも平生からの昵みではあり、早速承知してやがて墨痕鮮やかに書かれたのは『息蓬廬』と云ふ三大字であつた。

陶詩の中に『斯晨斯夕、言息其廬』と云ひ、また『豈無他好、樂是幽居、朝爲灌園、夕掩蓬廬』とある。更に九日閒居の中には『如何蓬廬士、空視時運傾』と云ふのがある。『別莊の庭の茶亭だと云ふから田園らしく、淵明張りで此うやつて置かうと』云ふのが其說明であつた。

私も嘗て西村さんに墨蹟を賴んだ事がある。西村さんの事だから多分堅くるしい難かしいものだらうと思つて居たが、それもやはり陶詩、歸園田居の其三

種豆南山下、草盛豆苗稀、晨興理荒穢、帶月荷鋤歸、道狹草木長、夕露沾我衣、
衣沾不足惜、但使願無違、

であつた。この詩は世の小人輩を雜草に、君子人を豆に例へ、雜草徒らに蔓つて豆は容易に成長しない即

ち天下の荒穢を理むると云ふ經國濟世の德を述べたのだと云はれて居るが、之は少々穿ち過ぎて居やしないか。田園に歸居した詩人陶淵明にそんな思わくがあつたかどうだか、恐らく後世の俗學者が勝手に尤もらしく解釋せんとしたに過ぎまいが、斯くては却て詩人の面目を損するの憾みがある。淵明或は地下に苦笑を洩らして居るかも知れない。また西村さんも無論私如きに斯る事を期待するわけはあるまい。

尤も蘇東坡は此の詩について『夕露衣を沾すの故を以て其願ふ所に違ふ者多し』と戒めて居り、私も如何かすると、人生行路の道狹くして荒草夕露の衣を沾すに堪へざらんとするものがある。その時は何時も西村さんの書いて呉れた此の陶詩を思ひ出し、自ら心に鞭ち努めることにして居る。また年年豆蒔きの頃には必ず之を床に掲げて、且戒め且喜んで居たのであるが、來年からは、且戒め且喜び、且悲しまなければならぬやうになつた事を最も悲しむものである。（完）

尊翰拜誦故西村碩園君追悼號御發行之趣にて御申越之段拜誦仕候然るに小生は三十餘年前同君東京へ遊學の際相交り又最近東京へ御移住之後舊交を溫め候得共其中間廿七八年は東西隔離消息相通せず疎遠に相成候昔年之事に就ては一二感想も有之候得共特別記述する程之事柄にも無之此段御了承被下度願上候懷德堂一覽竝懷德御惠寄被下奉拜謝候堂之事業等も是れにて相分り欣悅之至に御座候久く不得拜晤他日西遊之折は是非御尋問申上度存候　草々不盡

十月念八　　内田周平

思ひ出での記

植田政藏

天囚先生が宮内省御用係を拜命せられて其送別會を北濱つるやで開かれた時、私も末席に參加して先輩諸先生達と一緒に題名の中間入りをしました。巧妙な文字と文字との間に、大家と大家との間に挾つた私の筆跡が一愛嬌を振舞つたので一座を賑はせた事、引越の荷造最中に御邪魔して何か堀り出し物をと漁つて見ましたが既に後の祭り、之は胃腸の良藥だと云つて一束の草根を頂戴しただけの事など、未だ餘り舊い記憶でもありませんが既に幽明處を異にするに至つたかと思ふと、うたゝ追懷の情に禁へない次第であります。

抑々私が先生を知つたのは大正元年盛夏朝日新聞社の舊館の狹苦しい應接間でお目にかゝつたのが始めでありました。紹介狀もなしに刺を通じて藪棒的に面會を求めました。それが一寸先生の癪に觸つたと見ゐて先生の目付きが馬鹿にキヨロ〳〵して居ました。謝恩會の席上で松本文學博士が「小人は人を送るに物をもつてし、君子は人を送るに言葉を以つてす。」といふ前提で一場の講演をせられました。その言葉の中に舊來の卒業生の消息によると、官吏だとか實業家などは通り一片の紹介狀位では中々面會して呉れるものではない。何回も何回も足を運ばして結局徒勞に終る事があり、又面會して呉れても非常に鷹揚で隨分癪に觸ることが多い樣である其段にかけては學者達は一風變つて居て、差支ない限りは大低の場合は氣持よく會つて呉れる

ものである。會へば乃ち視聽言動極めて親切叮嚀で、學問の德といふ事を直感し得るものである。と社會へ出て行く時の心得を話されました。私は早速之を天囚先生に應用して見ました。處が先生の態度が少々變である。最初の程は非常な沈默、只目玉だけがキョロ〳〵と私の身邊を廻つて居る。尤も私は新聞記者になりたさの餘り、先生を優秀な新聞記者として訪問したのであつて、學者として訪問したのではなかつた。然しながら斯うして面會して貰つた以上は、松本博士の言葉の樣に學者としての態度を取つて貰ひたいなどゝ、自分勝手な考へを持つて居た。そうして居る中にキョロ〳〵が靜まつて來て、狩野博士に何を習つたか、湖南先生に何を學んだか、鈴木先生の詩論は如何だなどゝ一通り聞かれた後で、先生はきつぱり私の希望を退けられました。曰く

君達若手連中には新聞記者生活に憬れて居る者が多い樣だが、これ程詰らないものはない。僕等も早く足を洗つて靜かに緩くりと讀書して見たいと思ふ。記者生活には最早や飽き〳〵して仕舞つたよ。だから君達を世話するなんて以ての外だ。別に其日の生活に困らないならば折角の事だから今少し勉强して見たら如何だ。ちつと僕の宅へやつて來玉へ。一緒に研究して見やうじやないか。そして一日も早く學者の畑に一歩を踏み入れたいものだ。

先生自ら學者の域から大分離れて居ると云つて居られる。これが因緣となつて暇ある度に先生の門を叩いて敎を受けました。籾山衣洲先生に紹介されて作詩法や易學の講義も聽きました。衣洲先生の宅で八家文を五六冊も讀まされました。景社文會に引張り込まれて毎月二十五日天滿宮客殿で文章の批評を受けました。武內義雄、石濱純太郎兩君も前後して入會せられました。新入者の文章は常に添削だらけで眞赤になつて居ました。其時分武內氏は老子の研究、石濱君は蒙文を盛んに研究して居られました。兩君は時折立派な研究を發表せられましたが、私はいつも紀行文ばかり書いて居ました。或時箕面山觀楓の記を書かされましたが餘り手近かな見慣れ過ぎた處だから、事新らしく書き立てる事もないので、形容詞ばかり並べで所謂林間紅葉式

に綴り出しました。其時天囚先生の評に曰く、此文餘りに實を失す批評の限りにあらず。と大きな字で書き流して衣洲先生に廻されました。それから雨山、黃鵠、秋渚の各先生達にお目通りして大笑ひの種子を蒔いた事もありました。そんな文章でも淨書して更に小牧昌業先生の御批評を受けねばならないと云ふ樣な私に取つては至極窮屈な景社の慣はせでありました。私が景社を止めて印刷業を創めた時でも先生は非常な經驗者を連れて來て一年餘りも世話をして下さいました。又濱和助とかいふ人の事を一時間餘りも聞かされた事もありました。私が商賣の道には入つてから間もなく衣洲先生が亡くなられました。武內氏が支那に留學せられました。世話すきな光吉氏が東京に轉任せられたり、御大の天囚先生が京大に敎鞭をとられたりなどして景社も遂に振はなくなりました。

斯くして私が先生に師事すること十二年の久しき間、其中で最も深き印象となり記念となつて殘つて居るものは嘗て私が泉州濱寺海濱に假寓の折、衣洲、武內兩氏を携へて遊びに見ねました。飯酒歡談に時を移し衣洲翁の醉墨、十八番の蘭の上に先生が運筆鮮やかに楚辭の名句を拾ひ出されました。それが双幅となつて今に殘つて居ます。又先生が御老母を携へて高野山に參詣せられた時の詩文など見る度に其の俤が彷彿として表はれて來ます。今回堂友會で先生の哀悼錄を編纂せらるゝに就て些か思ひ出でを書き並べて見ました。

天囚博士と張之洞

岡　幸七郎

西村天囚博士が始めて支那に遊んだのは、明治三十一年の春であつた、當時陸軍大尉たりし宇都宮太郎（後の陸軍大將）氏と、同行して漢口に來られた、夫れは只單に遊歷と云ふ名義ではあつたが、其實は、當時の陸軍參謀次長川上中將の使命を齎らして來られたので、其使命と云ふのは外ではない、當時日支兩國は甲午の戰役後で、支那では排日熱が頗る盛んで、一般國民は擧つて會稽の恥忘るべからず、四億萬の同胞は臥薪嘗膽、宜しく會稽の恥を雪ぐと云ふので、湖廣總督張之洞などは、尤も頑固なる排日の主唱者であつた、之れが爲め我が邦人などは、容易に支那の內地に入られぬばかりでなく、漢口などでも動もすれば危險千萬であつた、其有樣と云ふのは今日の排日以上で、五月七日の國辱記念どころの騷ぎではなかつた、之れを視察して歸つた、當時有名な福島中佐（後の陸軍大將福嶋安正）は、此風潮を一變せしめ日支兩國の間を緩和せしむるには、尤も頑固なる張之洞を說き落すより外はないと云ふので、川上次長に其事を話すと、川上次長も流石に後世一代の名將と呼ばるゝ丈の人であるので、夫れは好い處に氣が付たと、直に之れに贊成した、然し其使者には誰をやろうかと云ふことになつたが、其當時參謀部の智者と言はれた、宇都宮太郎氏が其選に當つた、夫れには張之洞が有名な學者だから、之れが相手となる樣な學者を遣らねばいかぬと云ふことになつたが、其頃西村博士は東京朝日に居て、川上次長の處には、御國同士で互ひに往來はして居るし、又福島中佐の單騎旅行記を書て、福島中佐とは無二の中であつたものだから、何は兎もあれ西村氏に往つてもらひたいと云ふ事になつて、同行して來漢されたものだ、そこで其際、川上次長の張之洞に申込んだ要件と云ふのは外ではない、甲午戰役後の世界各國は、非常に東亞に向つて注視して來た、此際御互は甲午の事は全然水に流して日支相提携せざれば、將來臍を噬むも及ばざるの悔を貽すであろう、依て我が國では最早や支那の爲めに虛心坦懷、全國を開いて歡迎したいと思ふから、是非とも張之洞に第一番に來て見て貰ひたい、若し夫れが出來なければ、代表者として張之洞の最も信任せらるゝ人を視察にやつて貰ひたい、只夫れだけでは物足りないから、得べくんば貴方から留學生も出して見て下さいと云ふので、結局一、視察員派遣、二、留學生派遣、三、日

本人招聘の三條件を提議せしめた、此三大條件と、當時排日の親玉と稱せらるゝ張之洞に提議するには、餘程巧みに文章を書かないと行かない、そこで西村氏は例の得意の漢文で以て、堂々たる大文章を書き立て、世界の形勢から、同文同種、唇齒輔車の關係に及び、此際甲午の恨を去つて、日支相提携しなければ行かない、夫れには張之洞の如き支那第一等の人傑が、自ら起つて提唱せらるゝの必要があると云ふことを說き、三大條件の申込みに及んだものだから、之れを一見したる張之洞は、成る程尤もの議論だと言つて、先づ取敢へず自分では面會することは出來ぬが、部下腹心のものに面會さして、日本が果して誠意を以て、我れを說きに來たのか、見さしてやろうと云ふので、宇都宮大尉と西村氏に面會さした、所が一人は陸軍中で有名な小兵の男、一人は六尺大の大男、其取組も妙なから、有名なる文章で西村氏が第一番の矢を放つと、張之洞も流石に人傑だけありて、應と答へて人を出して來た、夫れを智者の宇都宮大尉の舌頭にかけて圓めたものだから、立どころに三條件は入れられた、そして第一回の視察員として擇ばれたのが、湖北提督銜方友升と、張之洞の巾着刀と呼ばれた候補知府姚錫光の二人で、今日の前大總統黎元洪も、當時陸軍少佐で、視察員の一人に擇ばれ、視察員が六名、留學生が八名派遣さるゝことゝなつて、宇都宮氏と西村氏は、之れを連れて歸國したのであつた、そして其結果は、遂に彼の有名なる張之洞をして、親日派の親玉とまで稱せられ、彼れの提唱によりて、甲午の恨は全く緩和されて、一時日支の關係をして、兄弟も啻ならぬまでに至らしめたるが如き、全く西村氏が其當時に於ける、活動の功であつたと云ふのも不可はないのである、其後伊藤公が見えても、近衞公が見にても、張之洞が虛心坦懷之れを歡迎したなども、全く之れが導火線を爲したものである。

（大正十三年八月記）

思ひ出づるまま

山口察常

一

天囚先生の名は朝日新聞の紙上で、かなり前から御馴染になつてゐたが、親しく謦咳に接し得たのは先生晩年のことであり、それも僅か數回の拜面に過ぎないので、別にこれといふ變つた追想も思ひ浮ばない。ただあの偉大な體軀、溫和な容貌、さては物やさしい言葉などがはつきりとわが腦裡に印象されてゐる。いでや思ひ出づるまゝに先生の片影を記してみよう。

二

先生が居を東京に移されたのは大正何年であつたか、今記憶して居らぬ、私が先生の溫容に接し得たのは勿論この移轉後のことである。先生が半生の心血を大阪に於ける懷德堂に濺がれたことは、今改めて私が述べる必要はない。それと同時に先生は東京に於ける斯文會の常議員として、同じく斯道の振興に參與して居られたのも亦周知のことと思ふ。私も當時斯文會の奔走に任じてゐたので、自然先生を知るようになつたのである。同會の色々な會合の度毎に、大抵先生の姿を見た。或は神田にあつた斯文會の會館で、或は東京帝大の山上會議所で。

三

更に深く先生を仰ぐようになつたのは、斯文會が大正十一年に孔夫子二千四百年記念祭を執行した時のことである。この記念祭はかなり盛大に行はれたもので、同會役員になつてゐたものは、必ず何かの仕事をふりあてられて、それ〳〵祭事に與つた。この時先生は新聞記者係の主任として、私はその一員として共にこの祭事について各新聞社の了解を得、その贊助を求めることになつてゐた。そこで祭前に於ける記者招待會、

祭典當日の接待、祭典前後新聞記事の參考となるべき材料の選擇などは勿論、招待狀の文面、名宛、會合の日時等に至るまで、巨細となく先生の方寸を仰いだのである。そして招待會の席上先生は唯『自分も新聞に關係する一人として、偏に諸君の同情ある贊助を願ふものである』といつて、大きなからだを丁寧にまげてお辭儀された。並居る記者諸君にこの老先輩の恭謙な態度と言葉とがどんなに強く響いたであらう。この祭典に就いて都下の大新聞がかなり大きな紙面をさいて、その報道に勉めたのは、祭典それ自身が曠古の盛事ともいふものであつたとは云へ、又先生の人格そのものに負ふ所が少くなかつたのはいふまでもないことである。斯文會は先生の逝去によつて、宣傳機關の主腦部を失つたと云つてよい。

四

私が帝國學士院に於ける故松方公米壽記念奬學資金による在支研究員に選ばれたことを、最も喜ばれた一人はたしかに先生であつた。私は先生から老公の爲人を聞き、その斯學に對する熱誠を伺つて、私の責任を一層重く感じたのである。今春三月出發の時、興津の海岸に老公をお訪ねして、今の巖公にお目に懸つた時にも先生のお話が出て、老公が先生に推服して居られたことを知り得たのである。今ここに來て僅に半年經たないうちに、松方老公は薨去になり、又先生までも失ふに至つたので、何となく私はあるたよりなさを痛感せずにはゐられない。二年の留學に何とて齎すものはないにしても、この御兩君を中途で失つたことが、どれほど私の心を暗くしたであらう。かうやつて書いて居ながら、三月私たちの爲に開かれた送別會の席上、私はたま〳〵先生の直前に座を占めたので、懇々と在支中の注意を說いて下さつた溫顏が眼前に髣髴するを禁じ難い。先生を今少し長く生かしておきたかつたとお考へになる方は御母堂を始めとして、世に數多いことであらう。私も私一人の立場から見ただけでも、せめて今數年の壽命が延ばしたかつた。追憶には愚痴が伴ひ易い、かへらぬ事があれこれと思はれてならない。

（大正十三年十一月燕京寓居にて）

西村天囚先生を懷ふ

白雷　最上　宏

○去る月二十九日午後一時半我西村時彦先生忽然として東都に逝去せらる、嗚呼悲哉。

先生は我郷里種子島西之表の人、後奈良天皇の天文十二年八月二十五日葡國商船種子島西之村に漂着せし時、時の地頭西村織部之丞時貫の十二代の孫に當り、鐵砲傳來史と離るべからざる因緣の下に慶應元年七月二十三日を以て生れられた。

○其祖織部之丞時貫が葡國商船乘組の明の儒生五峰と筆談せし事と往年先生が支那に渡り彼の學者連と交友されし事とは面白いコントラストである。

○先生は三歳の時父を喪い弟時輔と共に母堂淺子刀自の手に育てられた。

○淺子刀自は世の所謂賢母の典型で歌道に通じ至て聰明なる人である、今尙健全當年八十五歳、何人も刀自に接する者をして此母にして此子ありと思はざるを得ざらしむ。

○刀自は若くして夫君城之助氏に訣れ次で次男時輔君を亡い今や先生に先立たる刀自の胸中や今如何傷ましき事の限やあらん!!!

○淺子刀自は同郷故平山西海先生の女、平山寛藏翁の妹である。

○西海先生は當時の有名なる學者で久しく京都に遊び彼の有名なる摩島松南、猪飼敬所、中林竹洞等と交友ありし人である。又淺子刀自は我碩學前田豐山とは從妹に當つて居られる。

○時彦先生の父君城之助氏は天下の碩學重野安繹先生等の交友で、若し氏が早逝しなかつたならば必ず天下に名を成すに足る學者であつた。

○後年重野博士が先生を招致して敎育されたのは即ち舊友に酬ゆるの至情であつた。

○先生は此の如き兩親の間に生れ幼時より親籍なる前田豐山先生の膝下に訓育せられ後長じて重野博士の門下生となり東京帝大文科の古典科に入學された、故文學博士萩野由之氏等とは同期生であつたと記憶する。

○其後業を終へずして身を文壇に投じ、其處女作屑屋の籠を著して文名天下に顯はれ、爾來大阪朝日新聞社に入りて其健筆を揮ひ、其典雅にして流麗なる文章は華の如く關西文壇を飾ること數十年に及んだ。

當時朝日の天囚か天囚の朝日かを思はしめた。

○大阪朝日退社後京都大學の東洋文學講師となる。

○此時分先生が久敷心血を注がれた日本宋學史は漸く完結された樣に思はれる。

○先生が京大の講師在職中文學博士の學位は授けられた。

○數年前より大阪を去りて東都に轉じ主に島津家の歷史編纂所の編輯長の任に當り、一面宮內省御用掛として宮中に奉任さる。

○然し今や斯界の第一人者として大に爲すあらんことを自も任じ世も亦大に期待せし時に當り忽然として永逝せらる、洵に天下の損失決して僅少ではないのである

○嗚呼先生は天下の文豪、薩南唯一の文星として我種子島の爲に大に氣を天下に吐きし第一人者であつた。

常に其鄕里の爲に後進を指導し其鄕里の顯彰に意を用いられた

○先生は常に吾人に向つて其本を忘れるなと敎訓された。

予は豐山翁の門下生と云ふ事の外先生とは緣籍の間なるが爲に中學時代より今日迄二十年間先生の知遇を受け、大阪を通過する每に大阪北區松ケ枝町の寓居を訪ひ、其家庭の一人の如く厄介になり來つたが爲に、今日先生の訃に接しては轉々感慨の無量なるものを一層覺ゆるのである。

○大正十年六月上阪の際久方振りに長時間先生の溫容に接し快談盡きる時なかりしを思へば之が先生との最後のそれであつた事を悲しまざるを得ない。

○先生は至て平民的で多くの書生を世話し、其面倒をよく見てやられたこと實に感謝の種である。常に先生の宅には食客がこぼれる程でろ〳〵して居たものである。

○先生は常に鄕里の學生に向て種子嶋だと云ふ事をかくしてはならぬ、種子嶋だと云ふのを恥かしがるのは種子島に生れて種子嶋を知らぬからである。種子島をよく研究すればする程種子島が歴史上人文上實に天下の誇りであらねばならぬとて鐵砲傳來甘藷の移入文學の淵藪等に付いて諄々と說いて聞かされたものである。

○先生は非常に親孝行で、其日常母堂淺子刀自に盡された有樣は實に至れり盡せりであつた。又先生の恩師豐山先生に對せられた報恩的行爲も亦實に涙のこぼれる程であつた。

○且つ舊島主種子島男爵家に對せられては當主守時男の幼時より豐山先生と共に蔭になり日向になり、其誠忠至醇實に古の忠臣義士の行爲其者であつた樣に思はれる。種子島家が授爵の天恩に浴せられたるは御先祖の偉德に由るは無論なるも、亦豐山先生と先生の盡力熱誠が與りて大なりしは我等舊臣の感謝を以て記憶する所である。

○先生の前半生は隨分磊落にして洒脫、予が從兄故尾形直十等と東京放浪中の如きには突飛なる逸話の持主であつたが、後半生先生の人格精錬醇化し、古の儒者碩學を以て任じ、謹嚴其者の如ぎ內に何人をもチヤームする或物を包藏せられしは先生に接する者の皆な感する所であつた。

○近來先生が碩園と號せられしは先生出生の地西之表大園（碩は大なり）を意味せられしものならんも現今の先生は確に天囚居士にあらずして碩園先生が適當であつたと思はれる。

○嗚呼天下の文豪、鄕黨の先覺者西村天囚博士の訃に接し痛嘆衷惜の情禁ずる能はず、轉々懷舊の情緒交々至り慈父の如く師の如く兄の如く吾等後進に親しみ深かりし生前の先生の俤を偲びつゝ本文を草し以て先生の永逝を痛惜するものである。

先生の遺訓

武内義雄

私が先生の名を知つたのは明治四十二年大阪朝日に宋學の首唱が連載された頃で、當時はたゞ博學能文の學者であると思つたにすぎなかつたが、その後數年を經て大阪府立圖書館に奉職するやうになり、今井館長の紹介によつて先生に見に特別の知遇を受くる樣になつてからは先生といふよりは寧ろ親といふ樣な感じをもつやうに成つた。私が先生に親炙した年月は僅に十年餘りであるが、その間に蒙つた恩誼は口や筆に盡されぬ程であつた。お忙がしくて玄關前に面會謝絶の札が下がつて居るときでも、行けば必ず引見して質問に應じて下さつた。愚にもつかぬ文稿にも親切に朱を加へて下さつた。廣い大阪に誰れ一人かへり見てくれる人もなかつた當時の私に、望をかけて敎を垂れて下さつたのみか、學問するに都合のよい友達や地位まで作つて下さつた。昔豫讓とやらいふ人は人が衆人を以て己を遇した場合には、衆人を以て之に報じ、國士を以て己を遇した場合には國士を以て之に報いたときくが、師弟の誼はかく打算的であるべきでなからう。然し私には今まで打算的な豫讓の眞似も出來て居ない事を愧しく思ふ。

たしか大正三年の冬の頃であつたらう。先生が圖書館を訪ねられて館長室で暫く御用談があつたかと思ふと、館長は私を呼んで紹介して下さつた。これが私が先生の謦咳に接した最初である。四方山の話の末に先

生は『毎月二十五日天神樣の晩に、吾々の仲間數人が集まつて、お互に文章を添削し合つて居る。會は天神樣を景ふといふ意味で景社と名け、規約としては必ず近業一篇を懷にして來るといふ事にして居る。お差支なくば君も仲間入りしては如何です』と仰せられた。私はすぐ是非席末をけがして敎を請ひ度い旨をのべてお別れをした。未だ漢文を書いた經驗もないものが大家の席に列するのは自分ながら横着の樣に感ぜられたが然しその邊の事はよく御存知の上で、進んで導かうとせられる御熱心には感激せずには居られなかつた。年が明けて二月の中頃に電話で『今月の文會は自宅で開くから廿五日の夕方から出懸けよ』との事であつた。やつとの事で變な一篇を作り上げて御邪魔すると、席上には先年物故せられた粉山先生、今奉天に居られる岡山氏、かつて昌平校に學んだといふ永田輝明翁などが各硯にむかつて、筆刪を加へて居られる。その場の光景を見て懷にして來た艸稿を出す勇氣もなく、順々に廻つて來る先生方の文章を拜見して居ると、先生は規約の艸稿はと催促せられる。恐る〳〵懷から未だ初めてなのですからと申譯をつけて差し出すと、先生は笑ひながら、すぐ筆を取つて添刪して下さり、それから順々に諸先生の前を通過して戻つて來たが、削正されたところは六七ヶ所で思ひもよらぬ賞賛の御辭さへ加はつて居る。勿論之は先生が私を導かう爲に取られたお手段だとは、その時の私にもよく知れて居たけれども何となく嬉しく、それから毎會かゝさず出席する樣に成つた。その後先生は東京に出られたとき、岡田博士から『住吉に石濱といふ秀才が居て卒業論文を漢文で書いた』といふ事を聞き込れ、態々住吉にまで駕を枉げられた。石濱君も先生の御熱心に感激して景社に加盟せられ、玆に石濱君と私とが落ち合ふ機會が出來た。其後私と石濱君とは會を重ぬるに從つて親密の度を加へ、遂には二人で會の常任幹事を引き受けて、とも〳〵敎を請う樣になり、先生の門に出入する事が數多くなつた。打ち明けたところ、私は最初大阪に興味をもたず怏々として樂しまなかつたが、先生に知られ石濱君に交つてから、大阪に對する感じが一變して、今では第二の故鄕の樣に思はれて、夢寐の間にも忘じかたい。而して過去數年間大阪に於て樂しく讀書することが出來たのは全く先生の御蔭である。

先生は初め天囚と號し後に碩園と改められた。私は或る時何故に有名な天囚をすてゝ碩園に換へられたかを御尋ねすると、先生は笑ひながら『そこが思想の變つたところさ、吾輩も少壯の頃は血氣にかられてつまらぬ眞似をしたものだ、當時は吾輩も性惡論者で人間は本來惡を働き度いものだが、天から囚られて牢屋に打ち込れて居るのだから仕方がないと思つて居た、そこで自ら天囚と號したのだが、此頃では性善論者に成つた、これが號を改めるに至つた第一の理由。それから天囚といふ文字は我より古をなしたもので、古典に據りどころはないと思つて居たが、後に公羊傳の疏にある事を知つた、而して公羊學は、吾輩大嫌、これが改名を促した第二の理由。この二つの理由で天囚の號が嫌になり鄕里の大園村を取つて碩園と號した』と語られた而して私が先生に親炙したのは、先生の晩年であつたから、私は碩園先生を知つて天囚居士を知らないといひ得る。私は常に碩園先生と呼び奉つて敬事した。

私が先生から承けたみ敎は今一々記する遑がない。然しその中尤も重大な敎訓を擧げるならば、學問をする人は義理考據詞章の三方面を具備しなければならぬといふ事であつたと思ふ。私が景社に入れて戴いた間もない時の事であつた。一日電話を以て圖書館のかへりに宅に立ち寄れとの仰せがあつたので、何事やらむと伺ふと、先生は姚姬傳の尺牘一部を出して、この本は私に重複して不用になつたから君に進ずる、この內に文論の面白いものがあるからよく讀んで見給へ、それからこの人は學問には義理考據詞章の三面を備へなければ不可と唱へた人でこの點は吾輩の尤も敬服して居る所である。近頃の學問は考據を過重してゐる。考據に長ずれば學校の先生をするには差支ないかも知れぬ、然しそれでは唯學究といふのみで、一世の師表となり社會の木鐸たるべき人格は出來上らぬ。人格の修養となると矢張り義理を考へなければならぬ。さりとて昔の固陋な儒者の樣に門戶の見を持つて八釜しくいふ事も不可ぬ。義理と考據と相まちて本當の學者といはれる、然しこの二つだけでは後世永く自れの主義をのこすことが出來ぬ、之を後世に不朽ならしむるは文章の力だ、乃て文は載道の輿だといはれて居る。要するに、大儒の格に入るには、義理考據詞章の三者が必要

だ。吾輩は君に大儒たれとすゝむると勵された。この御敎はその後も屢くりかへされた。大正八年の春先生の御盡力で私が支那に游ぶ事に成つた時にも矢張りこの敎をくりかへして長文の贈序を作つて下さつた。それから又去年の夏仙臺に來游された時私の爲に賦せられた詩にも同じ事が說かれてゐた。私に對する先生の指導はこれが尤も重大な點で、又同時に先生の主張であつたと信ずる。

先生は義理の方面では朱子を尊崇して居られた。然し研究法としては淸儒の考據を輕んぜず雙方の長所を取つて克く一家をなして居られた事は、懷德堂の講席に列した人々の等しく賞揚する所であつた。而して文章はその尤も長所であつた。何か研究に從事せられるときは金を吝まず材料をあつめて後之に取かゝられるが常であつた。先生がいつも愛讀された古文辭類纂の如きも、大抵の人は一部で滿足するのであるが、先生はその刻本をすぐに集められた。晩年に楚辭の研究に志された時の如きも所有方面に依賴してその材料をあつめられ、松雲堂主人が北京に行つた時の如きは歐文電報をまで打つて楚辭を集めることを賴まれた樣に聞いてゐる。私が支那に居たときも先生の爲めに楚辭を搜して、少し變つたものと思ふと一々通知をしたが、それ等は皆既に御所持であつた。たゞ一度書目答問に大小疋堂本がのつてゐるが未だ見ないから搜せとの事で、やつと一本見付けて御送りするとそれが恰も京都の學會で講演をなさる前夜に到着したので、嬉しさの餘り北京の方に向つて盃を擧げたといふ御手紙を頂いた、尤も大小疋堂本は何でもない本だが、何でもない本でも見ずに濟まされなかつた所が學問に忠實であられた證據である。これ位まで熱心に輯められた結果楚辭に關する材料は七十種を越えて居た。楚辭の多く集つたのは恐らく先生が第一であらう、而してかくしてあつまつた材料に本く研究は既に脫稿してはゐるが猶篋底に藏せられて世に現れない。先生は近々屈原祭を催する御考があつてその時には床の間に屈原の畫像をかけ、席上に楚辭の諸本を陳列して客を招き、客には酒をすゝめて皆醉はしめ畫像には蘭の花を供へて獨り醒めさしておくのだといつて居られたが、遂に實現されずに終つた、東京に移られてからは特に書經の研究に從事せられ、これにも材料の蒐集に苦心せられた樣であつ

た。今年の正月御伺ひした時に、此頃は尙書の研究に辛苦して居る、行く行くは尙書に關する著述を三種するつもりだといつて、其略完全したもの二種を示された。先生生涯の著述は非常に多いが、晩年に辛苦されたものは皆未だ世に出て居ない。此等は後日先生の御交友門生の力によつて公にされたいものだと思ふ。

先生の事業として尤も大なるものは懷德堂の重建である。然しこれについては私よりも更に關係の深い方々が居られるから私は多くを述べることを遠慮する。唯去年堂友會の發會式が催された後の御手紙に

堂友會は懷德堂の成果ともいふべし、發會式に參り十年來の辛苦を慰め不覺落涙致し候、老境可笑耳、といふ一節があつた事だけを記しておきたい。所謂十年の辛苦を目擊した私には感慨深き語である。種々な事情から推測すると、先生はいづれ再び大阪に歸つて懷德堂に全力をそゝがれる御考であつたらしいが、その御考も遂に實現されないで終つた。然し苦心して集められた遺書は懷德堂關係の方々の御盡力によつて永久堂の寶として保存されるよしであるからこの點に於ては故先生も本懷であらう。序に一言して置きたいのは先生の詩に

家藏萬卷不爲貧、訪購多年太苦辛、他日無妨代薪米、子孫未必讀書人、

といふ一絕があつて、この遺書が即先生唯一の財產で、或は子孫はこれによつて生活を支へなければならぬかも知れぬと考へて居られた事である。

今一つ私に取つて忘れがたい印象は去年の夏先生の御來游を迎へて樂しく暢談し得た事である。たしか八月廿一日の朝であつた、私は鄕里から仙臺に歸る途中先生の御宅に立寄ると、先生自ら玄關先に御出ましになつて『ヤァこれは珍らしい。吾輩今日仙臺へ游びに出懸けるつもりだが君は鄕里にかへるのか』と言はれたので、私は『實は一寸鄕里に行きまして今仙臺へ歸る途中です』と答へると、先生『それは好都合一所に行かう、實は昨晩出懸けようと思つたが、岡田君が支那に行くから紹介狀をかけといつておこしたので、朝から書いてゐる所さ、マァ上り給へ』と仰せられた。私は暫く御待ちして午後一時上野發の汽車でお伴をし

て午後九時すぎ仙臺についた。その夜は先生の舊友瀧川君山翁の御宅に泊られ、その翌日私も君山翁を訪ふて御馳走になり廿三日夜は私の宅で一泊して頂き、翌二十四日平泉に御伴して松島白鷗樓に宿泊した。眺めのよい緣側の椅子にもたれて、雲間もる月影に波は輝き、遙か彼方にかすむ島々の景色を御覽じて「今少し早く此の景色を見ておけば一度母をも伴ひ來るべかりしにと歎息せられた。味いものを食ふにつけ、よき眺めを見るにつけ先づ第一に母君の上を思し出でらるゝは先生の常であつたがこの時特に御孝心のあつさに感じた暫くして机上の卷紙を取り、長い古詩を認められて、これは平泉からの汽車中で君の爲に詠じたのだと际された。私は再三拜誦して記念の爲に頂いておき度いと乞ふと、先生はよく推敲した上で書き改めて贈るゞ仰せられて、そのまゝ鞄に入れられた。翌朝便船で鹽釜に向ふと、隣の席に居る人が新聞を讀んで居る。側から窺ふと、加藤首相の薨去の報がある。一寸かりて先生に示せば、先生は「コレハ大變吾輩は直ぐ歸らねばならぬ」と仰せられた、船が鹽釜につくなり汽車にのりて仙臺にかへり、先生は瀧川翁の宅にはせつけて荷物をまとめられ、私は宅にかへつて御調度どもを取まとめ、御母君の御土產にと鯛味噌一折を求め、二兒を引つれて其夕ステーションに御見送りした。その後二三日にして次の樣な御手紙が私のもとに屆いた。

拜啓今回の東遊徹頭徹尾奇と謂ふに足ると存候、前夜の發程を猶豫して翌日吾兄來訪同行を得たる何等の奇ぞや堂々たる大學教授我に代りて鞄を持ち切符を買ひ隈なく東道して松島中尊寺の勝を探りたる、何等の奇ぞや、好事多魔とやらむ、宰相薨于位の報に急遽歸京、ウッヲ〳〵の中に一夜を明して、廿六日午前五時上野着、直に登省公務に從ひ、午前十一時四十分には汽車にて逗子葉山に奔走し、午餐も食はず、夕方漸く公事を終り歸宅、別段の疲勞も無し、六十に垂んたる老軀猶足以用、亦可謂奇矣、扨も斯遊御欵待といひ御案内と云ひ、東道主人としての御世話殘る方なき御親切不堪感謝候、殊に奉別の時は鯛味噌澤山に御惠贈、老母之喜可知也、彼といひ此といひ厚く御禮申上候、何卒令閨にも宜布御傳謝被下度候、但遺憾なるは義範君（拙兒の名）と今一日面白く廣瀨川原に遊び暮さざりしことに有之候、

老荆も旅況を承り難有り嬉しがり申候、先は安着御爲知旁御禮迄不取敢如此匆々不盡

八月廿七日

私はこの御手紙を涙なしに讀むことが出來ぬ、『六十に垂んたる老軀猶足以用矣』と喜ばれた先生が、一年たゝぬ間に亡き數に入られようとは夢にも思ひよらなかつたのである。この御東游中に、瀧川翁は來春の仙臺孔子會に是非御來講を願ひ度しと懇望せられ、先生も快く御承諾下さつたのであつたが、今年の三月二十二日私のもとに着いた御手紙の終りに

釋奠は來月いつ比にや果して老生奮發スヘキヤ夙諾も有て心懸に御座候

とあつたのでその旨を瀧川翁に報ずると、翁は來て頂くことは勿論御願濟の事と心得て居るが日時は五月末の心算だとの事、すぐその旨を報じ、御東下の節には母君御夫人御同伴拙宅に御泊り下され度しと申添へた。その御返事に

貴書拜見仕り候釋奠五月末の由是は困入申候六月初旬ニナレカシといのり居候五月末には東宮成婚之御饗宴有之在京者ハ參列を樂しみ居候事に御座候、此趣君山翁へ御運動被下度候、是非荆妻は同伴の心得御厄介希上候、老母は遠行困難ニ付六月ニハ媳婦留守爲致度候　四月廿五日

とあつたので更に君山翁に相談すると、六月初旬は當方都合あしければ五月中旬にては如何との手紙が行つたらしい。その後

拜啓釋奠は十八日と決定の由君山兄より申來承知の旨電報致置候、十六日夜行にて參り、十九日夜行にて歸度と存候。東京から仙臺くんだり出掛けて、人に聞いて貰ふ程の說も無候は赧顏の至、君山は論語何の章を講スルやら。小生も未定、其内意見可申候……匆々不盡　五月初二

といふ御手紙を戴き、私はたゞその日の到るを待ちわびた。

ところが先生は遂に不治の病にかゝられて御越しなく孔子會も取延となつた。その後御夫人からの御消息

により漸次快方に向はれると承り遠からず御全快の事と思つて居たが、廿九日の午後學校から歸つて机の前に坐ると何となく氣分がすぐれず讀書も出來ない。丁度この時『懷德』の第一號がついたので披閲していると先生危篤の電報が着した。私はその夜すぐ東上したが先生は既に死なれた後であつた。御遺骸の前にぬかづいた時のかなしさはたとふるに言葉もなかつた。師と仰ぎ親と慕つた先生のみ敎は再びきくことが出來ない。五月二日の御手紙が私に賜はつた絶筆となつた。松嶋白鷗樓で書示し給ふた詩は雜誌『東洋文化』にのせられて餘程修正せられて居たが、御淨寫は遂に頂けなかつた、或る日瀧川翁と追懷談の折この詩の事に及ぶと翁は先生が急遽御歸京の途に上らんと汽車をまたれた間に詩箋に書きのこされた艸稿があるからとてそれに跋文をさゐそへて賜つた。

その詩と跋文は次の如くである

五城訪二子、斬是此寄萍迹、前宵君山廬、今夜宜卿宅、宜卿富春秋、鬱乎有學植、百家無不通、群言傾瀉液、殫精讀皇疏、校訂尤詳覈、考據其所長、惟恐好而僻、我聞學有方、義理尙尋繹、聖人垂微言、須闡其奧蹟、詞章有體要、咀華須入格、三者不廢一、兼之謂儒碩、篤學如君少、才亦不易獲、況今爲人師、國庠主講席、弘道扶綱常、吾輩素有責、願君閱其中、以救斯文厄、君山眞老成、諄々事誘掖、二君願往來、討論相資答、三人對一尊、款談朝與夕、松島中尊寺、探勝共杖策、東國早逢秋、世事亦匆劇、分袂遽登車、遙々雲山隔、

遊仙臺賦贈武內宜卿併呈　　弟　邨　彥　　初稿

君山學兄敎正

此詩癸亥夏西村子俊在宜卿家所賦、稿未及定、相携探勝松島中尊寺、歸途又過我廬書示、今玆季春子俊將重來游、臨發得疾、七月念九日竟不起、悲夫、子俊不可復見、宜卿見此詩當如見子俊也、大正甲子八月資言

あゝこの詩は遂に先生の遺訓となつた、私は永く坐右の銘として、先生の訓戒に從ひ奉るであらう。

古月樓を訪ふ

財津愛象

九月十七日、堂友會員野口、岡田、井上三氏と相携へて南河内郡天見村に相宅宰藏氏を訪ふ。氏は碩園先生と交特に深くその邸は先生の暇ある毎に行きて假息せられし所、從つて手澤の存するものも多く、又遺墨を藏せらるゝことも他に超えたりと聞き、一たび其の地に過りて、それ等遺品の展觀を請ひ、先生在世の俤を偲び奉らんとて、かくは出立ちしなり。古月とはその樓名にして、これ亦先生の命せらるゝ所なり。

高野電車は千早口を過ぎて、山峯重疊の間に入る。路は溪流に沿ひて、山あひ遠く溯り、兩岸に咲き續ける曼珠沙華宛然血の如く、折からの雨に山は雲を吐き、雲は山を呑み、熱鬧の巷を距る十里に足らぬ所とは思はれぬ樣にて、市塵を洗ひ、詩思を養ふには得難きところ、先生の深く此地を愛せられしも宜なりと頷かれぬ。天見驛に下車して爪先上りの路を攀ぢ數町ならずして相宅氏の門に至る。刺を通ずれば快く客室に延きて、物語は先づ先生の思出に緒を解きぬ。相宅氏の先生と相知るに至られしは、氏が先生のもとに碑文の作を請はれしに始まり、肝膽相照して一見舊の如く、それより或は獵銃を携へ、或は詩筆を載せて、月に一二度は必ず訪れて、家に在るやうに、うち寛がれしといふ。床の間に懸けられたる萬物備於我矣の一軸、筆致謹嚴、まづ面のあたり、諄々と道を說かるゝ先生に接する心地して、かの溫容に微笑を含みつゝ我等の物語を聞かるゝやうにも思ひなされぬ。楣間に揭げられたる省耕書屋の扁額は猪飼敬所先生の筆なり。これも嘗て厨の方に煤びたりしを、先生の見出でゝここに懸けられしなりとぞ今我等が坐し我等が談るところは、嘗て先生の、かの物に滯らぬさまに高らかに打興じて、杯を擧げ、興至りて詩を賦し文を草せられし所なり。前栽に續きて躑躅の古木生ひ茂りて、軒を壓する山に連れり。此の花咲き滿ちて薰風吹き通ふ頃は、興趣殊に

深く、先生常に之を愛して、幾度か詩にも上されしといふ。茶を勸めらるゝ間にも物語は盡きず、いざ樓に登り給へ。其處こそ先生を偲ぶに更に相應しき所なればとて誘はるゝまゝに樓に登る。樓上は六疊ばかりにて東南の二方開きて明るき室なり。前山の綠坐して掬すべく、月夜の趣亦一入なりといふ。楣間に扁して、古月樓天囚題といふ。南に面して一基の机あり。先生のこゝに來らるゝや、まづ此樓に登り此几に隱り、或は書を繙き、或は句を練り、興至れば紙筆を喚びてその得る所を書し、以て樂とせられしといふ。されば此樓は先生臨池の處ともいふべく、從つてその揮毫せられしものも多く、また會心の作も少からず、まづ示されしは慈輿に侍して高野山に登られし折の作なり。此の時も夫人とともに母君を護りて此家に落ちつき、こゝより高野に赴き、歸途またこゝに留りて此の作成りしとなり。詩にいふ。

天倫至樂在游觀、杖屐三人食一簞、不是焚香去求福、祇林花木足承歡、

拂面薰風微送香、慈輿已過女人堂、飛花亂點双皤髩、彷彿華鬘瓔珞粧、

と。あゝ人生至純至美の境地、何物か之に比すべき。此の一軸を中にして、物語は先生と母堂との上に移る。先生の母堂に侍して孝養至らざるなかりしは、傍人の涙を誘ふばかりにて、春秋の兩彼岸には、必ず母君を車に乘せ奉りて四天王寺に詣で、禮拜の後は境内の遠近を、その手を執りて御心に任せて遊びありかせ給ひしこと、永き間レウマチスを患ひ給ふをなげきて、年毎に有馬の溫泉に伴ひて、さしもの痼疾を癒されしこと、或は東京に移り住みて後、直に母君のために湯殿をしつらひ給ひしこと、大震災の折、自ら母君を負ひて難を避けられしことなど話は中々に盡きず。やがて一面の扇を示されしを見れば

裙布釵荆度幾年、承歡尤喜惹慈憐、爲卿未得裁春服、又購奇書補舊編、庚申歲暮有作示内、碩園居士

とあり。和平の氣堂に滿てるを見るべし。

尊重前賢未刻書、平生過目輙收儲、歲將暮矣逢奇籍、苦向家人問俸餘、癸亥歲晩作、

の一首、先生の面目躍如たるを覺ゆ。かくて一幅二幅、やがて壁間空處なきに至りぬ。これはいつの時の作

これは如何なる日書かれしなど談らるゝに、思いよ〳〵深し。霧島山の長詩は歸途直に此樓に來り、旅裝をも解き敢へず、紙筆を求めて一氣に書き下されしなりといふ。先生の用ひられし筆も取り出でられぬ、硯も取り出でられぬ。目を瞑して靜に既往を追懷すれば、感慨無量、主客相對して語なし。蕭々たる雨なほ已まず白雲前山に去來して、峯巒須臾に變ず

滯雲滿峽雨絲々、梧碧榴紅啼子規、緣底聲々哀怨甚、酒醒以讀屈騷辭、
紅榴こそ散り果てたれ、子規こそ啼かぬ、この景を以て此の情を推す、古月樓頭案による先生の風丰眼前に髣髴たるを覺ゆ。この日展觀の書幅、今その詩を寫し取りて、後の記念とせむ。

丙辰六月與秋渚霞亭九浦諸君同游河之天見酒間聞啼鵑率賦　天囚彥

滯雲滿峽雨絲々、梧碧榴紅啼子規、緣底聲々哀怨甚、酒醒似讀屈騷辭、

辛酉秋日赴任東京留別諸友五首之一、相宅賢兄粲正　碩園邨彥

脫却蓑衣向帝京、江干話別記交情、他年歸釣莫相忘、濠上烟波鷗鷺盟、

癸亥歲晚作　碩園彥

尊重前賢未刻書、平生過目輒收儲、歲將暮矣逢奇籍、苦向家人問俸餘、

芳山懷古　天囚彥

南朝五十六春風、留在櫻花萬樹中、不似柳營烟址冷、香雲深護古行宮、

乙卯初夏奉母登高野山作五首　天囚彥

天倫至樂在游觀、杖屨三人食一簞、不是焚香去求福、祇林花木足承歡。
拂面薰風微送香、慈輿已過女人堂、飛花亂點雙鬟髮、彷彿華鬘瓔珞粧。
自從三鈷入南山、梵唄千年隔世間、無數翁媼來灌頂、彩幡交映紫衣斕。
假字歌成敎澤存、人々皆識大師尊、從來不信浮屠說、亦向龕前謝曠恩。

春風鎮在梵王家、五月殘櫻映夕霞、記取侍輿三日樂、名山禮佛且看花。

竹　　天囚題

虛心是天性、堅節自凌寒、君子求鞭策、勿剪爲釣干、

丙辰梅雨節古月樓上　　天囚彥題

一尊今夜與君同、古月樓頭風雨中、寄語啼鵑休滴血、山榴須盡幾枝紅、

辛酉秋日赴任東京作二首　　碩園郵彥

菲才安分掩柴扉、何料朝冠到布衣、君召臣行不俟駕、夢魂猶向瀛陰飛。

卅載遊蹤寄浪華、老來不意忽移家、他鄉看慣故鄉似、欲去遲々登客車。

懷德堂松山先生爲山長庚申冬武內學士自支那還亦開講席乃賦志喜　　郵彥

經師不易況人師、懷德堂中有表儀、更喜宜卿歸自北、儒風以是足支持、

庚申歲暮有作示內　　碩園居士

裙布釵荆度幾年、承歡尤喜惹慈憐、爲卿未得裁春服、又購奇書補舊編、

癸亥夏日登霧島山有作　　碩園郵彥

扳地五千尺、雲霧繞山根、山如海島浮、龍蟠而虎蹲、東曰高千穗、巍々又嶟々、山腹連平野、

云是高天原、萬世可以王、天祖誥天孫、降臨瑞穗國、羣神是屏藩、一系垂大統、綿延無二尊、

隼人居山下、狗吠守禁垣、子孫忠且勇、士風有淵源、發祥三州地、于今神蹟存、吾來試攀陟、

澡浴靈泉溫、匪惟洗暑熱、鄙吝銷無痕、匪惟銷鄙吝、俯仰感皇恩、列聖深德澤、仁風似春暄、

億兆一心赤、奉事情義敦、君民如父子、恬熙庶類蕃、國體何其美、上下本一元、萬邦森羅列、

不可以比論、吁彼何爲者、戔々多莠言、世道陵夷甚、人心朝夕翻、不知所底止、何以貽後昆、

內省須反本、存養日本魂、堅磐山不動、無窮護帝閽、維新舊邦固、光華永燁々、自唉杞人匹、

不如對一樽、醉來乘逸興、高吟淵乾坤、山樓遐眺矚、雲霧變晨昏、櫻洲如拳石、海門一高墩、
早起登山角、肅然拜朝暾、清明生浩氣、欲復無憂煩、

辭して歸る。時暮色已に逼る。門を出でて顧みれば山は默々として聳ゑ、水は淙々として流る。嗚呼先生の詩思を養ひ、詩腸を洗ひしこの山この水、爾、先生の已に在らざるを知るや否や。

碩園先生の逝去を聞きて

在北京　吉田鋭雄

是の一篇は先生の訃報を聞き、倉卒の間に之を草し、池田の太陽新聞に投じたものであるが、今度懐德堂堂友會に於て、追悼號を印行することになつたので、魯魚の誤を訂して、玆に再錄することにした。十月廿四日鋭雄識す、

昨二日の朝の事であつた。通信部の大西君が新聞を片手に顏色を變ゑて、私の部屋へ走つて來た。吉田君大變だ、西村先生が亡くなつたと。連日の雨に頭重く横になつて居た私は、此の不意の一語にェッと驚いて起上つた。眞箇ですかと云ひながら、指示された北京新聞を見ると、西村博士逝去につき特旨進位があつたと云ふ辭令である。あゝ是は夢でないか。

先生は肺炎に罹られて、一時危險であつたが、其の後危險期を脫して、經過良好とのお宅からの電報を受取つたのは、去る五月の末であつた。私は愁眉を披いて、稍安心をし、一日も早く回復される事を祈り、且

つ其の報の到るを待つて居た處、豈圖らんや此の訃音に接してただ愕然たるのみ。大西君此の新聞電報は虚報ぢやあるまいネ、兎も角日本よりの新聞が來なければ確かな事は判らぬと。午後到着の朝日新聞を看ると矢張り事實であつた。私は遙に東方に向つて默坐瞑目、知遇を受けし過去を追憶し、將たまた將來を想ひ、獨り聲涙を呑んで、言ひ知れぬ心の寂しさを覺ねた。

私が先生を識つたのは、私が明治三十八年大阪朝日新聞に入社して以來の事で、爾來廿年間常にお目にかゝつて、其恩顧指導を受けて居たものであるが、最近の事を記すと、昨年夏私は先生並に諸先輩のお骨折で文部省在外研究員として、支那に留學を命ぜられる事になつた。所で其の發令前に當つて、文部省に於て身體檢査を受けなければならぬので、其の檢査の日が十月五日午前九時と定つた。私は其の電報を受取るや否や池田から急遽東上した。大震災後一箇月を經過した時だが、まだ〳〵非常な混雜、東海道線は二箇所徒歩連絡の際であつた。先生の處へ電報を打つ事も出來ない狀態に在つたので、私は直に品川で降車して、下大崎の先生の處へ駈付けたのは四日の午後三時頃であつた。其の時先生は宮内省に出仕されて、お留守であつたが、暫らく疲勞を休めて居ると、夕景になつて歸つて來られた。私の顏を見るなり例のニコ〳〵した童顏で、『オゝ能く混雜の中を來た。文部省の電報が間に合ふたか、今日來ないと檢査の間に合はぬがと非常に心配して居た。さぞ草疲れたらう、明朝は僕が案内をして伴れて行つて遣るから、早く寢るが宜い』と何時に變らぬ優しきお言葉、有難く思ふて、樓上の先生の書齋で寢さして貰つた。

翌朝早く起きると、先生は已に起きて居られて『今日は指定の時刻に出頭せぬといかぬから、飯が濟んだら直ぐ用意をなさい』と急立てられた。而して先生は早や洋服に着換ゐる用意をされて居る。

支度をして先生に伴はれ門を出たのは、八時前であつた。文部省は其の時大塚窪町の高等師範學校内に在つた。五反田から山手線の電車に乘り大塚車庫前で降りた。此處から高師まで約八九町ある。市内電車は漸く一部分通じて居たが、出勤時間の際とて五六町も人で繁がり、到底乘る事が出來ない『こりや駄目だ、人力

車か自動車がないかな』と先生は物色しつゝドシ〳〵歩かれる、何處にもない。其の中に時間は九時近くなつた。

時に、漸く一挺だけ車があつた。すると先生は、『君はそれに乘つて前に行き給へ、僕は後から行くから……』と云ふお言葉、勸めらるゝ儘に、私はお前へ失禮して文部省へ出頭すると、丁度時間の間に合ふた。がまだ係の人が來ないとの事に、五分程待つて居ると、其の内に先生は後を追ふて來られた。間もなく係の人も來たと云ふ知らせに、先生に伴はれて行くと、先生は『今日は道案内をして伴れて來ました』と紹介の勞を執られ、それから係員から色々の心得事項を聽取し、專門學務局長にも面會をし、終つて十一時から始まる身體檢査場に赴く事になつた。檢査場は東大醫學部病院内に在る。まだ一時間餘あるから、ブラ〳〵歩いて行かうと、燒跡や倒壞の有樣を見物しつゝ大學病院に行つた。

是の日在外研究員の檢査を受けるもの七人あつた。先生は檢査の終るまで待合室で待つて居て遣るからとのお言葉に、甚だ恐縮に思つたが、先生に分れて私は研究員控室で待つて居ると、漸く檢査の始まつたのが正午、それまでは係員から家族の事や既往の疾病等に就て聽取されたり、尿の檢査などで時を要した。遲くなる樣に思つたから、私は先生のお待ち下さる事を辭退すべく待合室に行つた。すると先生は五六種の新聞を讀まれて居たが、『何に遲くなつても構はぬ、待つて居て遣るから……』と云はれた。書時になつてお氣の毒と思つたが、其のまゝ引返した。軈て全部の檢査が終り、檢査に合格した事を聽いて室を出たのは正に午後二時であつた。急いで先生の處へ行くと、先生は眼鏡をはづして、破顏一笑、『隨分長くかゝつたネ、新聞を何れもこれも相場の面まで讀んだぞ、併し結果は何うぢやつた』私は簡單に檢査の模樣を語り合格の旨を告げると、『むゥそれは宜かつたネ、何うも君は平常から身體が弱い〳〵と云つてるが、さうぢやないぢやないか、何れ學問をするものに、力士の樣に倔强なものはない。先づ甲の部ぢや、結構々々、サアお祝に精養軒へ行つて飯を喰はう』とてサクサと先に立つて病院を出で、門前で俥を二挺雇はれた。

精養軒で洋食の御馳走になつて居る間、色々有益な面白い話をされた、今猶耳朶に殘つて、其の音容に接するが如き感をするが、是の日先生が、恰も中學校受驗者の成績を親が氣遣ふ如き慈悲を以て、私を庇つて下された厚意は、其の時私は唯々有難涙に暮れて、十分に感謝の意を陳べる事が出來なかつたが、私は永久に忘るゝ事の出來ない深い衝動を受けた。

晝餐了つてから先生は、「是れから燒跡を見物させて遣らう」と仰有つて、自動車でグル〳〵市中を廻り其の日は先生のお宅で泊つた。翌日は先生の出仕日である。「今日は宮廷を拜觀させて上げるから一緒に來るが宜い」と云ふ事で、九重深き宮城内の御座所近き邊まで畏れ多くも拜觀させて貰つた。終つてから先生は出門證を書いて下され、「今日は是れから明治神宮へ參拜をして後、二三の學者を訪問するが宜い、迷ひ子にならぬ樣氣をつけて……」と道順など事細かに指示された。折から雨が降つて來たので、先生は、僕は車で歸るから、僕の外套と傘を持つて行くが宜い」とて貸して下された。私は遠慮なく二品を借つて城門を出で、指導された行動を執つて、其の日も先生の宅に泊めて貰ひ、翌日はお暇を告げて、仙臺の東北大學へ挨拶に赴くべく出立した。其の時先生は、仙臺の話も聞きたいから歸途再び立寄るやう、との事であつたが、私は「懷德堂の祭典を控へて居りますから、歸途は失禮致します」と云ふと、「如何にも、東京は混雜の際でもあるから、それでは止めるが宜からう」と云ふので、祭典の際お目にかゝる事を約してお別れをした。それから私は仙臺に三日間滯在して家に歸つたが、其の後先生には懷德堂祭典の時に下阪せられ、當日同堂堂友會の發會式に臨んで、一場の講演をせられた。其の講演筆記が會誌に印刻されて、漸く二三日前堂友會から送つて來た許り、私は再び謦咳に接する樣な氣がして、これを拜讀し、さても先生の御病氣は其の後如何であらう、一度お尋ねせねばならぬがと思つて居る折柄、忽ち此の訃報に接したのであつた。私はたゞ〳〵茫然として夢見る心地である。

昨年十二月私は北京に來た、爾來先生からお手紙を戴いたのは二回。一は「碩園珍藏前賢未刻書」と云ふ

圖章を刻らせて送つて呉れと云ふ御注文であつた。それをお送りすると、一月餘り經つた三月二十六日に左のお手紙を戴いた。思へばこれが私に下さつた最後の手紙であつた。

拜啓時下御壯康御勉學の筈と存候、大賀々々爰元無異御安心可被下候、碩園珍藏前賢未刻書の印到着、思の外の上出來、欣悅罷在候、御周旋感謝申上候。今度は北京にて第一等の印人と稱せられ候人無之候哉、可相成文人中の篆刻相頼申度候。用筆相損じ困入候、購入御願致度候。賀蓮青は近來衰微の樣に承及候如何、戴月軒の筆を武内宜卿持贈被致候處、軸より首がとれ申候、是も精工ならざるか、御問合の上、羊毫（下に筆の圖を示し）の形致居候品御求被下度候。賀蓮青ならば義號の大きさ宜布候。戴の方は竹筒に禮義等の符號無之候。御見計被下度候。普通の大字揮毫用に御座候。金三拾圓御送申上候。此内篆刻料（拾二圓位かと覺ゆ）御拂被下、殘金は筆御買入願上候義號の外に大小取交せ御見計希上候。大の方は一本十金位にて宜布候。右御依頼迄早々。

三月二十一日　　時彦

子興盟臺侍史

懷德堂の方も記念文庫建立の企有之喜居候。懷德堂考出版の擧も實現と存候。

貴兄支那語も追々御上達の筈、文章時々御送待入候

右の書面に接して、私は早速賀蓮青の筆を彼此大小取交せお送りしたが、其の到着の御返事は來なかつた定めし病の床に臥せられた爲に、御返事もなく、また此の筆も使はれずに終つた事と遠察する。

來年歸朝後は、直に上京してお目にかゝり、在支中の話を聞いて戴かうと樂んで居たのに、思ひがけなくも今日先生の訃報を聞き、たゞ斷腸の涙に暮るゝのみ。せめては葬儀にても列したいと思へど、雲烟萬里の異境に在る身とて、それすら叶はない。あゝ哀し。はふり落つる涙を揮ひつゝ八月三日夜記す。

松枝町と私

在北京　吉田鋭雄

碩園先生が東京に移られる前まで永年住はれた處は、何人も周知の如く北區松枝町であるが、さて此の町が私に取つては、不思議に深い因緣がある樣に感ずるので、聊か其の由來を記して、玆に追悼の意を表したい。

此の町には、私の舊師市村盈缶（名は元貞、字は剛中）先生が塾を開いて居られた。其の家は實に先生の舊宅から北へ三軒目であつた。舊師は舊懷德堂の末年の敎授であつた並河寒泉、竝に賴山陽の高弟であつた後藤松陰の兩先生に師事せられた方で、懷德堂が廢學になつてから後、帷を此に下して徒を聚め、專ら懷德堂の學風を傳へられた。而して私は此の隣町に住んで居た爲に、幼少の頃から日々此の師の許に通ふて、多年敎を受けたのである。是れ私の此の町に因緣ある第一のものである。

次に先生の舊宅は、もと同心の佐藤某が邸であつて、其の人の子は私と同門の友であつた爲に、常によく遊びに行つた昔馴染の家であつた。先生は佐藤某が移轉後を受けて居住されたものだらうと思ふが、私が先生の知遇を受けて始めて先生の舊宅へ伺ふた時、客間に通された一室は、實に私が同門の友と共に、日本外史や十八史略を溫習した處であつたから、私は甚だ懷かしく思ひ、先生に此の話をして笑ふたことがある。而して此の時舊師は病中ながらまだ在したから、私は先生に舊師の話をした後、何うか一度面會して下されたいと願つたことがある。すると先生は、さうであつたか、近隣に居ながら、まだ挨拶せずに居る。病氣が快くなられたら是非面會して、色々書物を見せて貰ひたいものぢや、と云ふことであつた。私は竊にこれを

期待して居たが、不幸にして舊師は間もなく病重られて歿せられた爲に、遂に交臂間談せらるゝの機會を失したのであつた。是は私の非常に遺憾に思ふた所であつたが、其の後先生は懷德堂考を著され、延いて今の懷德堂が再建せらるゝことになり、而して私は先生の厚眷を蒙りて、創立當初より此處に身を委ぬることになつた。入堂當時私は、舊師が今在さば、如何に喜んで下さることであらうかと暗涙に咽んだことであつたが、これが又私の町に因緣のある第二のものである。

それから尙此の町には、町名の由つて起つた所の一千餘年を經た一株の老松があつた。丈は一丈にも足らぬが、南北に蜒々たる枝を伸すこと二十間餘、宛然臥龍の如き觀を呈した古木であつた。而してこれが丁度先生の舊宅の前に在つたのである。是は私が舊師の許に通ふ頃は、蒼然として常盤に變らぬ色を見せて居たが、年々に枝が枯れて短かくなり、遂に惜しいかな數年前に枯死した。而して今はその根株のみを殘して居るが、これに就て前年同町の靑年團員が相謀つて、此の名松を後世に傳ふる爲に、先生の撰文に係る石碑を其の前に建てた。當時先生は此處の團長であつたさうで、嘗て先生は私に向ふて、俺が團長ぢやから面白いぢやないか、と云つて呵々大笑されたことを覺えて居るが、所が此處に豫て團員中に於て、此の老松の種子を蒔いて育てた一鉢の盆栽を有つて居つた。七年を經たと云ふに、丈未だ七寸に滿たぬが、其の枝を張つた臥龍の如き姿は、實に親木その儘のものであつた。それをば建碑式が終ると、團員は記念の爲として先生に贈つたのであつた。すると先生は非常に喜ばれて、これを卓上に置き、朝夕觀賞されて居たが、煤煙多き地とて葉の色が少し變り、勢惡しくなつて來たさうである。そこで一日先生は私を呼んで、かゝる由緒ある名木を枯らすのは惜しいから、池田の植木師に托して育てゝ呉れぬかと云ふ話であつた。因て私は早速馴染の植木師に相談して、これを預ることゝし、池田に持つて歸つた。而して今にこれは預かつて居るのである。これ私が此の町に離れられぬ因緣のあるものと思はれる。

此の如く私は松枝町に深い奇緣を有つて居る爲に、其の名は私に取つては永久に忘るゝこと出來ないもの

である。而も此の度圖らずも、臥龍の小松の榮ゑと共に、いや榮ゑますことゝのみ思ふて居た先生の仙逝に遭ひ、來年支那留學より歸つて、舊宅の前を徘徊する時、將たまた臥龍の小松を眺むる時、私は更に一層深く忘るゝことの出來なくなつたことを悲むものである。（大正甲子十月二十四日燕京の假寓に於て記す）

西村博士を憶ふ

稻東　猛

博士を初めて御見受したのは大正八年十二月、京都大學の支那學會大會の席であつたと記憶する。當時私は京都のある專門學校で講義をして居たので、一週の四日は京都で暮し、殘りの三日は鄕里に歸つて居た。鄕里には懷德堂の吉田鋭雄氏が居られ、吉田氏は朝日新聞の時代から西村博士に親炙して居られた關係上、同氏を通じて西村博士の事は比較的詳しく聞いて居た。京都では橋本循氏と往來する機會が頻々あつたので橋本氏から大學に於ける博士の講義振などを聞かされた。講義の草稿は全部漢文で書かれ、先生はそれを敎室で朗讀される、學生はそれを筆記するが、漢文であるが爲に面喰つた學生も少くなかつたとか。學生が質問をすると耳の遠かつた博士は手を耳の後につけられて招き猫の樣な姿勢でこれを聞きとられ、然る後諄々と說明されたとか。特に作文文章といふ方面に力を入れられ學生を指導すること親切丁寧を極められたとかいふ風の事を聞いて豫てより一種の懷しみを感じては居た。併し健康などの都合で不幸にして親しく敎を受ける機會を持たなかつた。所が支那學會の大會で博士が楚辭に關する講演をせられるといふので、年來博士

の風采を想像して居た私は午後の博士の講演を非常な興味を以て待つて居た。他の講師の講演が豫定よりも延びたので、博士の講演が始らうとした頃には時計は既に四時を過ぎ、冬の日は早や西の山に近く、短き日は餘り暮れるに間もなかつた。この時童顏の博士は大胯で其長大の軀幹を演壇の方へ運ばれた。この瞬間私の頭にこれが文名天下に名高き天囚先生であるなと思はれた。これが博士に對する第一の印象である。其日の講演は博士が晩年最も心血を濺いで居られた楚辭研究の一端を披瀝せられたもので、時間の都合上一時間足らずで終られたが、極めて明快であつて講演の要旨今も尙記憶に新なるを覺ゑる。そしてこれが私の直接に博士から聞く事が出來た最初の學術講演であつて、同時に又最後の學術講演でもあつた。併し私は此日到頭博士に御挨拶する機會を失つて歸つて仕舞つた。

所が大正十二年四月になつて私は懷德堂の講師を囑託せられ、一週に一時間宛講義をする樣になつたが、西村博士は既に大正九年の秋以來、宮內省御用掛となつて東京に移られ、纔に懷德堂理事、懷德堂講師たるの名によつて三十年來住み馴らされた大阪と關係を持て居られるに過ぎなかつた。隨つて懷德堂に行つても西村博士に敎を請ふといふことは最早や殆ど望まれなかつた。然るに偶然にも博士は此年四月に關西に來られ、大阪に立寄られたのを好機として財津文學士と私の爲に歡迎の宴を今橋ホテルで催された。吉田氏は懷德堂に何か用事があつたので途中で別れて、私だけが先に今橋ホテルに行つた。案內された一室で暫く待つて居ると別室に居られた博士は戶を排して這入つて來られ、慇懃に言葉をかけられたので私も立つて御挨拶を申上た。四年前、京都大學で御見受した時にも博士の立派な體格は群を拔いて居られたが、今向き合つて見て可なり長身の私が尙心持ち仰がなければならなかつた。唯に身長だけでなく、橫幅も相當に廣く、日本人としては珍らしい方の體格であつた。博士は豫てより私の健康の勝れないことを聞いて居られたと見ゑ、色々と親切に尋ねて呉れられた。初對面ではあつたが萬事打ち解けて話され、まるで十年の舊知であるかに思はせられた。その間に松山敎授も見ゑる。今井圖書館長も來られる。財津、吉田の諸氏も這入つて來られた

ので、來られる筈の人は悉く揃つた。席に就いて西村博士の御挨拶があつたが、窮屈なといふ感じは少しもなく、互に隔てなく意見を交換することが出來た。無遠慮な私は其際、懷德堂が復興されてより既に十年に近く、世人も漸く懷德堂の存在を認めて來た。然るに懷德堂の歷史を語つて居る唯一の懷德堂考が今日に至るも尙出版されて居ないのは遺憾な次第である。と述べた所が、博士も笑ひながら何とかしてあれは早く出版したいと思つて居ると言つて居られた。松山教授や、今井舘長も側から懷德堂でも夙にその計劃があるのであるが、尙その運びに至つて居らないと說明して居られた。懷德堂考のことよりして博士は自分には狩獵考といふ研究もあつて、狩獵に熱心であつた時代に書いたのであるが、これは未定稿の儘になつて、まだ世に出して居ないなど話して居られた。

大正十二年十一月四日、懷德堂の記念祭典と共に堂友會發會式があるので私は午前十時に懷德堂に行つた博士も前々日から態々大阪に見ゐて居て、此日も早くから來て居られたと見ゐ、私が行つた時には會議室で多くの人々を相手に談笑して居られた。四月以來、七ケ月目に御會ひするのではあるが、九月の關東大地震、大火事などがあつた後なので、御無事であるといふ普通の事實もこの際特に祝福すべき事の樣に思はれた。私が室に這入ると態々立つて來られて、地震の際に書狀で御尋ねした事とか、吉田氏と私とが編纂した池田人物誌を吉田氏から贈呈せられた事に對する謝辭を述べられ、池田でもあの位の體裁の書物が出來るなら、僕の懷德堂考も至急に印刷し樣、校正は是非君を煩し度いなど言つて居られた。私が幸ひ吉田氏も居られますから二人して御引受しませうと言つたら、いや吉田君は支那に行かれるから、是非どうか君だけでと念を推して居られた。ふと室の一隅を見ると池田の岸上善五郎氏が所藏せる西村博士の十三童時代の寄り合ひ書きの詩幅が懸つて居る。吉田氏が持つて來られたので、私も豫てからこの幅は博士に御覽に入れたいと思つて居た。果せるかな、博士自身に於かれても暫くの間はこの寄り合ひ書きの事が御記憶に上つて來なかつたさうである。後には明治十年の亂後であらうと推定されたが、その幅を見ると松井松堂といふ人の送別の會

に前田豐山先生並に其門下の人々が寄り集つて銘々に詩を書かれたらしい。當時十三童であつた西村時彦先生も其中の一人であつたのである。西村博士の詩は卷頭の寫眞によつて參照されんことを望むが、この詩幅が出て來たに就ては博士は非常に悅んで居られた樣に想はれた。祭典當日の來賓は大抵其幅の前に立ち止られたが、博士は其度毎に十三童時代の面影が何處かに殘つて居る樣な笑顏で一々說明に當つて居られた。岸上君はこの幅を讓つて吳れますまいかなど言つて居られたが、後には岸上氏の請に應じて次の樣な文を其匣に題して居られる。

送行詩合幅、係先師豐山先生及門生諸子作、彥年十三亦在其中、蓋明治丁丑亂後也、攝津池田岸上君購獲之浪華骨董舖、寄示徵言、彥自幼學韻語、稍識文字、師恩廣大矣、而今年已六十、詩書並拙、不見進境、對之赧然、但斯幅有先師之詩、尤可尊重也、

先師諱宗成、字士章、稱謙藏、從事敎育四十餘年、朝廷賞其功、賜藍綬褒章、大正二年病終、享壽八十三、其餘同門諸友亦皆物故、今猶生存者獨有羽生君而已、羽生君爲豫備陸軍步兵大佐、住在東京、一夕同觀、相顧愴然、

大正十三年一月　　碩園西村時彥敬觀拜書

右の文章が出來てから今日迄尙一ケ年を經過せない。それに早くも故博士追悼の爲に筆を執らねばならないのは私等も亦相顧みて愴然たらざるを得ない。さきごろ追悼錄の卷頭に揭げる爲に何枚かの寫眞を西村家から拜借したが、其中に右の師友送行詩合幅中の、十三童書きの詩の寫眞が混つて居た事は生前如何に少年時の寄せ書きを懷しがつて居られたかを充分に說明出來る。

祭典の日の夜汽車で、博士は東京に歸られると聞いて居たので、晩餐會が濟むと私等は直に梅田の驛に向つた。博士の乘られる汽車迄には可なりの時間があつた。冬の夜の嫌な私にも此夜に限つて別に待遠しいといふ感じも起らなかつた。博士に對する名殘の惜まれた爲もあらう。懷德堂關係の人々が多勢で時間の過ぎ

るを知らなかつた爲もあらう。博士は一々の人に輕く會釋をされて車中に入られたが、尙窓から顏を出して見送りの誰彼と談話を交換して居られた。やがて時間が來て汽車はあの親みのある博士の笑顏を乘せた儘、東に歸つて仕舞つた。併し今にして思へばあれが實に大阪の地を踏まれた最後であつた。

本年の六月であつたかと思ふ、懷德堂の講義に行つた際に西村博士が肺炎で御惡かつたのだと聞いた。早速御見舞狀を出した。程なく奧樣から御返事があつて大分御よろしい樣に書いてあつた。けれども博士御自身が書いて居られないのを見ると尙御全快ではないらしい。併しもともと偉大な體格の方であるから、やがて御全快にならう位に思つて左程心配もして居なかつた。所が七月の下旬になつて吳博士の病院に入院せられたと聞いて再び心配をし始めたが數日後の新聞は立派に博士の肖像を揭げて逝去を報じて居る。私には未だに昨年十一月大阪を去られた時の博士の笑顏が眼前にちらつく樣に思はれるので、其訃音も暫くは虛報の如く思はれて仕方がなかつた。併しながら八月十日の夜、博士の遺骨が遺族の方々に擁護せられて大阪驛に着せられた時には、流石に出迎へた私等の心には沈痛とか、悲哀とか、無常とかいふ種類の言葉を以ては到底形容する事が出來ない一種の感情から暗涙に咽ばざるを得なかつた。

私は中學生時代から博士が大朝紙上で發表されたある種のものは讀んで居た。現に懷德堂考の後編や、南曲琵琶記などは今も切抜帖に殘つて居る位で、隨つて博士の盛名は早くから聞いても居り、間接に敎へられたことも少くないが、不幸にして敎室其他で直接敎を受ける機會は終に捕捉し得なかつた。この點から言へば因緣の薄い方であつて、博士との關係も懷德堂の講師以後の事である。然るに博士の五十日祭も濟まされた頃に遺族の方から送つて吳れられた小包を開いて居ると、故博士の遺志に據つて贈られた影印延德本大學であつた。稀覯の珍書であるとは豫てより承知はして居たが、僅に壹百部位を影印せられるのでは、故博士の知己友人の方々の一部分に頒布せられるに止つて、後學の私等に迄寄贈の恩惠が及ぶとは夢にも思つて居なかつた。延德本大學を手にしては熟々と知遇の淺からざりしを思ひ眞に感激に堪へない。今一度博士にお

目にかゝつて御禮を申上たいと思ふが博士は最早や此世の人でない。せめては私に依囑して居られた懷德堂考の校正をやり、故博士の一年祭迄に出版される樣に手傳つて、恩顧に酬ゆると同時に博士の靈を慰めたいと思つて居る。

碩園博士を追憶するまま

懷德堂教授　松山直藏

碩園博士と余との交際は比較的晩年に屬し、同地に居住して相往來せしは、僅に五年に滿たざる程なれば深く君を知るものとは謂ひ難いが、幸に君が心力を傾注せられた懷德堂に依りて、親交を辱うすることを得たれば、普通の交際とは異りて、格別に親密なることを得たと思ふ。今交際の迹をたどりて、君を追憶し、余の眼に映じたる君の人格學問の一端を敍べて、聊か追悼の意を表したい。

君を始めて見た事は隨分古い事ではあるが、奇妙にも其の當時の事を存外明確に記憶して居る。

明治三十一年八月二十七日、先師篁村島田先生歿したまひ、越にて三十一日、狩野桑原などの諸先輩と靈前に通夜を勤めし其日の事なりしと覺ゆ。吾等同窓一室に相集り、狩野子溫が筆を執りて、代表の弔辭を草しつゝありし際、誰云ふとなく、夫の『屑屋の籠』で文名を馳せた西村天囚君が來た、彼は社用のため、明日の葬儀に列することが叶はぬのださうだとの言が傳はり聞いた。君は云ふまでもなく、島田先生の雙桂精舍に學び、後また大學の古典科に入りて、先生に敎を受けられたのであつた。余は是の時聞くままに、眼を

擧げて、遠く君の瀟洒たる風采と偉大なる軀幹とを望み見た。此れがそもそも君を見たことの始であつた。しかし是の時は何等の言をも交へなかつたので、交際を結ぶの機緣とはならなかつた。當時余は未だ君の尊敬すべき大なる人格なるを知らなかつた。で單に文才の勝れたる人に過ぎざるが如くに考へて居た。爾來春風秋雨十八星霜を經て、大正五年に至り、ゆくりなくも、懷德堂といへる、媒介によりて、君との交際の結ばるるに至つた。當時余は廣島に職を奉じて居つた。其年の七月の末であつたが、懷德堂記念會理事今井貫一君余と舊同窓たりし關係から、會を代表して、廣島に來て懇ろに招聘の意を傳へられた。其時今井君の談によりて、西村君と懷德堂記念會との關係を詳しく知ることを得たると同時に、君が純然たる學者風の人であるといふ事をも聞き知つた。かくて余は立派な歷史ある名譽の後を辱めんことを虞れ、一旦は固辭せしも、頻りに懇請せらるるまま、遂に其聘に應ずることとなり、退官の願の聽るさるるを待ち居たる際、九月十六日附で、君より初めて手簡を頂戴した。君は當時記念會の理事であり、招聘者の立場に在るためでもあるが、其の手簡は後輩なる余に對して、極めて慇懃鄭重なる文面であつた。而して其要旨は退官願の一日も早く校長の快諾を得んことを切望し、尙ほ會の事業の節目二三を報ぜられたのであつた。これがそもそもの交際を辱うした始である。やがて退官の願聽るされ、其年の暮に着阪した。是の時君は梅田驛頭に出でて余を迎へられ、而してここに始めて親しく初對面の挨拶を取り交はした。十八年前一瞥せし時の瀟洒たる風采は影もなく、見るからに其服裝極めて質素にして、宛然個の村夫子であつた。しかし其の簡短なる挨拶の中に、云ひ知れぬ溫味あり、且つ其の態度の眞摯にして有禮なるを見て、始めて曩きに單なる才子と考へしことの大に謬りしを深く心に愧づるやうに覺えた。翌日余は市の南郊聖天山下に假寓することとなつた。君は夫人外弟を同伴し、來りて寓居を訪ひ、何呉れとなく親切に、至りて瑣末なる事に至るまで、手傳ひ呉れられた。かくて勿忙の中に歲も暮れ、翌大正六年正月二日には君は再び來訪せられ、余を伴ふて懷德堂先師儒五井蘭洲先生及中井家諸先生の墓に東道の勞を執り、途上色々と先師儒の遺事を物語られた。其日の事であつた。

余は君に勸めらるるまま、始めて松々枝町なる君の御宅を訪問した。其の時第一に挨拶に出でられたるは太孺人、次に夫人、次には吾が子の如く愛して世話をせられて居た西村康哉君後醍院良正君等で、何れも袴を着けて出でられた。かかる間に和氣藹然として而かも禮儀正しき儒者の家庭の模樣が察せられた。其中に追々と學問上の意見を聽くの機會も多くなり、相往來することも繁くなつた。曩きには單だ詞章家とのみ考へて居つたが、段々接して見ると、決して左樣ではなく義理をも重んじ、考據をも重んぜられた。單に學問研究の上に於て義理を重んずるといふ丈けではなく、日常踐履の上に於て、禮を貴び義を重んずる人であつた。かやうにして君に對する敬愛の情は自から湧き來らざるを得なかつた。ここに又特に君と親しくなつた一の事情があつた。それは余の家庭の事情が君と相似るところがあつたことである。君も余も老母があり、子なくして親戚の子を養ふて子として居つた。かかる事情から家と家との交が親しくなつた。君が太孺人に事へて至孝なる、其の愛を余が母にまで頒たれた。太孺人の觀劇または文樂行には必ず母の同行を誘引せられ又年末年始などには必ず後醍院西村兩君を挨拶に寄越された。それは懷德堂の生徒であつたから、師に對する禮としてであつた。こは當然の事ではあるが、師道の壞れ禮儀の廢れた今日にありては、むしろ稀なことである。大正八年不幸にして、余は母を喪つた。是の時、君は百金を懷にして來られ、「隨分永の御病氣で、定めし御物入りも多かつたであろう、これは些少ながら、余が市より潤筆の謝禮として受けしものなれば、これを御見舞として差し上げたし、有無相通ずるは朋友の誼なれば、決して遠慮あるべからず」とて余に其の金を贈り呉れられた。余は君の至孝なるよりこの忠恕の行あるを深く感じ、之を辭するに忍びず、感謝して之を受け、喪を終へて後、其の厚情を謝して之を返した事があつた。又大正十二年余は上京して君の寓居に數日間滯在、欵待を蒙つたことがある。君は同袍の誼に厚く、有無相通ずるは朋友の義とは口癖のやうに言はれたところで、余の上京する時には必ず其家に宿することを勸められた。而して其の欵待は義理や表面ばかりの欵待ではなく、心からの欵待であり、主人の欵待ばかりでなく、一家全體の欵待である。これは君の德の

しからしむるところ、自からこの美風を成したものであらう。客を欵待せらるることは已に大阪に於て相往來する間にも十分感得せらるるところであつたが、大阪にては永くも數時間に過ぎなかつたが、今は數日間に亘りてまた同樣であつた。これは君の眞に友を愛し友に親しまるる美德に由ることと思ふ。歸阪の際は着袴、五反田驛まで見送られ、令息をして東京驛まで見送らせ、荷物の世話を爲さしめられた。其の懇切にして禮を盡くさるること概ね此の類であつた。

君は余に對して、禮聘したる敎授として禮讓ある態度は終始毫も渝らなかつた。君丈けの才學あり閱歷あるものは容易に後輩なるものに下ることの出來るものではない。殊に懷德堂を興したといふ關係もあることなれば、普通の人なれば必ず倨傲の態度に出づるものである。しかるにも拘らず、君は理事即ち世話役を本務とし、講師としては敎授を助くるものとの考を終始離さず、堂內に於ては常に敎授を一尊と立てゝ心から敎授を尊び之に下られた。これはたしかに君が儒學を修めて禮義を重んぜられたに由ることと思ふ。

君は懷德堂を愛すること猶ほ子のごとくであつた。懷德堂を愛するの情が厚かつた丈け、それ丈け余に對して親切であつたかと思ふ。君と余とは性格相反するものが多かつた。君は濶達であり、余は迂拘である。君は極めて陽氣であり、余は極めて陰氣である。君は極めて交際好きであり、余はむしろ獨居を好む方である君は談論を好む方であり、余は談話の種の少き方である。かかる反對の性格であつたにかかはらず、君は能く余を容れて終始渝らなかつた。これは全く君が懷德堂を愛するためからであつたのであらう。

君は懷德堂を愛するところから、余の講義振につきても親切に批評し且つ適切なる注意を與へられた。その注意の一は雜書を讀みて腹笥を富まし、引喩などの豐富にして講義に面白味を添へることであつた。凡そ講義は誠を積みさへすれば自から人を感せしむるものなれば、それ以上術を用ふるの要なし、徒らに面白ろく聽かせやうなど力むるは畢竟講談師落語家者流の爲すところであるといふが余の講義に對する考であつた。されど如何に誠を積むとも、其の蓄ふるところの智識淹博にして、左右逢源の妙あるに非れば、深く人を感

せしめんこと難し、君の言誠に理なりと當時君の忠言を感謝したが、今に其の注意を實行することが出來ぬことを遺憾に思つてゐる。一日茨木の方面に茸狩に同行せしことがあつた。途中松浦靜山侯の甲子夜話のことから今大路道三の狂歌などを交へ、種々な話を面白ろく流暢に話され如何にも面白ろく、小供が老爺の昔噺を聽くやうに、倦むことを知らなかつた。君の雜書博渉の功德妙味が切に感せられた。或る時の話に朝日新聞社に於て、社同人の地方出張講演が試みられたが、自分も一行に加はりて、姫路附近にて講演を行つた。行るまでは何の事やあるべきと思つてゐたが、さて行つて見ると困難なことが判つた。一行中には隨分上手な連中もあつた。此れ等の連中が先きに行つて、自分は其の後座を承つた。ところが三人去り、五人去つて自分が演說を終る頃には、聽衆幾何も殘つて居なかつた。是の時始めて演說の術容易ならざることを悟つた爾來回を重ぬるに隨ひ、演說に興味を感ずるに至つたといふことであつた。しかし君は講演の方よりは座談の方が妙であつた。如何に長座をしても談話の盡くることはなく、人の氣心をよく洞察するの明があつた。それ故人をして毫も不快を感せしめないで、覺ゑず長座せしむることが多かつた。これは君が生來談を好まるると、快活にして胸に城府を設けられなかつたとに由ることであらう。その話は時には妙文を綴れるがごとく、鏗鏘の音をなして、聽者に快感を與ふるものがあつた。議論の際には、條理整然として紊れず、嚴として犯すべからざるところがあり、又閑話の際は、滑稽突梯人の頤を解くものがあつた。君は眞に座談の雄であつた。君の德行學問文章其他に關して、平生敬服せることは、多多あつて、一々擧ぐることは出來ぬが今追憶するまま其の二三をいふと

君は後進を引き立て、之を提撕誘掖すること實に親切を極めたものである。武内誼卿の才を愛し、其の學を大成せしむるためには、心力を盡さるるところがあつた。又吉田士興の如きも、君の提撕誘掖により、地方文獻の研究に沒頭して、其の成果を收められたのである。特に斯學の後繼者を養成するといふ點につきては、常に念頭を離されなかつたやうである。本年三月三十一日の手簡に

過日は葉書被下堂友會員と京都邊御出遊之趣欽羨之至御座候東京も兩三日前迄奇寒異常之處一昨日より晴れて昨日は春來の暖氣此分ならば櫻も早からむと被存候小生も昨日は養女と姪女とを伴ひて東遷以來の大運動相試み上野より隅田川白鬚邊龜井戸迄も足を延ばし被服廠址を弔ひて歸申候向嶋は人家打續き櫻花一本もなし名所の廢れゆくやうに何事も昔の面影なく可歎可嘆上野動物園にて二兒を生める獅子の態度恩威並備りて大人君子然たるには感心仕候呵々

とあり。大人君子は君の理想とせらるゝところにして、人の才を見ては其才を成すに力を吝まれなかつたことは、君が誠に得難き教育家であることを語るものである。

君は學問に熱心なるところから、書籍を求むるためには、財を吝まれなかつた。文求堂杯から書目が來ると其の氣に入つたものは直に電報を以て注文せられた。又有用にして容易に得難いもので、又非常に高價にして個人の手に合はぬものなどは、府立圖書館などに勸めて購入せしめ、稀覯の良書を逸せざるやう力められたといふことである。一部の書の註釋なども、有らん限りのものを集むるといふ風があつた。君が晩年楚辭類の書を集められたといふことは有名な話であるが、其の種類は約壹百種に上つて居る。今日にて天下恐らくに君に及ぶものはあるまい。又薩摩板の書を集めて、今日にては容易に獲難いものが隨分に集められ、碩園文庫の重きをなして居る。是等はみな君の學問に忠實熱心なるの致すところで、或る一事を爲し始むるときは、之を徹底的になさでは已まぬといふ性質に由ることではないかと思ふ。これがまた何を研究するにも、其の資料を出來得る限り博く蒐集するといふところにあらはれて居る。君の遺筐には其の研究の資料が隨分に多く存して居る。それ等の資料からして、日本宋學史懷德堂考學界の偉人などの名著が出來上つたのである。

君は漢學の學術的研究丈けにて滿足せず、之を常識的德教として踐履の上に之を役立てやうとの考が常に腦裡を支配して居つたやうに思ふ。從つて姚姬傳の所謂義理考據詞章の三の中、詞章は君の得意とせられま

た自ら任せらるゝところであり、實際他人の追隨を許さざるものがあつたが、決して詞章の一面に偏することなく、義理考據の重んずべきことを認め、特に義理の缺くべからざることを說かるゝことを屢々耳にした。

君は『僕は經學は遲がけの勉强である』と何時か話されたことがあつたが、勿論それは謙遜の詞で、其の素地はとくに出來てゐたに相違はない。しかし自家の學問として深く力を入れられたのは、むしろ晩年のことであつたかと思ふ。經類の書は余が君と交を辱うした大正五年の暮以來、特に多く增加したやうである。これは大儒としては義理考據詞章の三を具備せねばならぬといふ考から、經學卽ち義理の學に深く入られたのであらう。懷德堂では、自ら講師となりて講せられた最初の敎科書は、自ら編せられた經子簡編といふものであつた。これは夫の曾國藩の經史百家簡編に倣ふて命せられたものであるが、其の編せられた諸篇の採擇は君の頗る意を用ひられたものなれば、ここに之を擧げて見やう。

經子簡編上卷

（曾子）大孝篇（子思子）天命之謂性章、哀公問政章、大哉聖人之道章（孟子）養氣章、存心章（荀子）勸學篇、性惡篇（管子）牧民篇（莊子）逍遙遊篇（國語）晉語、公父文伯之母章、武公伐翼章（左傳）鄭伯克段于鄢、子產論尹何爲邑（毛詩）周南關雎、召南鵲巢、詩義

（周南）桃夭（召南）行露（邶風）谷風（衞風）氓（王風）君子于役（鄭風）女曰雞鳴、出其東門

（唐風）葛生（陳風）衡門（小雅甫田之什）車舝、

右夫婦之詩

（邶風）凱風（魏風）陟岵（唐風）鴇羽（小雅鴻雁之什）斯干

右父子之詩

（王風）葛藟（唐風）杕杜（小雅鹿鳴之什）常棣（小雅甫田之什）頍弁（小雅魚藻之什）角弓

右兄弟之詩

（小雅鹿鳴之什）伐木（小雅谷風之什）谷風（大雅蕩之什）抑

右朋友之詩

秦風、無衣（小雅鹿鳴之什）鹿鳴、天保、出車、車攻（小雅鴻雁之什）庭燎（大雅文王之什）文王（大雅蕩之什）烝民

右君臣之詩

（魯頌駉之什）閟宮

右告於神明之詩

以上上卷であつて、其中卷下卷を編するに至らずして、竟に已むだのであつた。其の主意は經子の粹を取り、之を彝倫に本づけて、道義を講明しやうといふにあつたことは明かである。

君が懷德堂で孟子を講ぜられし時、浩然之氣の章の夫志者氣之帥也氣者體之充也の句に付き、通解に滿足が出來ぬといふ話が出た。余はかつて東京にて或る學者から聞いた說を紹介した。それは充を充塞するもと解し、帥字と相對して、名字と見る說である。君は其の說は大變面白いといつて、次回には余より聞きたることを明言して、前回の說を補はれた。その虛心坦懷人の善を取るに勇なるの態度は當時余をして甚く感動せしめた。

又君は方東樹の漢學商兌を愛讀せられ、其の異本を多く集められた。一日余の藏する一本を覽たしとの事で、之を送つたことがあつた。僅に一日の間に全部其の異同を校勘して、しかも余の藏本の上欄に攷異を書き記るされて、返された。其の讀書力の敏なるには一驚を喫した。かつて古人が五行並下といふことがあるが、自分は迚も其の眞似は出來ないが、二行は並下することが出來るといふ咄があつたが、この時成る程と頷かれた。

余樸拙文を善くせず。また少年時代より詩文を作るといふ舊時代と、百科の學を修むる新時代との過渡期

に育つた。而してむしろ新時代に多く屬した關係から、餘り多くの漢文を作ることもなかつた。其上早くから才藝詞章を輕視するの風があつたため、其の方の修養には餘り力を用ひなかつた。懷德堂に聘せらるるに及びて、時々漢文を作るの必要が生じて來た。爾來君と狩野子溫とに文を問ふことを常とした。當時君が故籾山衣洲翁と結びて建てられてゐた景社といふ文會があつた。遂にそれに引き入れらるるやうになつた。或る日君は余に向つて『君一つ本氣に大に文章の方をやられては何如』といはれた。またある時は手澤ある古文辭類纂などを贈られた。皆余に詞章の一面を勸めらるる好意であつた。余は當時日暮れて途遠き感もあり、必要なる場合と景社例會に折々文を作る位の外は、別に文を作りて益を請ふこともなかつた。今となりては折角の君の好意を無にしたことは返す返すも殘念である。

大正十年、宮內省御用係を仰せ付けられ東京に轉住せらるることの略ぼ內定せし頃であつた。或る日來訪せられて晩餐を共にした。其の時の話に、今回宮內省に行くやうになつたのは、松方老公の强いての御勸であり、再三懷德堂の關係もあればとて、辭退はしたが、年に一兩回は或る期間懷德堂に至りて講ずるもよしとの條件まで許されたので、此上達て辭退もいたしかね、已むを得ず參ることなるが、何れは大阪に歸還したき考なり、已に墓地も阿部野に買求めたる位にて、是非大阪に晩年を送りたく思ふとの事であつた。而して氣にかゝるのは矢張り懷德堂の事で、色々と堂の事につきて話し、且つ余の講義振などにつきても希望があつた。後其の年の十月十二日の書信に

上略私事不肖ながら今日迄在阪中御力に思召被下候處東上之爲に不少御落膽に無之哉と推測仕候難有仕合に御座候乍併東京と大阪とは一夜の近距離に有之萬事御相談を受け乍不及微力を盡し申度何卒在阪同樣に被思召懷德堂の敎務一切御担當奉希候過日御講義振に關しては無遠慮に鄙見申上置候通朱子學者（記者云余は朱子學者と云ふ課にてもなきが君よりかく命ぜられたるなり）の本領として義理の講述に御心を用ひ被下度聽講生をして心得體驗の學を得せしめやがて躬行の本と相成候樣不堪希望候我兄は義理の學宜卿（記者云宜卿は東北大學敎授にして懷德堂の講師たる武內義雄君の字なり）は考

證の學を以て專心講究を積まれ候はば中略心得體驗は世事人情に通じ候事も必要と存候折に評議員中の有心人御訪問ちと社交方面にも御心掛被下候はば大幸かと奉存候是は學者としてはイヤなものの樣にも有之候得共學問在日常人事とする以上必しも避くるを要せずと奉存候下略

これ皆君が懷德堂を愛する眞情より迸り出でたるものである。しかるに、余に對して望まれし事も、未だ其の一だも實行し得ざることは、君に對して、其の依任に負くの罪深きを感ずることである。

君から最後に戴いた手簡は、本年五月二日、丁度君の病床に就かるる十日前のであつた。

四月十三日付之貴書正に拜受今日は御返事をと思ふこと幾度なるを知らず實は三月末ゟ思立今春西遊の希望公用の爲に畫餅と相成中旬比に至り稍暇日を得候處此頃ゟ腸胃病にて服藥慢性の恐ありとて安靜を命せられ候六丁の坂に至つて俄に老懶相覺候儀殘念之至遂に御返事延引申譯無之候御海恕被下度尙又西遊之空言と爲りしに就ては堂友諸子に宜布御傳言可被下候中略講演集之件誠に美擧に有之乍併御一人之努力にては永續困難に有之且又小生等も餘り我兄を勞するに忍びず是は學報とか堂報と歟稱して一年二三回に止められ吉田君歸朝の上回數增加如何お互に年を取ると過勞が戒所得戒之在得の得は事業を貪るも亦同段ならんと被存候如何中略今月十八日は仙臺之釋奠昨夏以來出講之宿約果し得るや否を氣遣居候近來一週二回島津長公子（年十四）へ侍讀一回は孝經を講じ居りいやはや口業專門の躰御憐咲可被下候下略

右は書庫研究室の建造、文科講義の擴張、講演集の發行、斯學專門學者の養成の四事業を懷德堂記念會擴張事業とする事、上聞に達し、畏くも御下賜金を拜戴せる事なれば、一日も早く此等の事業を實現して、聖恩の萬一に報い奉らんと計畫し、書庫研究室の建造及講演集發行の二事順調に進捗しつつある委細を報せし返事であつて、君は余が功を貪り過勞に陷らんことを憂慮せられたのであつた。其中講演集の事は、君は毎月發行のやうに誤解せられて、書信中に云はるるやうの心配があつたのである。而して仙臺釋奠講演履約

の心配は竟に識を爲して、五月十一日病床に就かれたまま、再び起つことの出來なくなられたのは誠に痛ましき極である。

懷德堂の事業は微々たるが如きも、大阪の文化の上に貢獻することの大なるは、百年の後必ず識者の認むるところとなるであらう。この事業を起しし原動力はたしかに君の懷德堂研究に由ることと思ふ。而して堂の事業の進行發展し行きしことも、君の熱誠に由るところ大なるものがあつた。されば懷德堂再興の一事丈けにても、君はたしかに大阪文化の恩惠者である。君等の力によりて、懷德堂先師儒が百五十年後に表章せられたやうに、百年二百年の後には、必や君の功績が大に表章せらるる時が來ることと思ふ。

君が懷德堂の樓上にありて、集ひ來る聽講生を望み見て、常に莞爾として、王公の富貴もこの樂には換え難しと云はむ許りの面持にてあつた面影が、今猶ほ眼前に髣髴たる心地がする。君晩年堂に歸還して、是の樂を復びせんとの志あり、余も亦驥尾に附して、君を助けんことを期せしに、竟に其事を見るに至らずして長逝せられしは、實に千秋の恨事である。

西村博士を憶ふ

熊本五高生　後醍院良正

現在の私が私の七つであつた時を顧ふ時、まだ四尺にも足らぬ者が体不相應に大きい背嚢を背負つて偕行社の小學校に出てゐた。我ながら無邪氣な姿を想像する事が出來る。その時私は既に西村先生の下に預けら

れたのだ。丁度私が小學校に入學した時父は京都に轉勤した。そのため一家は全部京都の方へ移つた。そして私丈け一人大阪に殘された。それから中學五年の秋に至る迄足掛け十二年私は毎日西村樣の門から出て門に歸つた。誰にも懷かしい幼少時代、私にとつては殊更に思出深い又強い印象を刻みつけた。十數年以前の記憶を辿る時可成ぼんやりしては居るものゝどうしても忘れる事の出來ない今日尙判然と眼前に浮び出るものが數知れずある。

私のみならず兩親まで、いや西村家の親族は皆西村先生を呼ぶに『おぢ樣』と云ふ代名詞を用ひた。この『おぢ樣』といふ平凡な言葉の概念は決して父母の兄を伯父といふとか何とかそんな形式的な意味ではなく、形式を離れた唯親しみの情から自然に迸り出た親稱である。いつから誰が言ひ初めたかは知らないが何の不思議も感ぜずに私は小さい時からおぢ樣おば樣と呼んで殆んど兩親にも等しき親しみを感じてゐた。だから世間の人が考へてゐるかも知れぬやうな西村博士といへば漢字その者のやうな人との考は寧ろ私には不適當のやうに考へられる。

まだ私が小學校に通ひ始めた頃だつた。私は學校へ行くのが嫌でならなかつた。毎朝のやうに玄關に立つてはだだを捏ねた。『俺がついて行つてやるから一緒に行かう、さあ、男がそんなに泣くもんじやない…』かう云ひ乍らおぢ樣は大きな体を運ばれた。私は手を引かれ乍らしぶ〳〵附いて行つた。『學校の門まで一緒に行くからそれからは一人で行くんだぜ』門まで來ても一人で行かうとはせない、數歩這入り込んでは引きかへして來る。『おかしな奴だなー』と笑ひ乍ら到頭門の中まで附いて來られた事を覺えてゐる。昨年も東京に訪れた時この話が出て笑はれた。『今でこそ大きくなつてえらさうな顏をしてゐるがあの時はめい〳〵泣いてゐたものだ』

最初私の部屋として與へられたのは祖母樣の部屋だつた。だからおぢ樣も讀書に倦み疲れた時には氣晴らしに出て來ては私を相手に揶揄つては祖母樣を笑はされた。新聞社から歸られてもすぐこの部屋に這入つて

來られる。宴會等から歸つて土產物を開かれるのもこの部屋『これは祖母樣に丈けのお土產だぜ、お前のとは違ふ』等と巫山戲ては笑つて居られた。

私が十歲の時だつた。お樣ぢもそろ〳〵漢學の素養を作らせやうと考へられたのだらう。或日夕飯が濟んでから『お前に漢文を敎へやう。この本をこれから每晩御飯の後で少しづゝやる。箸をもつてお出で』と私の前に出されたのは黃色い表紙の薄い本だ。早速その晩から始まつた。『三字經、人之始、性相近、習相遠、……』先づおぢ樣が先きに讀まれる。續いて箸で一字一字押しつけ乍ら讀み返す。『人間と云ふものは生れた時には皆その性質は同じであつたのが色々な習慣のためよくもなり惡くもなるものだ』簡單な解釋をつけ加へ乍ら進んで行く。時には幾度も引かゝる事がある。その時にはさすがにおぢ樣も澁い顏をせられた。併しこの事がおぢ樣の唯一の食後の樂みとしておられた。幾晩かかゝつて讀み上げた。『今度は之を筆で寫せ、每日一枚か二枚づゝ叮嚀に書くのだぜ』一生懸命になつて寫した。その時分からだつたらう習字をせなければいけないとて唐紙に詩を書いて渡されたのは、その最初の詩は『月落烏啼霜滿天云々』であつた。この樣にして半ば寺小屋の面影の殘つた事をやらされた。だがその時は窮屈と云ふ感じも起らなかつた。

中學に入學した年兩親は再び大阪へ歸つて來た。併しおぢ樣おば樣は私を手離さうとはせられなかつた。矢張同じ門から出て中學校に通つた。その時は康哉兄と一緖だつた。『お前達二人はこれからは學校歸りに懷德堂に寄つて四書の素讀をしてはどうか』饅頭でももらふ時の樣に尻輕ではなかつたが、云はれた通り一週間に三回許通つた。素讀が一通終つてからはおぢ樣の孟子の講義を聽く樣に言ひつけられた。講義が濟むと三人ぶら〳〵散步がてら歸つて來る。『どうだつた今夜の講義はわかつたか』『はい』といふ返辭はおぢ樣を喜ばせた。併し一度餘り眠い事があつたので『今夜は眠くてわかりませんでした』と何氣なく言つたのが大變機嫌を損つた事がある。

斯樣にしておぢ樣は十年餘といふ可成長い歲月私を全く我子として愛し敎育をせられたのだ。中學五年の

秋遂に別れなければならない時が來た。おぢ樣は住み馴れた大阪の地を去り東京に移られた。その出發の朝私は學校へ出る前おぢ樣の前に坐つて涙交りに『永々お世話になりまして有難う御坐ゐました』とやつと之丈けの言葉を云つた時、おぢ樣の顏にはいつもの樣に明るい色は見えなかつた。『休にはやつてお出で、體を大事にして勉强せよ』この簡單な別の言葉は愛情の結晶の樣にも思はれた。

一昨年も昨年も夏休には東京へ行つた。いつまでも子供扱にされる。それは丁度親が我が子をいつまでも幼兒の如く考へる樣に、昨年のあの大震災當時も私はおぢ樣の處に居つた。『俺も今夜は夜警に出てやらう』と鉢卷をして我々と一緒に門前に椅子を並べて坐はられた事もある。

『來年の夏休には又參ります』と云つて別れた。その來年訪れた時のおぢ樣の姿は余り悲慘なものだつた。病床に呻吟せられるおぢ樣は最早以前のおぢ樣ではなかつた。死は既に迫つてゐた。七月二十九日、遂に臨終の日は來た嚴肅な死の刹那暗い病室には大きな悲劇が演ぜられた。あれ程孝養心の强いおぢ樣も老いたる母に先立ちて他界へ旅立たれた。大いなる矛盾。私は過去の感謝と同情のためにたゞ言葉もなく涙を注ぐ許りだつた。私は恐らく永久に七月二十九日を忘れる事は出來ないだらう。今このペンを走らせてゐる下宿の壁にはおぢ樣の寫眞が掲げてある。その傍にはおぢ樣が使はれた大弓が眠つてゐる。この記念すべき大弓は默々の中に『射似于君子』云々の句を私に敎へてゐる樣に思はれる。

西村先生を偲びて

太田勘兵衛

大正十年の秋先生は畢生の御事業とせられて有る懷德堂記念會の講義を一時御休止東上されました時、聽講生等は一夕の茶話會を開きまして御名殘を惜みました。先生も童顏破笑御愉快に御受納下されましたと同時に吾々一同に至極平易に心得体驗を力むべきを說き諭され、尙ほ講義も出來ぬことなるが復た幾年の後には歸り來て堂に講ずる機有る可しと告げられ翌日梅田驛頭先生を見送りたる吾等に向て車の昇降臺に立たれ猶老翁の兒孫に對するごとき笑顏を賜ひて東上せられました。昨年の大震火災の御見舞に對し人も家も無事との御返信あり尋て堂友會發會式には生誕せし愛兒を見るが如き心地にて遙々西下して式に臨まれ懇切なる敎訓を垂れられました。爾來吾々は先生の御歸阪を一日千秋の思をして待つて居りました。本年五月中旬御微恙の便り有りても只御當分の事と思ひ七月上旬御腦病との事を承りても深い心配も致しませなんだ。それは先生の御平素の御强健に信賴して居たのであります。而かるに同じ月二十九日夕御危篤との報を得て初めて驚きと哀みとが一時に作り身も世も有られぬ心地が致しました。翌參十日には萬事休す、永田理事長に隨行して上京致し、八月朔靑山齋場にて從四位勳四等文學博士西村時彦柩との銘旗を拜した時には感極まりて自失致しました。漸く場所柄に心附きて玉串を獻じ殘り惜しくも退下致しました。一介の愚夫すら先生の御感化猶斯の如くであれば、先生の御德の及ぶ處大なる者有るべしと察しまつる。

御母君の御心を慰め孝養を盡し參らせん爲め內府に宮仕せられしに今は其母君を遺して逝きませし先生の靈如何にましまさん哀れにも悼しく存じ奉る。私は先生が大正九年十月貳拾七日永田大八の御執成にて高津小學校で御講演下された敎育に關する勅語の平易なる御解釋を忘れず本堂の主旨と先生の御示になつた心得体驗の工夫とを體し先生の御恩に報い度と存ます。